

県営特殊農地保全整備事業（田之浦地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

大長野B遺跡

白木八重遺跡

丸岡遺跡

1996年3月

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会

序 文

本町は埋蔵文化財包蔵地が多く、「縄文銀座」と称される通り、縄文時代の遺跡を中心前川、安楽川沿いに約200ヶ所の周知の遺跡があります。

これらの遺跡は、農業基盤整備事業あるいは宅地開発等の開発行為により、確認調査が実施され、貴重な資料を提供するとともに遺跡の性格が解明されつつあります。

この報告書は、県営特殊農地保全整備事業に先立ち、計画地区内に所在する大長B野遺跡・白木八重遺跡・丸岡遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。ここに、その調査結果を報告書として刊行いたしますが、この報告書が広く文化財保護並びに学術研究の一助となれば幸いです。

発刊にあたり発掘を担当された調査員をはじめ指導者、作業協力者の皆様、また調査に御協力いただいた土地所有者をはじめ作業員の皆様、並びに関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

志布志町教育委員会

例　　言

1. この報告書は県営特殊農地保全整備事業（田之浦地区）に伴う大長野B遺跡・白木八重遺跡・丸岡遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鹿児島県農政部（大隅耕地事務所）からの委託事業として志布志町（志布志町教育委員会）が受託し、調査主体となり実施した。
3. 調査における実測および測量、写真撮影は、吉永、米元、小村が分担して行った。
4. 調査の実施にあたっては、鹿児島県教育庁文化課の指導・教示を受けた。
5. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
6. 遺物番号については、土器と石器をわけて各々一連番号とし、挿図、図番とも一致している。
7. 出土遺物は志布志町教育委員会で一括保管し公開展示する予定である。
8. 本書の執筆および編集は小村が行った。

本文目次

序文
例言
目次

第 I 章 調査の経過	
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過と概要	2 ~ 6
第 II 章 遺跡の位置・環境および周辺遺跡	
第1節 遺跡の位置・環境	7
第2節 周辺遺跡	7
第 III 章 各遺跡の調査	
大長野遺跡	10
白木八重遺跡	75
丸岡遺跡	79

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	9	第2表 出出土器観察表	70
--------------	---	-------------	----

挿入目次

第1図 周辺の遺跡	9	第44図 Ⅲ類土器実測図(1)	58
第2図 土層柱状模式図	10	第45図 Ⅲ類土器実測図(2)	59
第3図 トレンチ配置図	12	第46図 Ⅲ類土器実測図(3)	60
第4図 トレンチ断面図	14	第47図 Ⅲ類土器実測図(4)	61
第5図 トレンチ断面図	15	第48図 Ⅲ類土器実測図(5)	62
第6図 トレンチ断面図及び平面図	17	第49図 Ⅲ類土器実測図(6)	63
第7図 トレンチ出土遺物(1)	18	第50図 Ⅲ類土器実測図(7)	64
第8図 トレンチ出土遺物(2)	19	第51図 Ⅲ類土器実測図(8)	65

第9図	トレンチ出土遺物(3)	20	第52図	IV類土器実測図	66
第10図	遺物出土状況平面図	22	第53図	V類土器実測図	67
第11図	I類土器実測図(1)	23	第54図	石器実測図(1)	68
第12図	I類土器実測図(2)	24	第55図	石器実測図(2)	69
第13図	I類土器実測図(3)	25	第56図	トレンチ配置図	75
第14図	I類土器実測図(4)	26	第57図	トレンチ断面図	76
第15図	I類土器実測図(5)	27	第58図	表採遺物	78
第16図	I類土器実測図(6)	28	第59図	トレンチ配置図	79
第17図	I類土器実測図(7)	29	第60図	トレンチ断面図	81
第18図	I類土器実測図(8)	30	第61図	トレンチ断面図	82
第19図	I類土器実測図(9)	31	図版目次		
第20図	I類土器実測図(10)	32	図版1	大長野B遺跡	85
第21図	II類土器実測図(1)	33	図版2	白木八重・丸岡遺跡	86
第22図	II類土器実測図(2)	34	図版3	出土遺物	87
第23図	II類土器実測図(3)	35	図版4	出土遺物	88
第24図	II類土器実測図(4)	36	図版5	出土遺物	89
第25図	II・III類土器実測図(5)	37	図版6	出土遺物	90
第26図	II類土器実測図(6)	38	図版7	出土遺物	91
第27図	II類土器実測図(7)	39	図版8	出土遺物	92
第28図	石器実測図(1)	40	図版9	出土遺物	93
第29図	石器実測図(2)	41	図版10	出土遺物	94
第30図	石器実測図(3)	42	図版11	出土遺物	95
第31図	グリッド配置図	45	図版12	出土遺物	96
第32図	I類土器実測図(1)	46	図版13	出土遺物	97
第33図	畦畔土層断面図	47	図版14	出土遺物	98
第34図	遺物出土状況平面図	47	図版15	出土遺物	99
第35図	I類土器実測図(2)	48			
第36図	II類土器実測図(1)	49			
第37図	II類土器実測図(2)	50			
第38図	II類土器実測図(3)	51			
第39図	II類土器実測図(4)	52			
第40図	II類土器実測図(5)	54			
第41図	II類土器実測図(6)	55			
第42図	II類土器実測図(7)	56			
第43図	II類土器実測図(8)	57			

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会（以下県文化課）では、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るために、各関係機関との間で、事業地区内における文化財の有無及びその取扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部（大隅耕地事務所）は、志布志町田之浦地内における県営特殊農地保全整備事業田之浦地区の計画策定にあたり、実施計画区域内の埋蔵文化財の有無について、県文化課に照会した。この結果、当該事業区域内に大長B野遺跡・白木八重遺跡・丸岡遺跡が存在していることが判明した。

これを受けて県文化課並びに大隅耕地事務所と志布志町教育委員会の三者で協議した結果、事業実施前に大長野B・白木八重遺跡の範囲・性格などを把握するための確認調査を平成2年度に実施することとなった。

確認調査の結果、大長野B遺跡の既設道路部分に遺物包含層が存在することが判明したが年度内の調査が困難だったため、平成3年度に緊急発掘調査を実施することとなった。

また丸岡遺跡については、平成6年度に確認調査を行った。各調査は志布志町教育委員会が調査主体となり、県文化課の指導・助言を得て実施した。

第2節 調査の組織

①確認調査（大長野B遺跡・白木八重遺跡）

調査主体者	志布志町教育委員会	教 育 長	徳 重 俊 二
調査責任者	タ	社会教育課長	慶 田 泰 補
調査調整	タ	タ 親睦	井 手 富 男
調査事務	タ	タ 係長	下 平 晴 行
	タ	主 査	米 元 史 郎
	タ	主 事	中 嶽 徹
	タ	主 事	荒 平 安 次
	タ	主 事	杉 田 美 保
調査担当者	タ	主 査	米 元 史 郎
	県教育庁文化課	文化財研究員	吉 永 正 史

②緊急発掘調査（大長野B遺跡）

調査主体者	志布志町教育委員会	教育長	徳重俊二
調査責任者	タ	社会教育課長	慶田泰輔
調査調整	タ	タ 課長	井手富男
調査事務	タ	タ 係長	下平晴行
	タ	主査	米元史郎
	タ	主事	中窪徹
	タ	主事	荒平安次
	タ	主事	松崎陽子
	タ	主事補	小村美義
調査担当者	タ	主査	米元史郎
	タ	主事補	小村美義

③確認調査（九岡遺跡）

調査主体者	志布志町教育委員会	教育長	徳重俊二
調査責任者	タ	社会教育課長	吉松弘文
調査調整	タ	タ 課長	井手南海男
調査事務	タ	タ 係長	新村千秋
	タ	主事	天野和博
	タ	主事	淵之上純子
	タ	主事	小村美義
	タ	主事補	坂元正知
調査担当者	タ	主事	小村美義

第3節 調査の経過

①確認調査（大長野日遺跡・白木八重遺跡）

確認調査は、2遺跡同時進行で、平成2年11月26日から12月20日まで実施した。その間の調査の経過と概要については日誌抄をもってかえる。

11月26日（月）用具運搬、点検、確認、作業員への調査方法、調査上の留意点の説明。
資材テント部分の伐採作業。1、2トレチ、1地区設定、掘り下げ開始。1トレチ遺物出土状況平板実測。

- 11月27日(火) 1, 2トレンチ, 1地区掘り下げ。
- 11月28日(水) 1, 2トレンチ, 1地区掘り下げ。1地区遺物出土状況平板実測。
- 11月29日(木) 1, 2トレンチ, 1地区掘り下げ。
- 11月30日(金) 2地区設定。1, 2トレンチ, 2地区掘り下げ。1トレンチ土層断面線引き。1, 2トレンチ完掘。
- 12月3日(月) 3~7トレンチ設定。2地区掘り下げ。2, 5, 6トレンチ標高設定。5, 6トレンチ完掘。
- 12月4日(火) 10, 13, 14トレンチ設定。3, 4, 7, 10, 13トレンチ, 1, 2地区掘り下げ。1地区遺物出土状況写真撮影。3, 4, 7トレンチ完掘。
- 12月5日(水) 8, 9, 11, 12トレンチ設定。8~14トレンチ掘り下げ。1, 3~7トレンチ位置図平板実測。10~14トレンチ完掘。
- 12月6日(木) 9トレンチ, 1地区掘り下げ。9トレンチ完掘。
- 12月7日(金) 1地区掘り下げ。3, 4, 7~10トレンチ標高設定。2, 6~10土層断面線引き。1, 2トレンチ土層断面写真撮影。
- 12月11日(火) 1地区掘り下げ。
- 12月12日(水) 8トレンチ, 1, 2地区掘り下げ。3~5土層断面写真撮影。9トレンチ, 2地区遺物出土状況平板実測。8トレンチ完掘。
- 12月13日(木) 1, 2地区掘り下げ。3, 4トレンチ土層断面写真撮影。3, 4, 6, 7トレンチ土層断面実測。1地区遺物出土状況平板実測。
- 12月14日(金) 1, 2地区掘り下げ。5~7トレンチ土層断面写真撮影。5トレンチ土層断面実測。2地区完掘。

- 12月17日（月） 2地区掘下げ。
- 12月18日（火） 2地区掘下げ、完掘。1地区土層断面実測。
- 12月19日（水） 2, 9, 10トレンチ位置図平板実測。2, 3トレンチ遺物出土状況平板実測。
- 12月20日（木） 1, 11~14トレンチ土層断面標高設定及び線引き。8~14トレンチ、1地区土層断面写真撮影。撤収。
(大長野B遺跡)
-
- 11月26日（月） 1トレンチ設定、掘り下げ。
- 12月10日（月） 2~4トレンチ、1地区設定掘り下げ。2~4トレンチ土層断面線引き。
2, 4トレンチ、1地区土層写真撮影。2~4トレンチ完掘。
- 12月11日（火） 1トレンチ、1地区掘り下げ。1~4トレンチ、1地区位置図平板実測。
3トレンチ、1地区土層断面写真撮影。1地区完掘。
- 12月14日（金） 1~4トレンチ、1地区標高設定。1トレンチ、1地区土層断面線引き。
- 12月17日（月） 1~4トレンチ、1地区土層断面実測。
(白木八重遺跡)

②緊急発掘調査（大長野B遺跡）

緊急確認調査は、平成3年5月14日から7月2日まで実施した。その間の調査の経過と概要については日誌抄をもってかえる。

- 5月14日（火） 用具運搬、点検、確認、作業員への調査方法、調査上の留意点の説明。アスファルト、砂利、重機による削除作業。
- 5月17日（金） アスファルト、砂利、重機による削除作業。水道管が埋設されていたため
↓ 町水道課と協議。水道管の移動が不可能なため、管を丸太で持ち上げて固
5月18日（土） 定することとなった。発掘調査現況平板実測。

- 5月21日(火) アスファルト、砂利、重機による削除作業。水道管固定作業。I～IV層
↓ 重機により表土剥ぎ。調査区南からI-A, I-B, I-C, I-D,
- 5月24日(金) I-E区として調査グリッド設定。I-A区V層掘り下げ開始。
- 5月27日(月) I-A, I-B, I-C区V・VI層掘り下げ。水道管固定作業。三角点
↓ より海拔高移動。I-A, I-B, I-C区遺物出土状況平板実測、出
- 6月 1日(土) 土状況写真撮影。
- 6月 3日(月) I-A, I-B, I-C, I-D, I-E区V・VI層掘り下げ。水道管
↓ 固定作業完了。I-B, I-C, I-D, I-E区遺物出土状
- 6月 7日(土) 況平板実測、写真撮影。
- 6月10日(月) I-B, I-C, I-D, I-E区V・VI層掘り下げ。I-C, I-D
↓ 区遺物出土状況平板実測、写真撮影。
- 6月14日(金) 遺物包含層が西側から東側に急傾斜しているので、ひとたび雨が降ると
水が溜った。そこで度々、作業員全員でバケツを利用して調査区外に排
除することがあった。
- 6月18日(月) I-A, I-B, I-C, I-D区V・VI層掘り下げ。I-A, I-B,
↓ I-C区遺物出土状況平板実測、写真撮影。
- 6月20日(木) I-B, I-C区に遺物が集中しているようである。
- 6月25日(火) I-A, I-B, I-C, I-D区V・VI層掘り下げ。I-A, I-B,
↓ I-C区遺物出土状況平板実測、写真撮影。畦畔土層断面実測、写真撮
- 6月28日(火) 影。
- 7
月 1日(月) I-B, I-C, I-D区、畦畔V・VI層掘り下げ。畦畔部分平板実測。
↓ 完掘状況写真撮影。大長野B遺跡緊急発掘調査全日程終了。撤収。
- 7月 2日(火)

③確認調査（九岡遺跡）

確認調査は、平成6年10月4日から10月20日まで実施した。その間の調査の経過と概要については日誌抄をもってかえる。

- 10月 4日（火） 用具運搬、点検、確認、作業員への調査方法、調査上の留意点の説明。
1, 2, 4, 5 トレンチ設定、掘り下げ。
- 10月 6日（水） 1, 2, 4 トレンチ掘り下げ。
- 10月 6日（木） 1, 2, 4, 5 トレンチ掘り下げ。1, 2, 4, 5 トレンチ海拔高設定
及びトレンチ位置平板実測。2 トレンチ完掘。
- 10月 11日（火） 3, 6~9 トレンチ設定。1, 3, 4~6 トレンチ掘り下げ。3, 6~
8 トレンチ海拔高設定。1, 4 トレンチ完掘。5 トレンチ掘り下げ中断。
- 10月 12日（水） 3, 6 トレンチ掘り下げ。6~8 トレンチ位置平板実測。
- 10月 13日（木） 10~14 トレンチ設定。3, 6~11 トレンチ掘り下げ。9~14 トレンチ位置平板実測。1, 2 トレンチ土層断面線引き。1 トレンチ土層
断面実測。6, 8~10 トレンチ完掘。7 トレンチ中断。
- 10月 14日（金） 3, 8, 11, 12 トレンチ掘り下げ。9~14 トレンチ海拔高設定。
4, 5 トレンチ土層断面線引き。2, 4 トレンチ土層断面実測。3 トレンチ完掘。
- 10月 17日（月） 8, 11~14 トレンチ掘り下げ。1, 2, 4 トレンチ土層断面写真撮影。
3, 5, 6 トレンチ土層断面線引き。8 トレンチ完掘。5 トレンチ
土層断面実測。
- 10月 18日（火） 11~14 トレンチ掘り下げ。7~10 トレンチ土層断面線引き。8 トレンチ
土層断面実測。7~9 トレンチ土層断面写真撮影。12 トレンチ
完掘。
- 10月 19日（水） 11, 13, 14 トレンチ掘り下げ。11, 12 トレンチ土層断面線引き。
12 トレンチ土層断面実測。13, 14 トレンチ完掘。11 トレンチ
中断。
- 10月 20日（木） 11, 13, 14 トレンチ土層断面線引き及び土層断面実測。5, 10
~14 トレンチ土層断面写真撮影。撤収。

第Ⅱ章 遺跡の位置・環境

第1節 遺跡の位置

本町は鹿児島県の東端部で、志布志湾の湾奥部に位置し、海岸線は東西に約10km、内陸部に向かって約24kmで、南北に細長く延びる釣鐘形の形状をなしている。

北東から東側へは、宮崎県都城市及び串間市と接して県境をなし、北西から西へは、末吉町、松山町、有明町とそれぞれ接している。

南面する海岸線は、ほぼ中央に位置する市街地を挟んで、西側は砂浜海岸が続くのに比べ、東側は日南層群で構成される山稜が海までせまり、岩礁海岸を形成している。尚、市街地は、比高40m程のシラス台地の海食崖下に発達した古期砂丘帶上に立地している。これは約600年前の繩文海進の名残りと考えられる。

内陸部の地形は、山地と台地、それに河川に沿って小規模に発達した沖積低地に大別出来る。北部から東部にかけての山稜地帯は、主に新生代古第三期の地層と考えられている日南層群よりなる、南那珂山系の西端域となっている。

シラス台地は並行して南流する中小の河川の活発な侵食作用によって、深い谷で分断され、さらにその支流によって、樹枝状に拡がる谷頭侵食で細かく刻み込まれており、大小幾多の台地が形成されている。また、谷底の低地とは急傾斜面や崖によって区切られている。

町内を流れる河川は、西側を延長24kmの安楽川が、東側を延長15kmの前川がそれぞれ南流しており、他に北東山間部の四浦地区には串間市より大矢取川が入り込んでいる。またこれらの河川の中流域から下流域にかけては各所に大小の河岸段丘や谷底平野が形成されている。

このような地形のため、町内に分布する約200箇所の埋蔵文化財遺跡の多くは台地上に立地しているが、内陸山間部では、山稜に付随するそれぞれ独立した小規模な山麓舌状台地基部（谷あいの湧水を利用するタイプ）、あるいはその辺縁部（台地下の河川を利用するタイプ）に立地しており、南部の広域な台地では、水源に遠い台地中央部に遺跡の立地は見られず、これらの辺縁部、もしくは台地に付随する河岸段丘上に集中している。

第2節 田之浦地区の周辺遺跡

志布志町内の遺跡の大半は、前川、安楽川の両河川沿いに集中して立地している。しかし、安楽川沿いの遺跡については、上流域、中流域、下流域とそれぞれその立地形態に相違がみられるようである。

まず下流域では、広い平坦面を有する高位のシラス台地では、谷底の河川まで比高差も大きく、距離的にも遠くなることから、台地辺縁部の遺跡立地はみられない。ここでは、川に沿って発達している中位、あるいは低地の河岸段丘の辺縁部に立地している。

次に中流域であるが、ここでは中位段丘の発達が弱いため、遺跡は、高位の台地辺縁部、もしくは、山稜に付随した中規模の、傾斜をもった台地の辺縁部に集中している。

しかし、上流域になると、必ずしも台地辺縁部に立地しているとは言えない。この地域では山間の台地と、安楽川の川底との比高差が70m～80mに及び、しかも切り立った急傾斜面をもって区切られているため、他の地域のような台地辺縁部でなく、むしろ山稜と台地の基部付近に立地している例がみられる。今回調査対象となった白木八重遺跡をはじめ、北焼の倉野遺跡、板山遺跡、白木原遺跡等がそうである。これらの遺跡では生活に不可欠な水源を、遠くはなれた本流の深い谷底に求めるのではなく、隣接する台地間に山稜まで切り込んでいる谷頭の湧水に求めていたものと思慮される。

第1図に掲げた安楽川上流の各々の遺跡について、確認調査の出土遺物や分布調査などにより採集された遺物をもとに若干説明することとする。

遺物番号③の尾口遺跡、④池口遺跡は分布調査によって新しく発見された遺跡で縄文式土器が採集された。

⑥の田吹野遺跡は平成元年に確認調査が実施され、御池ボラ層とアカホヤ層に挟まれた層から遺物が出土した。このことは県内では初めての出土例で注目される。

⑦の倉野遺跡、⑧の板山遺跡は個人の造成で発見された遺跡で、倉野遺跡は現在植林地となつており、出土遺物は、山形押型文、網目文、吉田式、前平式、轟式、塞ノ神A式、条痕文土器、黒曜石片と多彩である。また、板山遺跡の出土遺物は梢円押型文となっている。

⑨の白木原遺跡は昭和62年に確認調査が実施された。出土遺物は、平柄式系、塞ノ神土器である。平柄式系の土器は当時出土例が少なかったため好資料となった。

⑩の平山A遺跡、⑪の宮谷口遺跡は平成元年に確認調査が実施された。平山A遺跡の出土物は平柄式土器等である。宮谷口遺跡では縄文時代早期の集石遺構が検出された。出土遺物は、貝殻文円筒系の吉田式、前平式土器と平柄式土器等である。

田之浦地区の埋蔵文化財は全体的に縄文時代早期の遺跡が多いようである。今後、表探資料のみで未調査の遺跡について発掘調査が実施され、遺跡の立地と地理条件やその性格について多くの示唆を得られるかもしれない。

番号	遺跡名	時代
①	吉原	縄文
②	牧原	縄文(早)
③	尾口	縄文
④	池口	縄文
⑤	内門	縄文・(他)
⑥	田吹野	縄文(早前)
⑦	倉野	縄文(早前)
⑧	板山	縄文(早)
⑨	白木原	縄文(早)
⑩	白木八重	縄文(早)
⑪	大長野A	縄文(早)
⑫	大長野B	縄文(早)
⑬	大長野C	縄文(早)
⑭	平山A	縄文
⑮	平山B	縄文
⑯	宮谷口	縄文

第1表 周辺の遺跡



第1図 周辺の遺跡

第Ⅲ章 各遺跡の調査

大長野B遺跡



第1節 調査の概要

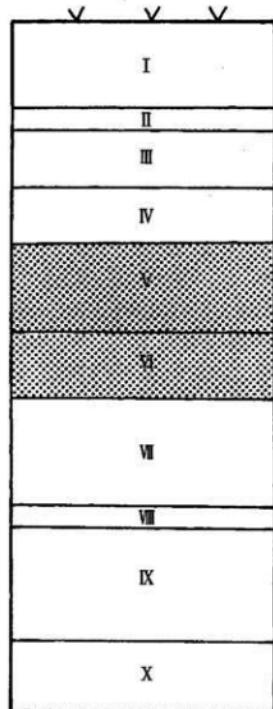
大長野B遺跡は、細長い台地上の中央部に位置する遺跡である。町内における埋蔵文化財の遺跡立地のほとんどは山麓台地基部、あるいは辺縁部であり、数少ない遺跡立地の一つであると考えられる。

確認調査は、事業計画地区となるこの台地全体に渡り、遺跡の範囲・性格等を把握するため実施した。

対象地区は、個人の造成により削平されている場所が多く、シラスが表面にみられる部分もあった。そこで遺物包含層と考えられる土層が露出している部分を中心に $2 \times 3\text{ m}$ を基本として、計16ヶ所設定した。また遺物の出土が著しい部分については2ヶ所の拡張区を設けた。

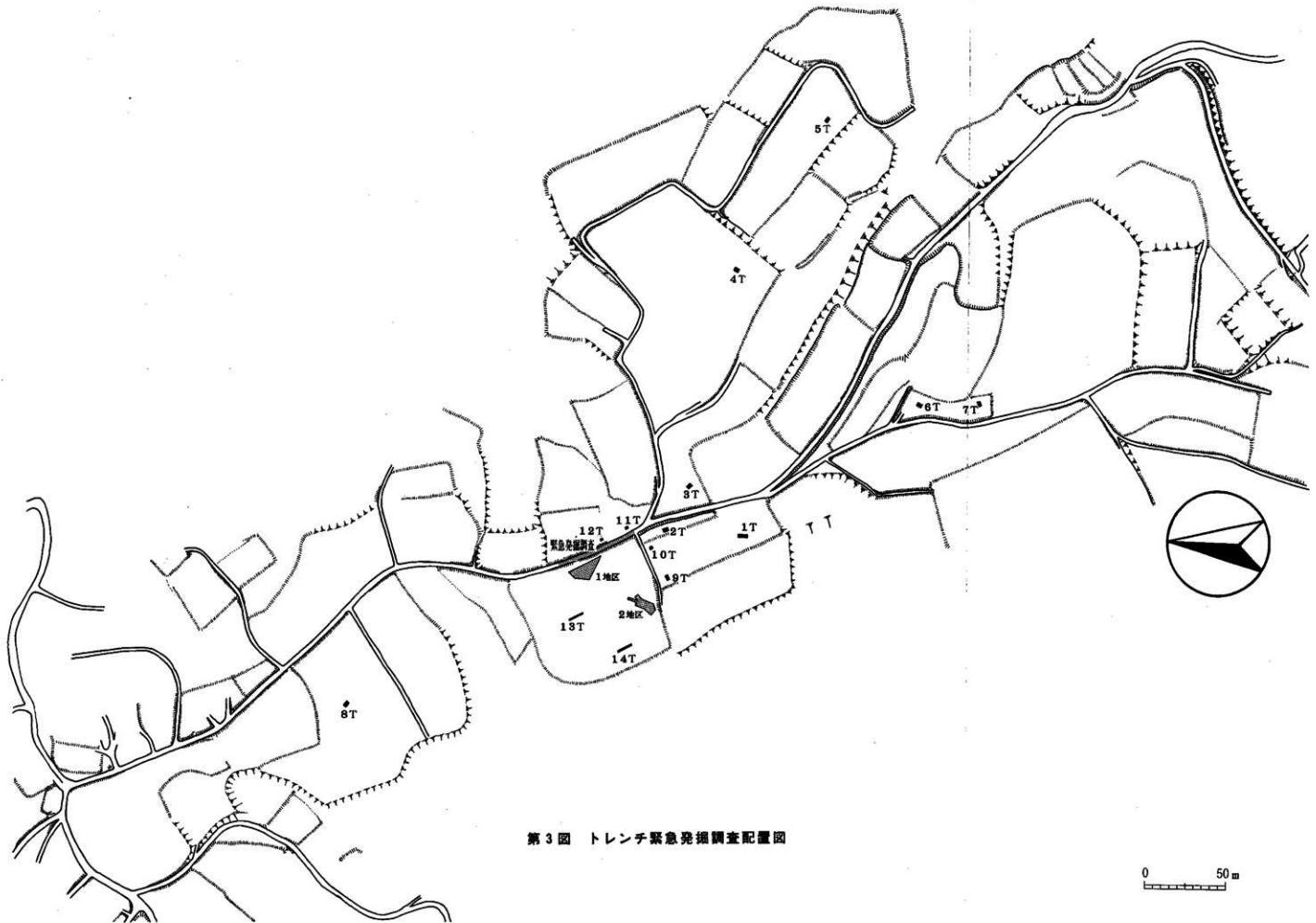
第2節 基本層位

大長野B遺跡の層位は、X層に分層することができる。個人の畠地造成により、II、III層が削平されている場所もあった。



- I層 耕作土。畠地に設定しているためにa～iに層に細分できる。
- II層 黒褐色土層：弥生時代の時期が考えられる。
- III層 黄褐色土層：御池カルデラに起源をもつものである。a（腐食土）b（火山灰）c（パミス）の3層に細分できる。
- IV層 黄橙色土層：鬼界カルデラに起源をもつもので、いわゆる『アカホヤ』とよばれるものである。a（腐食土）b（火山灰）c（パミス）の3層に細分できる。
- V層 青灰色土層：縄文早期の遺物包含層である。
- VI層 黒褐色土層：白色砂の有無でa、bに細分できる。縄文早期の遺物包含層である。
- VII層 乳橙色土層：桜島に起源をもつもので、いわゆる『サツマ』とよばれるものである。
- VIII層 茶褐色土層：粘質土で、色調・硬さなどによりa、b、cの3層に細分できる。
- IX層 暗黒褐色土層：縄文時代の創早期が考えられる。
- X層 黄灰色土層：ヌレシラス。色調・硬さなどによりa、b、cの3層に細分できる。

第2図 土層柱状模式図



第3図 トレンチ緊急発掘調査配置図

0 50m

第3節 各トレンチの調査

第1トレンチ（第6図）

調査区西端、標高約190mの畠地に2×4mの大きさで設定した。層位はほぼ基本層序であった。Ⅲb層（御池火山灰）とⅢc層（御池バミス）が認められた。V、VI層の遺物包含層から縄文早期の土器が数点出土した。

第2トレンチ（第6図）

2トレンチは1トレンチ北約50m、標高約196.5mの微高地に2×4mの大きさで設定した。Ⅲa層（御池火山灰混腐食土）が認められたが、IV～VII層は攪乱層である。V、VI層より縄文早期の土器が数点出土した。

第3トレンチ（第6図）

3トレンチは2トレンチの南東約30m、標高約194.5mの畠地に2×3mの大きさで設定した。Ⅲ層は確認されなかった。傾斜地であるためか、IV層（アカホヤ）は部分的にみられたが、VII層（サツマ）はまったく認められなかった。V、VI層より縄文早期の土器が数点出土した。

第4トレンチ（第4図）

4トレンチは3トレンチの東約140m、標高約192.5mの畠地に2×3mの大きさで設定した。ほぼ基本層序であったが、Ⅹ層の縄文時代創早期と考えられる土層が認められた。しかしながら遺物・遺構ともみられなかった。

第5トレンチ（第4図）

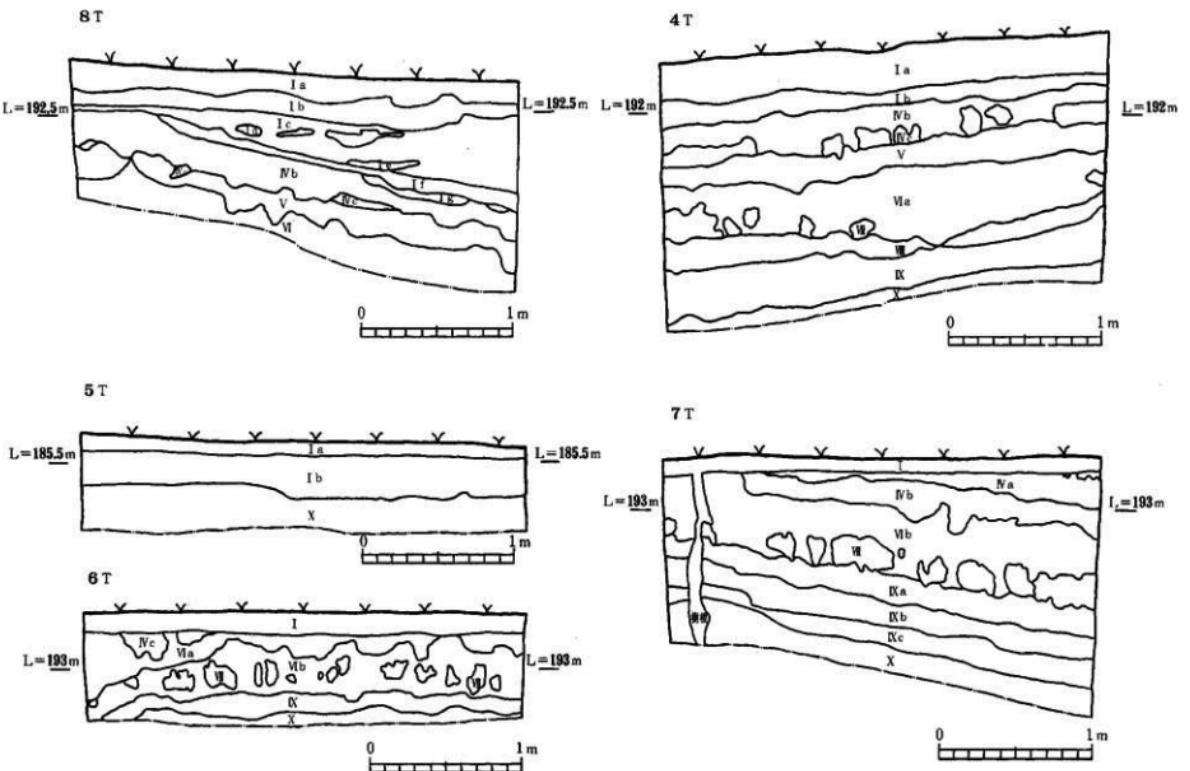
5トレンチは4トレンチの南東約110m、標高約186mの畠地に2×3mの大きさで設定した。I層（耕作土）の下はX層（ヌレシラス）であった。遺物・遺構ともみられなかった。

第6トレンチ（第4図）

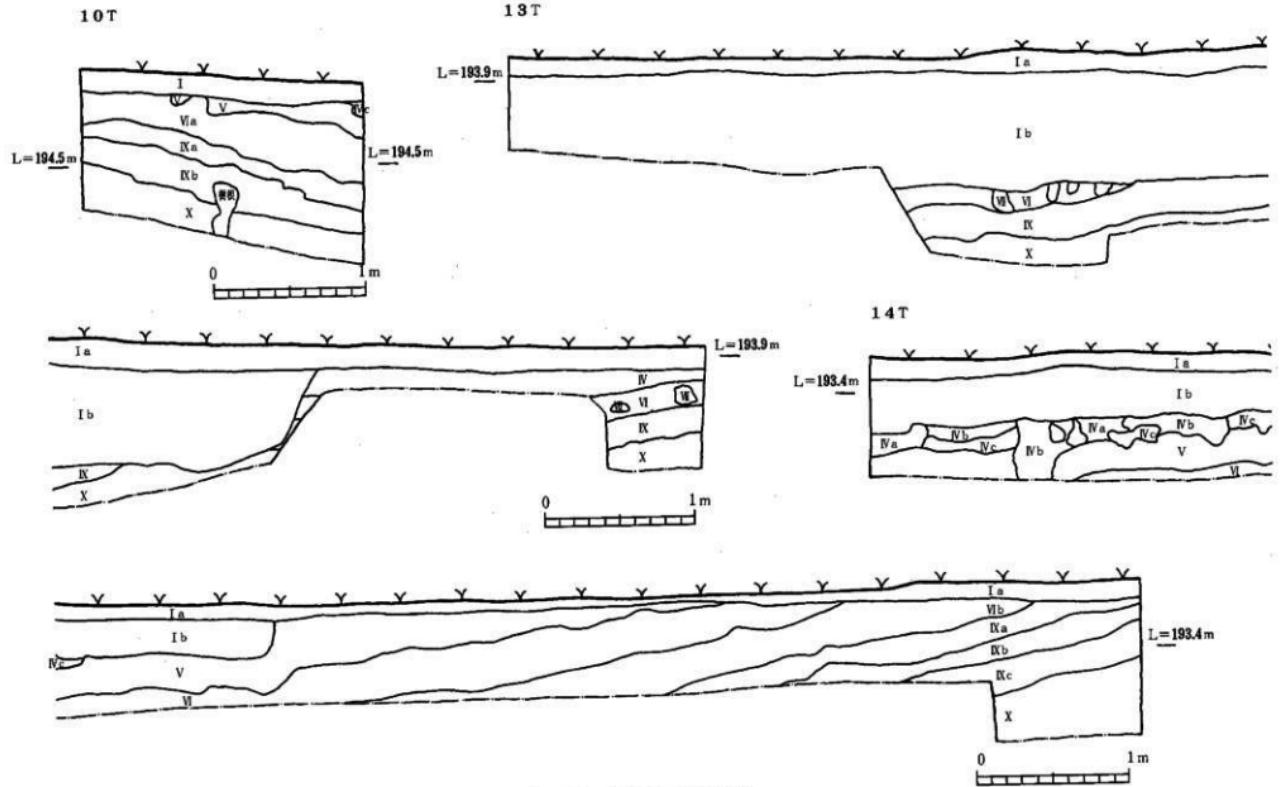
6トレンチは5トレンチの西約180m、標高約193.5mの畠地に2×3mの大きさで設定した。V層は確認されず、約80cmでX層に達した。遺物・遺構ともみられなかった。

第7トレンチ（第4図）

7トレンチは6トレンチの南約40m、標高約193.5mの畠地に2×3mの大きさで設定した。ほぼ基本層序であったが、V層はみられなかった。遺物・遺構とも認められなかった。



第4図 トレンチ断面図



第5図 トレンチ断面図

第8トレント（第4図）

8トレントは7トレントの北西約430m、標高約193mの畠地に2×3mの大きさで設定した。Ⅲ層は確認されなかった。V、VI層はみられたが、遺物・遺構とも認められなかった。

第9トレント（第6図）

9トレントは8トレントの南側約220m、標高約194.5mの畠地に2×3mの大きさで設定した。Ⅲ、Ⅳ層から遺物の出土がみられたが、縄文時代早期の土器片であることから、擾乱層出土の可能性がある。

第10トレント（第5図）

10トレントは9トレントの東側約20m、標高約195mの畠地に2×2mの大きさで設定した。Ⅱ～Ⅳ層は削平されたのか、確認されなかった。遺物包含層のV、VI層はみられたが遺物・遺構とも認められなかった。

第11トレント

11トレントは10トレントの東約20mの畠地に2×2mの大きさで設定した。縄文時代早期の土器が数点出土した。

第12トレント

12トレントは11トレントの北約15mの畠地に2×2mの大きさで設定した。縄文時代早期の土器が数点出土した。

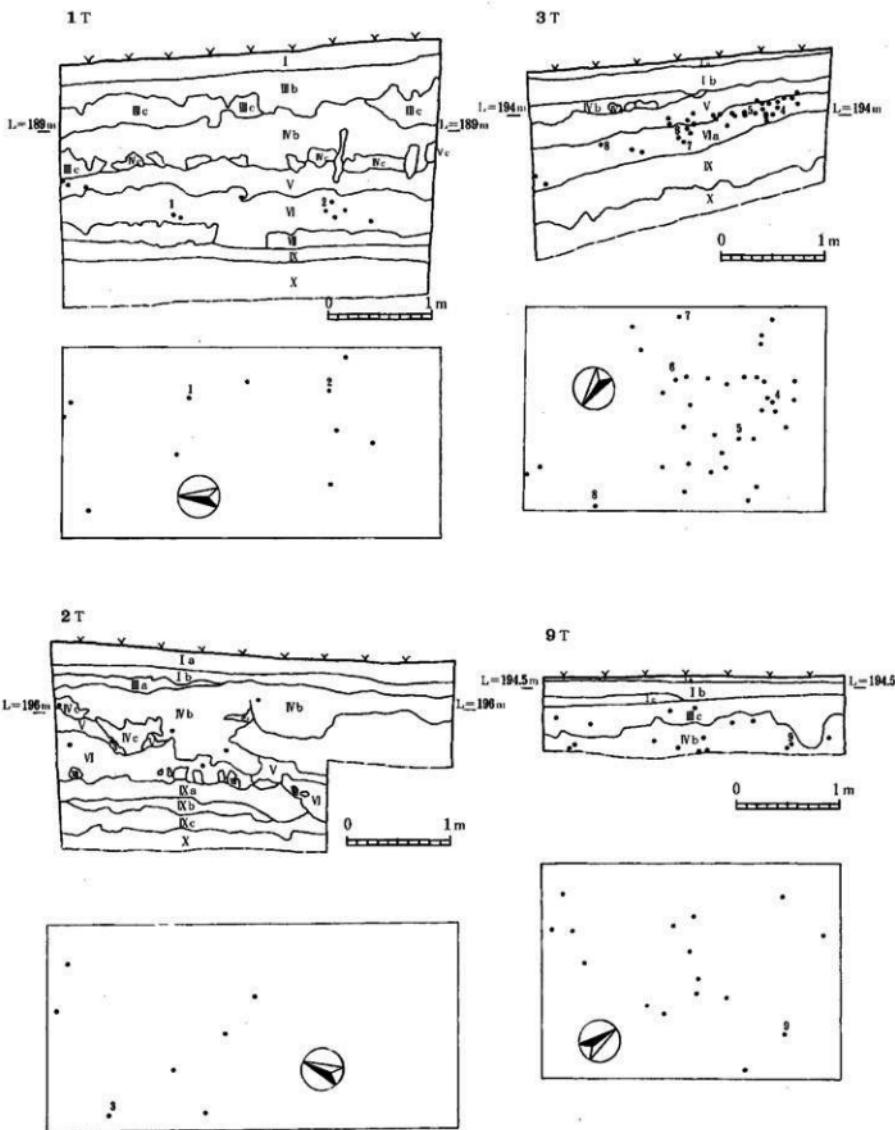
第13トレント（第5図）

13トレントは12トレントの西約70m、標高約194mの畠地に1×10mの大きさで設定した。V層は確認できず、遺物・遺構とも認められなかった。

第14トレント（第5図）

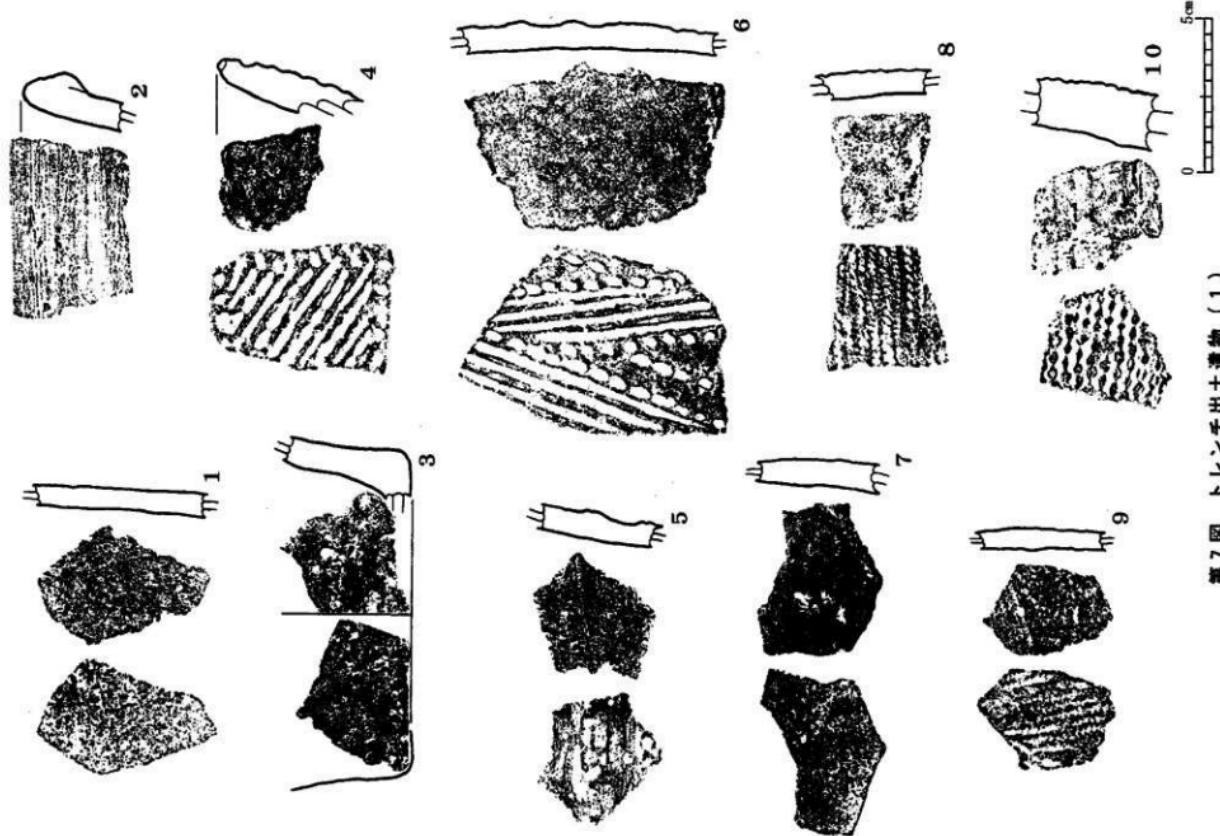
14トレントは13トレントの北東約35m、標高約194mの畠地に1×10mの大きさで設定した。Ⅱ～Ⅳ層は削平されたのか、確認されなかった。遺物包含層のV、VI層はみられたが遺物・遺構とも認められなかった。

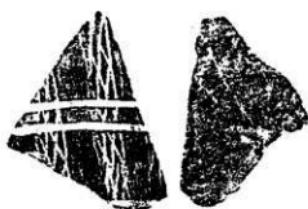
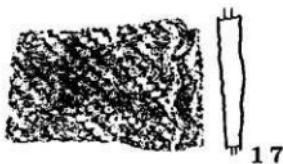
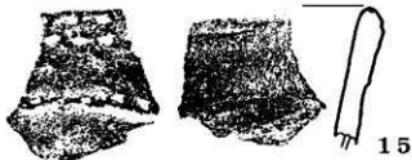
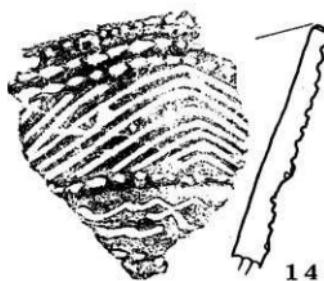
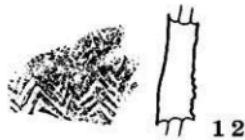
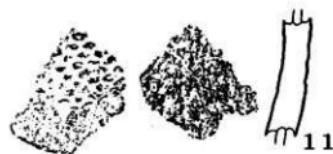
◎1地区・2地区については、当初15、16トレントとして設定したが遺物の出土が著しく、比較的浅い遺物包含していると考えられる層が部分的な広がりであったため、拡張して発掘調査を実施することとなった。



第6図 トレンチ断面図・平面図

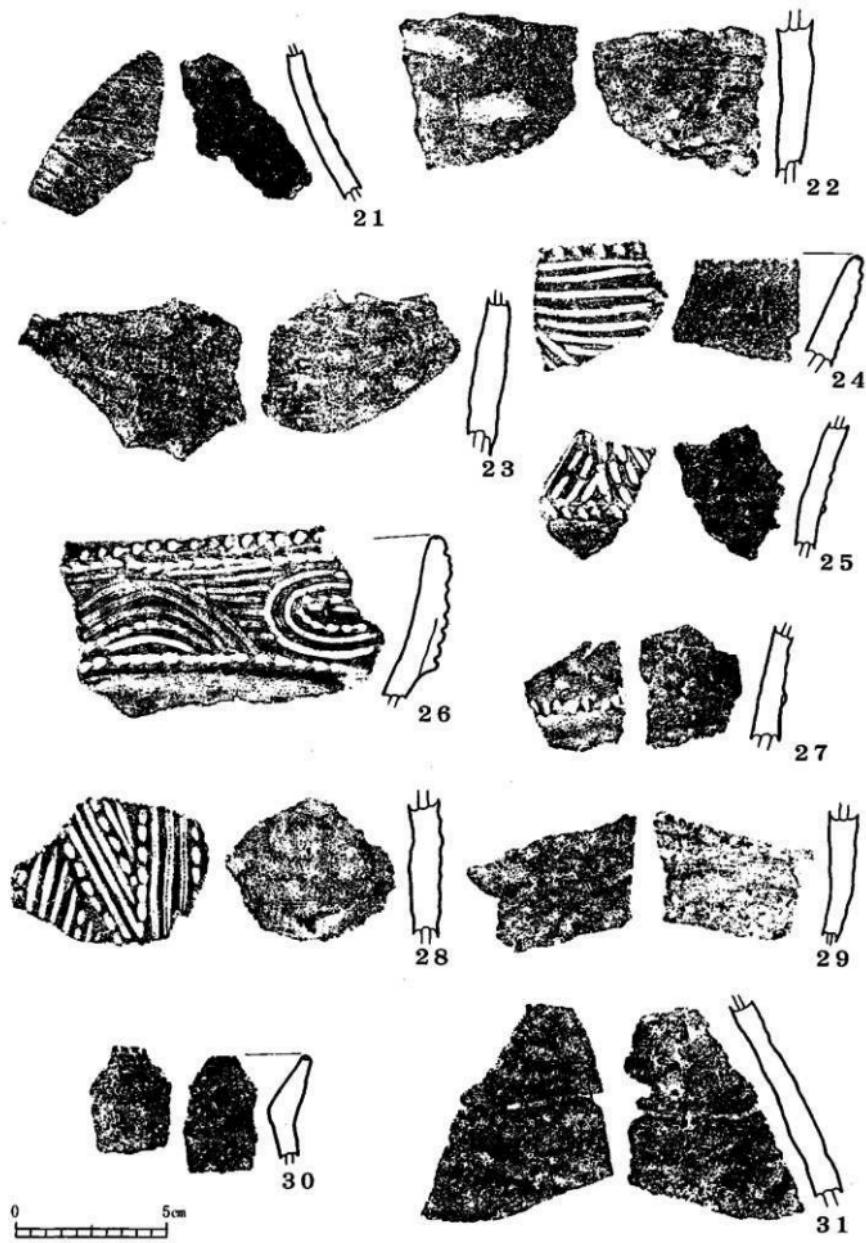
第7図 トレンチ出土遺物(1)





0 5cm

第8図 トレンチ出土遺物 (2)



第9図 トレンチ出土遺物（3）

第4節 出土遺物

(1)トレンチ出土遺物 (第7図-1~31)

2は幅狭の肥厚口縁帯を形成するものである。3は平らの底部となるものである。4は凹線文と連続刺突文を交互に施文するものである。5は頸部付近の破片と考えられるもので、突帶に刺突による刻目が観察される。6は凹線文と刺突文で文様構成するものである。8、9は繩文が認められる胴部片である。10、11は隋円押型文と考えられるものである。12は山形の押型文を外面に施すものである。13は繩文で羽状文を形成する幅狭の肥厚口縁である。14は幅広の肥厚口縁となるもので、凹線で鋸歯文を施すものである。15は若干肥厚気味の口縁部で、刺突文を施すものである。16、17は繩文を胴部外面に施すもので、17は結節繩文が観察される。18は屈曲する頸部破片と考えられるものである。19、20は間隔をおいて撚糸文を施すものである。21は微隆突帯を巡らせるもので、壺形土器と考えられる。24は凹線文を幾何学状に施すものである。25は連続刺突文を口縁部外面に施すものである。26は内湾気味に立ち上がる幅広の肥厚口縁部で、刺突文と凹線文で文様構成をするものである。27は頸部破片で、刺突により刻目の突帶を巡らせるものである。30は口唇部に刻み目を施すだけで、外反する無文の口縁部である。31は壺形土器の胴部片と考えられるもので、無文のものである。

(2) 1、2地区出土遺物

1. 出土土器の形態分類

V、VI層の遺物包含層から出土した土器を形態上の特徴からI~III類土器に類別した。

I類土器 (第11図-32~79)

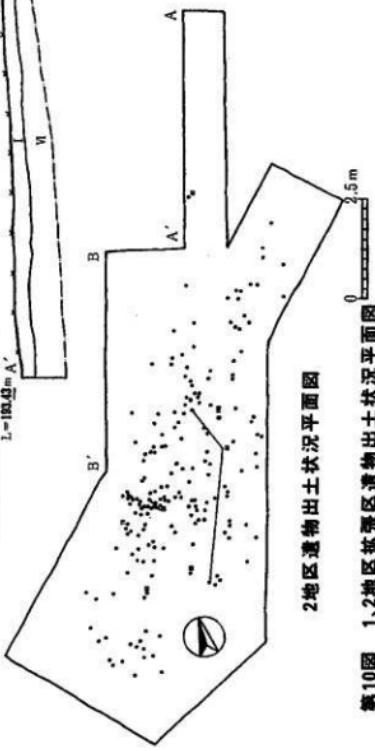
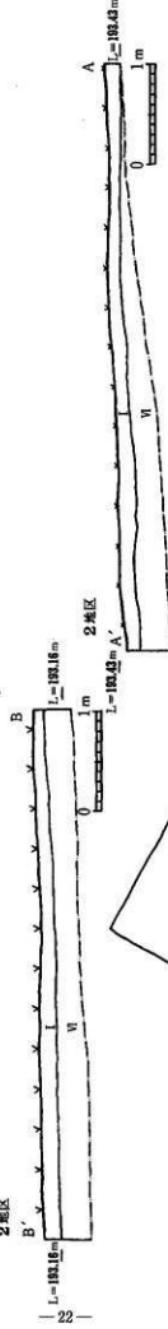
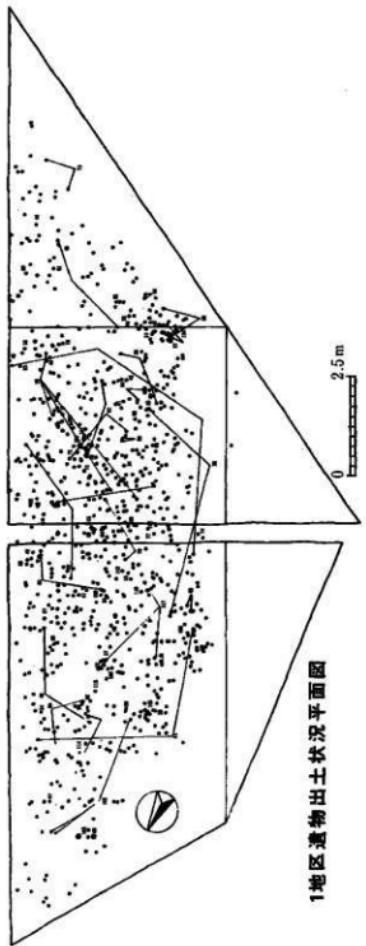
I類土器は形態上の特徴から①深鉢形と②壺形に分けられる。

①深鉢形は、(1)幅広肥厚口縁帯と(2)幅狭口縁帯に類別され、明確に類別できないものなどを
(3)その他とした。

②壺形は、壺形土器と考えられるもので、一括して説明することとした。

II・III類土器 (第21図-80~117)

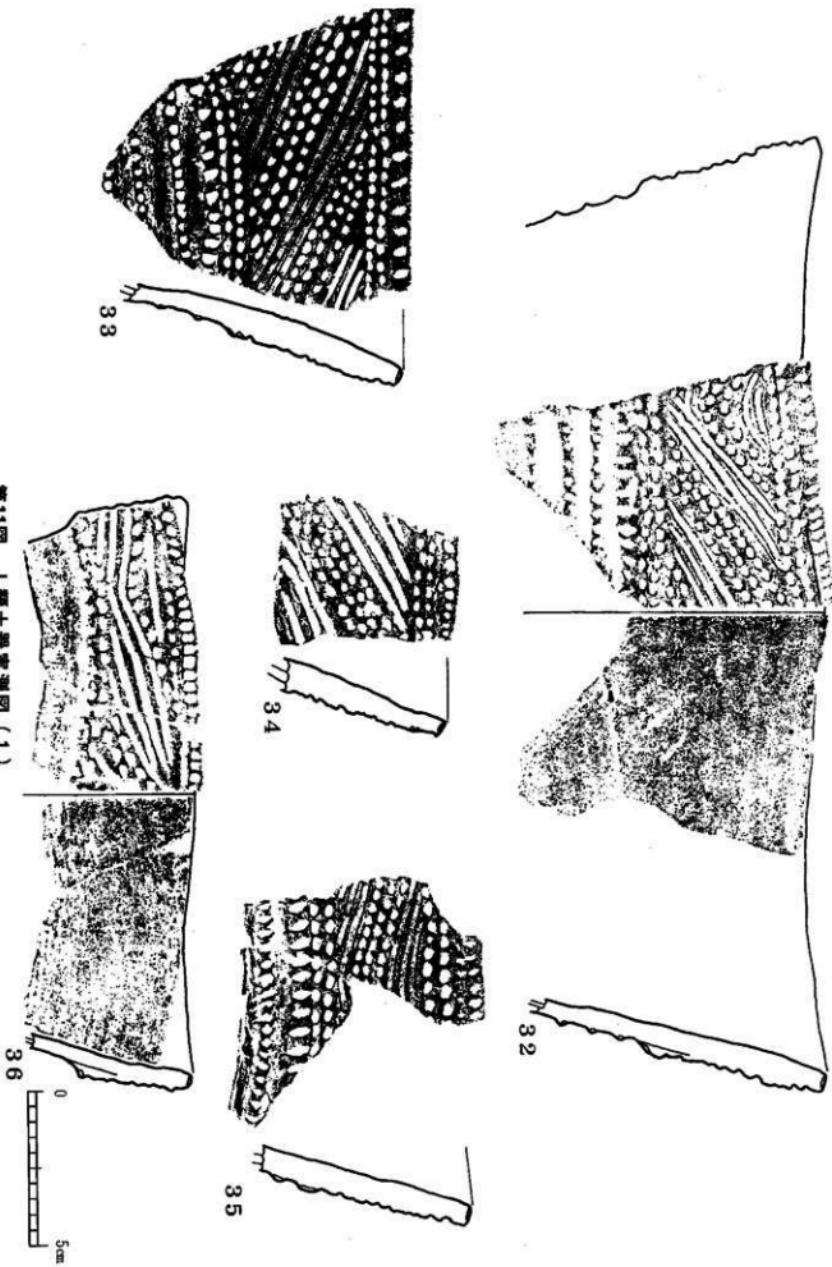
II・III類土器は形態上の特徴から①深鉢形と②壺形に分けられる。



第10图

1、2号区出土状况平面图

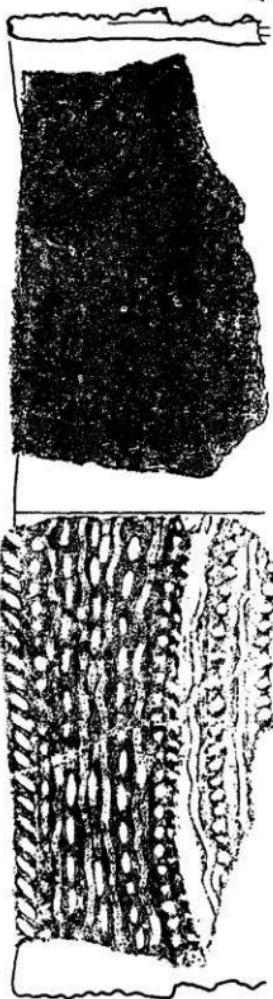
第11図 1 精土器実測図 (1)



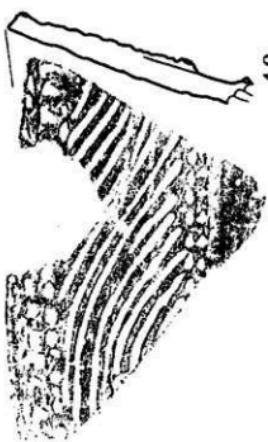
第12圖 1 土樣剖面圖 (2)

5cm

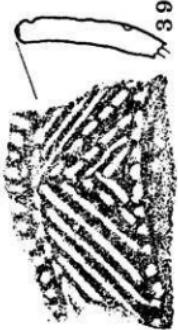
41



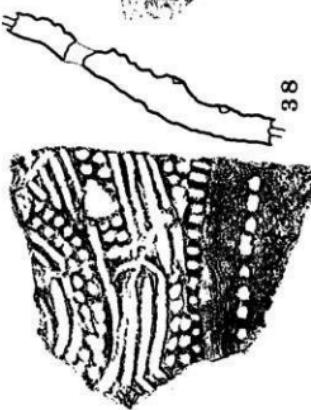
40



39

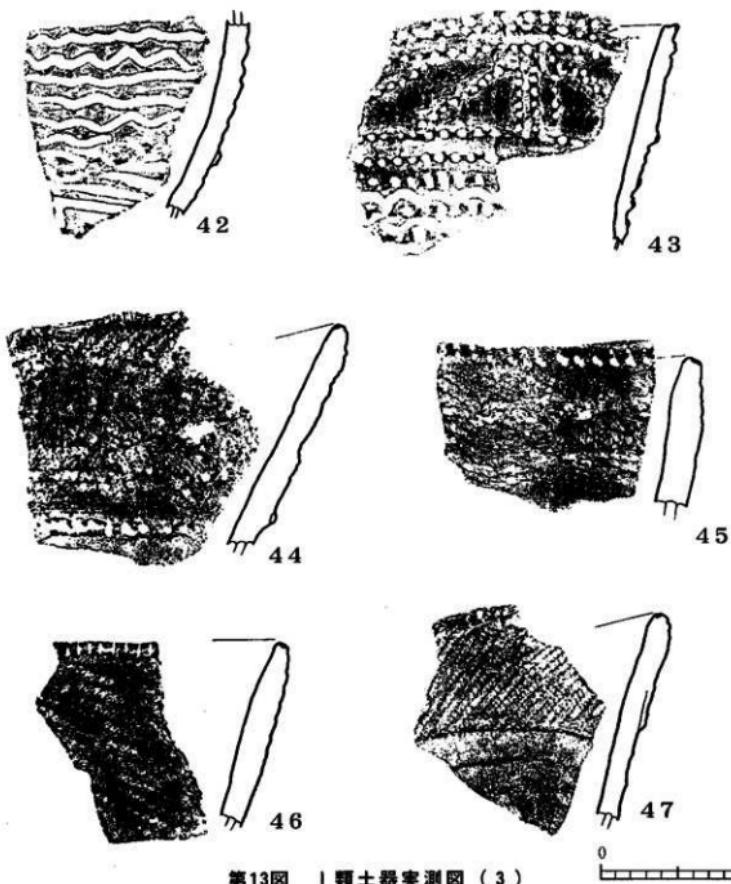


38

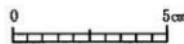


37





第13図 I類土器実測図 (3)



①深鉢形は、口縁部が「く」の字状に外反するもの。

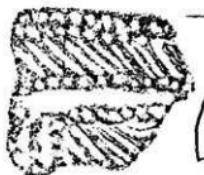
②壺形は、壺形土器と考えられるもので、一括して説明することとした。

2. I類土器 (第11図—32~79)

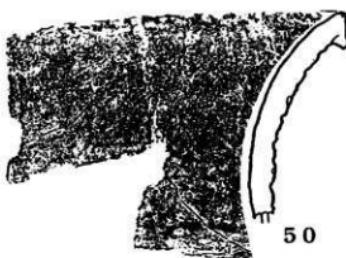
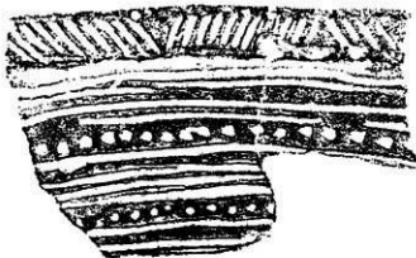
深鉢形 (第11図—32~72)



48



49



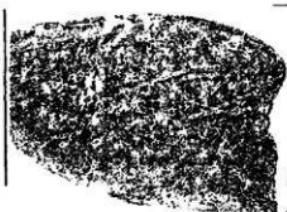
50



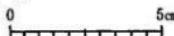
51



52



53



第14図 Ⅰ類土器実測図 (4)



第15図 I類土器実測図 (5)

①口縁部 (第11図-32~62)

(1)幅広の肥厚口縁帯を形成するものである。 (第11図-32~47)

32は復元口径31.2cmを測る。頸部から大きく外反する口縁部で波状を呈する。2, 3本単位の凹線文と連続の刺突文で文様構成するものである。33, 35は比較的浅い凹線文を施すものである。36は復元口径19.3cmを測るもので小型の深鉢土器である。37, 38は比較的深い凹線文を施すもので、38は補修孔が観察される。孔は外面からあけたものと考えられる。

39は内湾気味に外反する口縁部で、鋸歯文が認められる。40は半円弧状の文様が施されるものである。

41は連続刺突文と浅い波状文で文様構成するものである。復元口径32.3cmを測る。42は波状文を巡らせるもので、内湾気味に立ち上がる口縁部である。43は微隆突帯を幾何学状に施すものである。

44~47は口縁部外面に繩文を施文するものである。44は繩文を不規則に施すもので、比較的雑な施文をするものである。45は斜位に繩文を施した後、横位に結節繩文を施文するものである。46, 47は斜位に繩文を施すものである。

(2)幅狭の肥厚口縁帯を形成するものである。 (第14図-48~55)

48, 49は幅広肥厚口縁帯になる可能性があるもので、48は凹線で羽状文を施文するものである。49は斜線文が認められる。50は大きく外反するもので、斜線文を施すものである。51は50と同様に斜線文を施すものであるが、下位に文様はみられない。

52は凹線で文様構成するものである。復元口径15.5cmを測り、ミニチュア土器と考えられる。

53~55は幅狭の肥厚口縁帯を形成するものであるが、無文のものである。

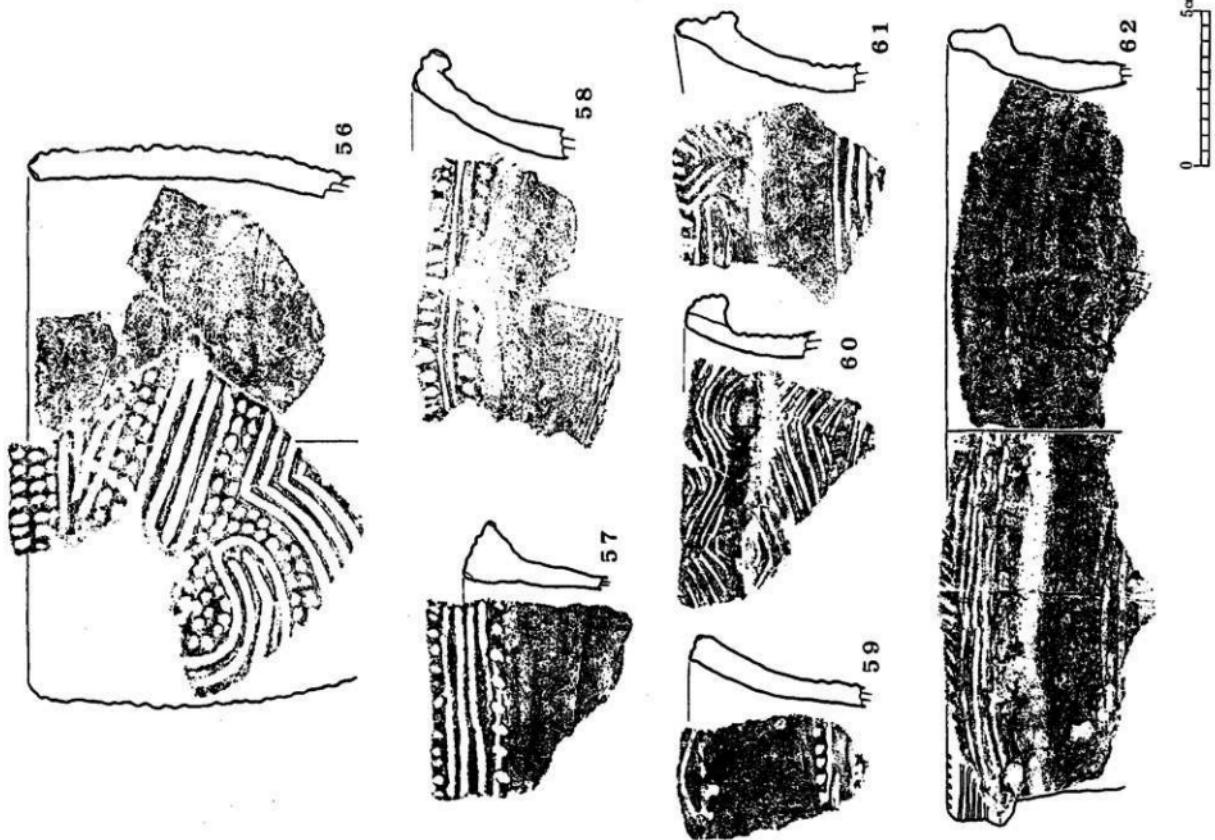
(3)その他 (第16図-56~62)

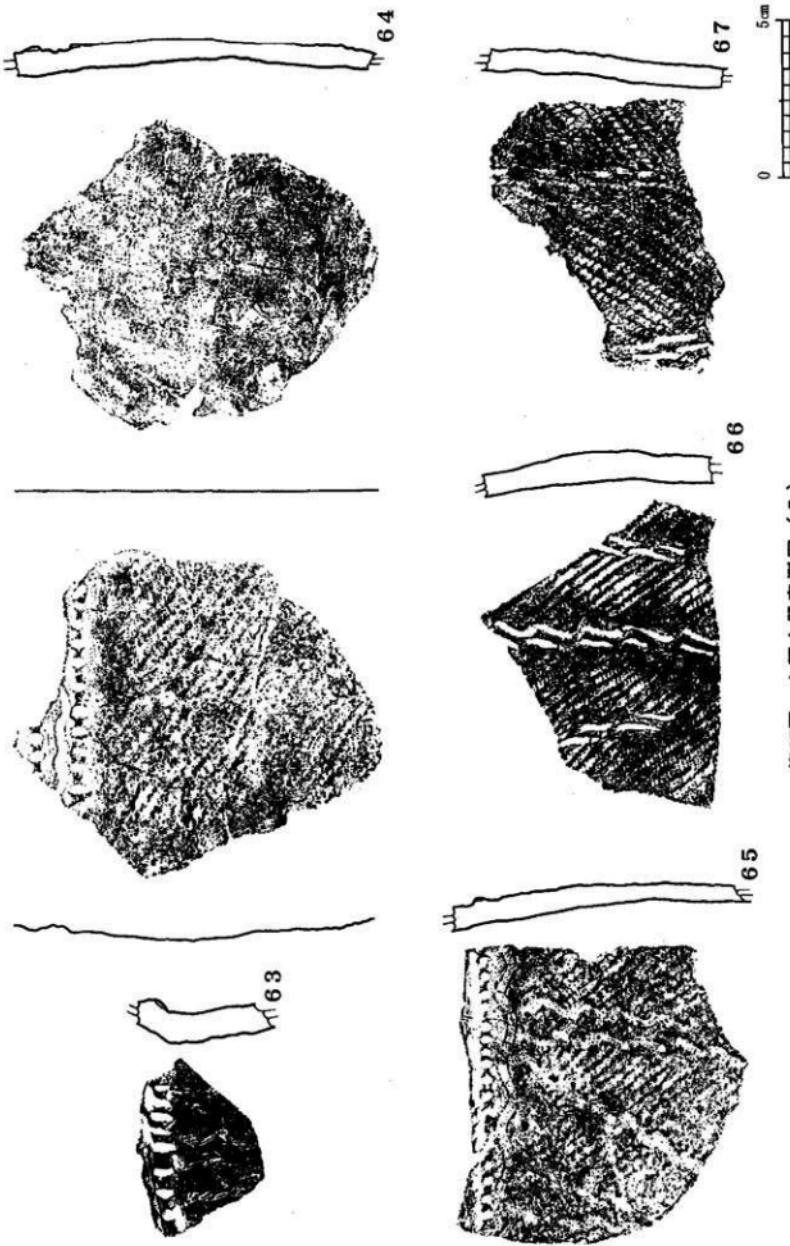
56は復元口径16.9cmを測るものである。若干内湾気味に立ち上がるものである。比較的深い凹線文と連続刺突文で文様構成するもので、凹線で渦文を施す部分もある。

57~61は平行凹線文を巡らすものである。58は大きく外反する口縁部である。

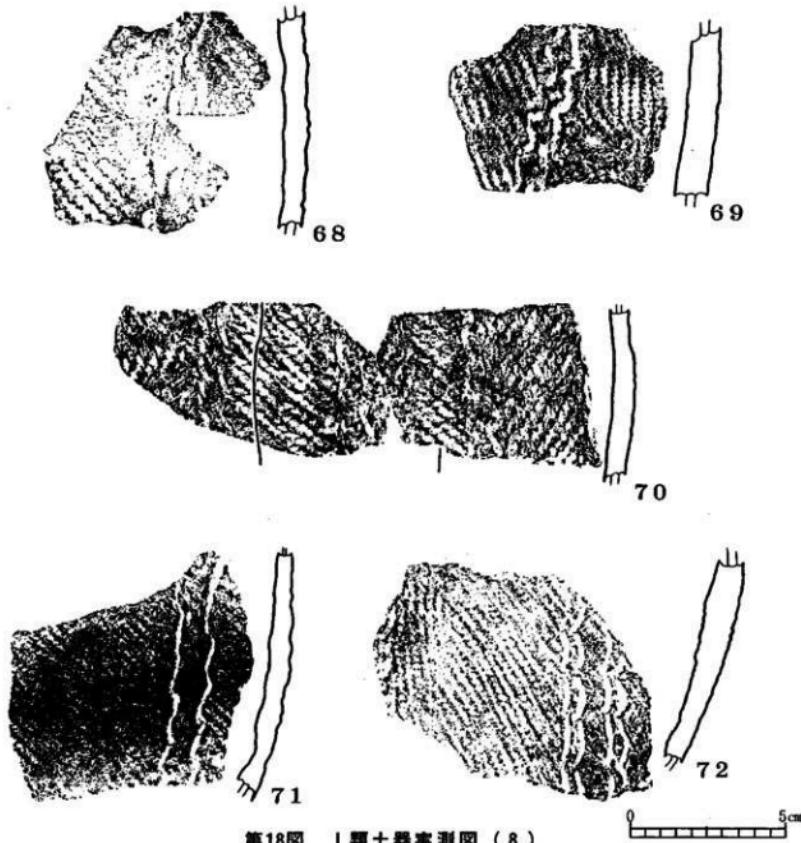
60は半円弧状の波状文を施すもので、先の細い施文具を使用しているものと考えられる。

第16圖 1. 瓷土器測量圖 (6)





第17圖 1 瓷土器等測圖 (7)



第18図 I類土器実測図 (8)

61, 62は若干外反する口縁部端が立ち上がるるもので、62は復元口径25.1cmを測るものである。

②頸部 (第17図—63~72)

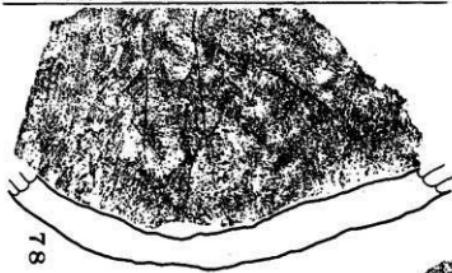
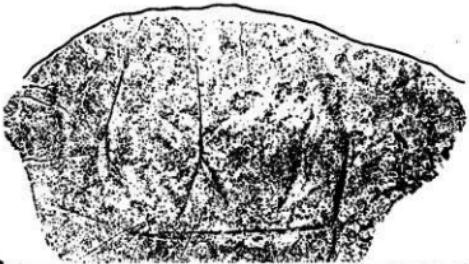
63は頸部近くの破片で若干間隔をおいた縄文がみられるものである。64は、若干膨らみをもちらがら緩やかに屈曲して頸部に至るものである。65~72には結節縄文が観察される。70のようにミニチュア土器の頸部も出土している。

壺形土器 (第19図—73~79)

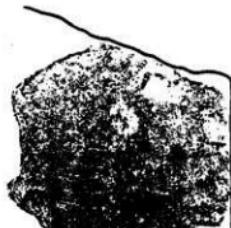
I類土器に伴うと考えられる壺形土器で、有文 (73~75) と無文 (76, 77) の両方が存在す

第19圖 | 瓦土器実測図 (9)

- 31 -



78



76



77



74



73

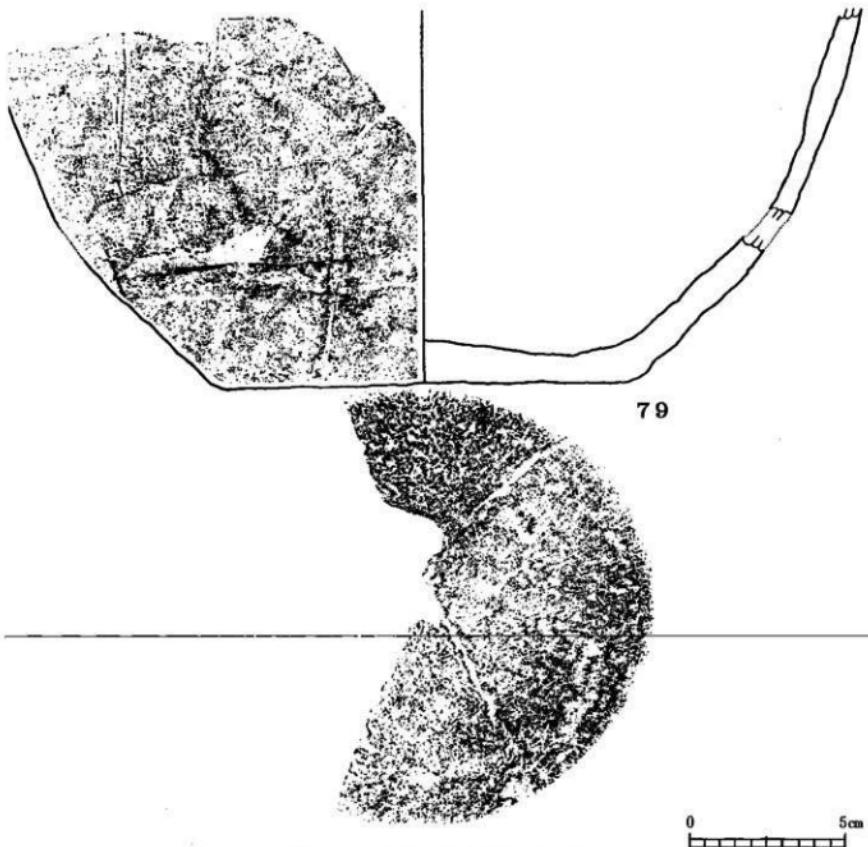


75



76

0
5cm



第20図 Ⅰ類土器実測図 (10)

る。器形は、口縁部が内傾しながら細くなるもので、端部が肥厚口縁帯となるものである。

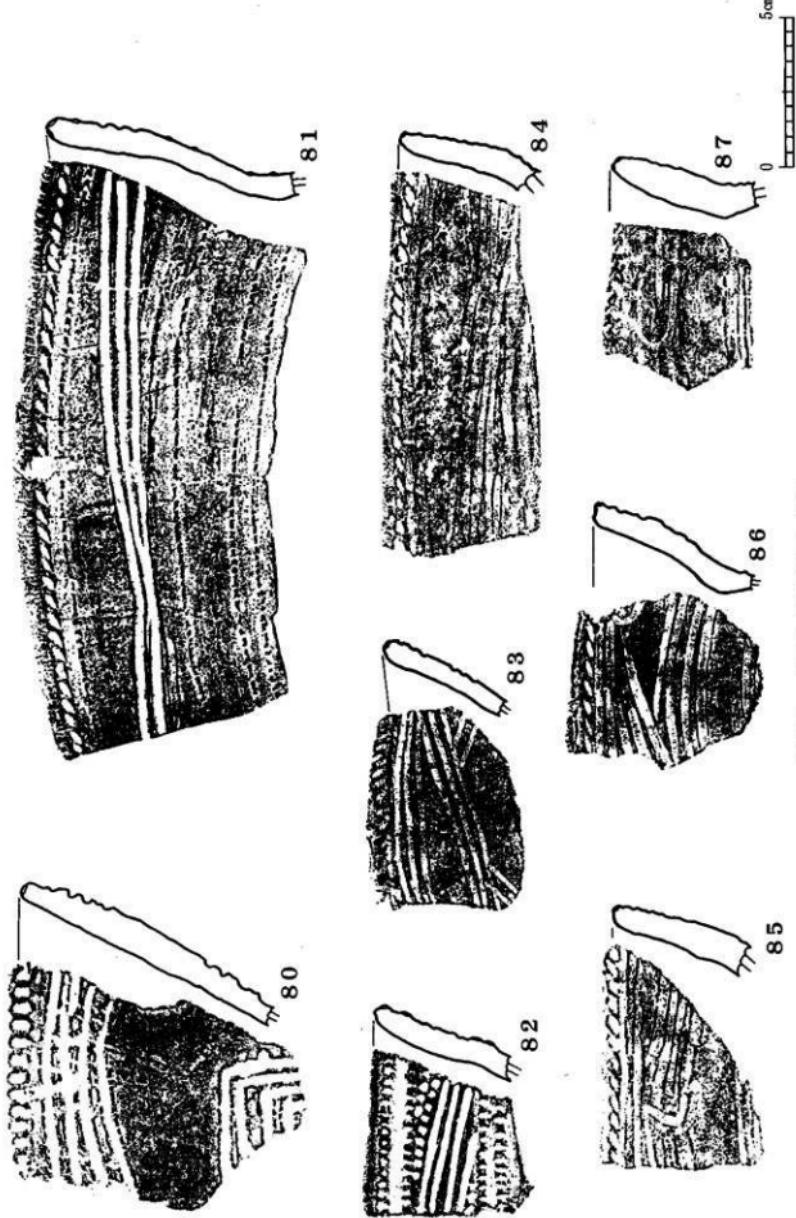
73は復元口径13.5cmを測る。口縁部上端の肥厚部外面に凹線文を施し、肥厚部下位は凹線文と刺突文で文様を構成するものである。74は肥厚部外面に凹線で円弧状の文様を施すものである。

75は口縁部外面に縄文を施すもので、結節縄文が認められるものである。

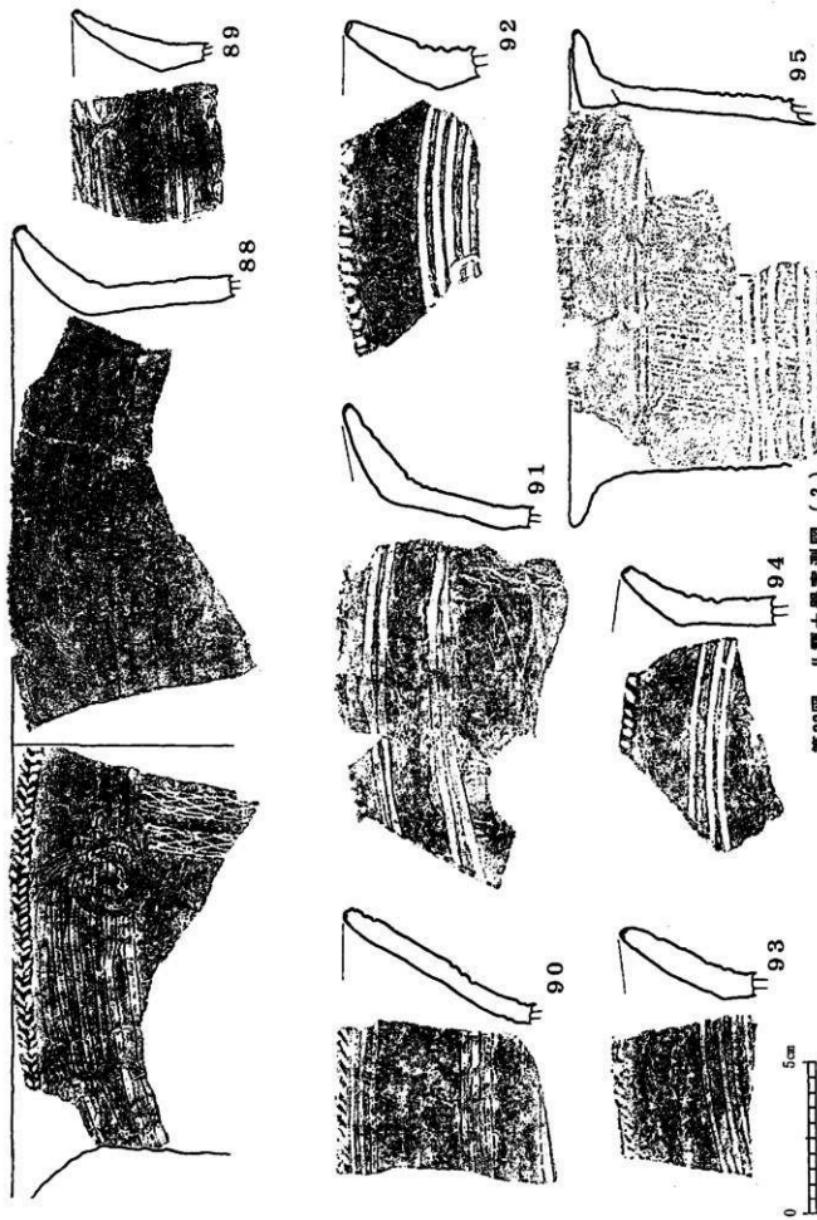
76は復元口径10.6cmを測る。口縁部上端に若干の肥厚帯を形成するが、形成が粗雑である。

77は76と同様に口縁部上端に肥厚部が認められるが、内外面とも凹凸が残り雑な器面調整である。78は胴部片でミニチュアの壺形土器と考えられる。79は壺形土器の底部近く破片と考えられるもので、平底である。

第21圖 Ⅱ類土器實測圖 (1)



第22圖 II類土器測量圖 (2)

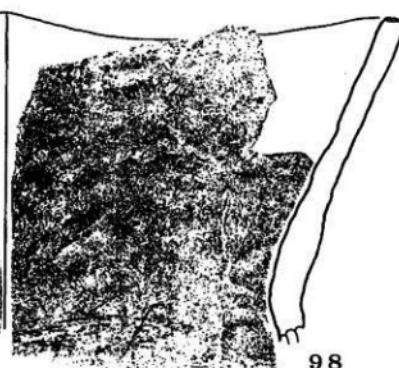
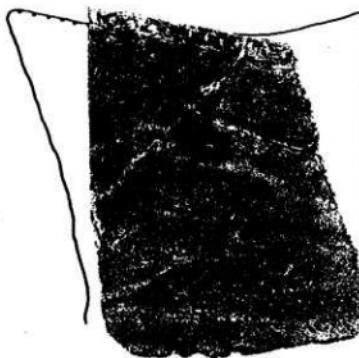




96



97



98



99



100



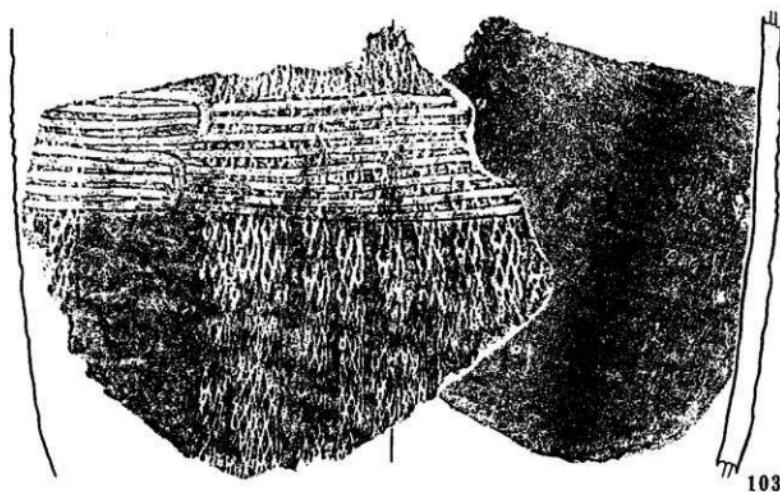
101

0 5cm

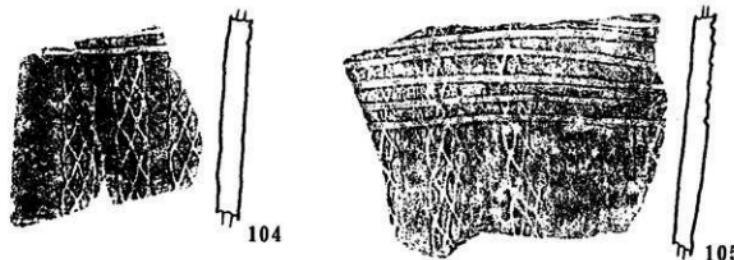
第23図 II類土器実測図 (3)



102

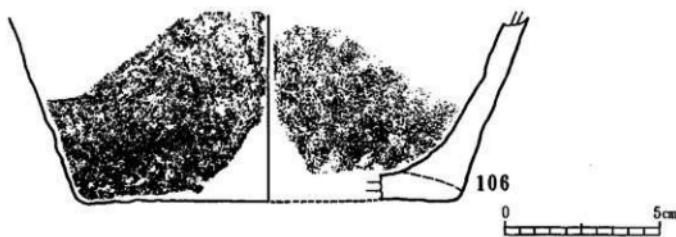


103



第24図 II類土器実測図 (4)

0 5cm



3. II・III類土器 (第21図-80~117)

深鉢形 (第21図-80~108)

①口縁部 (第21図-80~101)

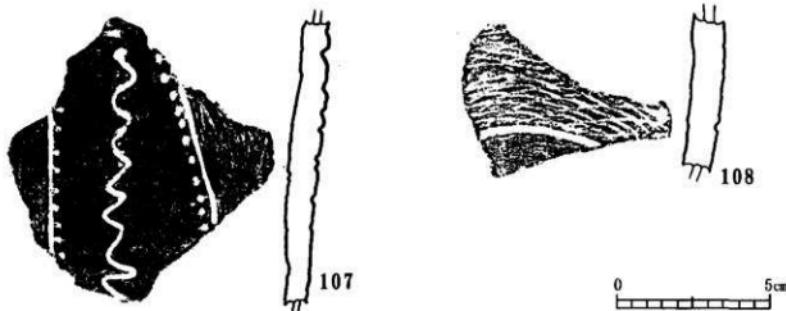
頸部から大きく外反する口縁部で、内湾気味に外反するもの(81~86)と大きく「く」の字に外反(80, 87~101)するものがある。

80は深い凹線で幾何学文を施すものである。81, 82は微隆突帯を巡らせるものである。

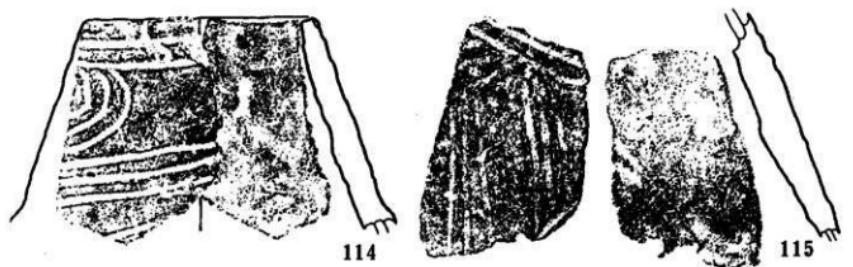
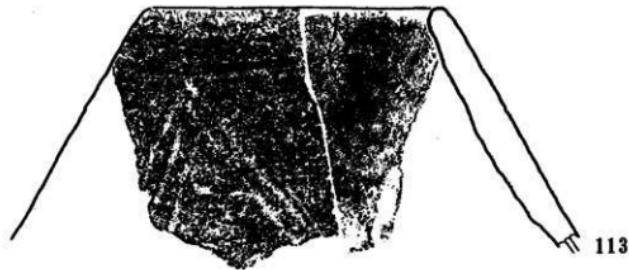
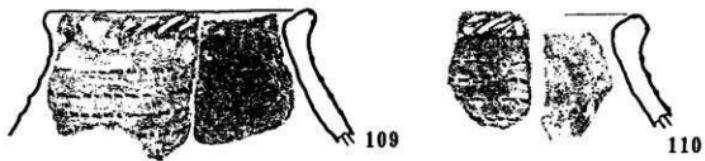
85~87は浅い凹線文を施すもので、上下の凹線文を弧状に結ぶものである。88は復元口径32.2cmを測る。口唇部に羽状の刻目を施し、口縁部外面に渦状の文様がみられるものである。胴部には撚糸文を間隔をおいて施す。90, 91は2, 3条の凹線文を巡らせるものである。92~94は数条の凹線文を頸部に施すものである。

95~97は逆し字状に屈曲するもので、いずれも口縁部は無文である。95は復元口径16.4cmを測る。継位に間隔をおいて4本の撚糸文を施した後、3本単位の凹線文を巡らせるものである。97は胴部に数条の浅い凹線を施すものである。

98, 99は口唇部に刻目を施すだけの無文の口縁部である。いずれも波状の口縁となるもので98は復元口径24.4cmを測る。

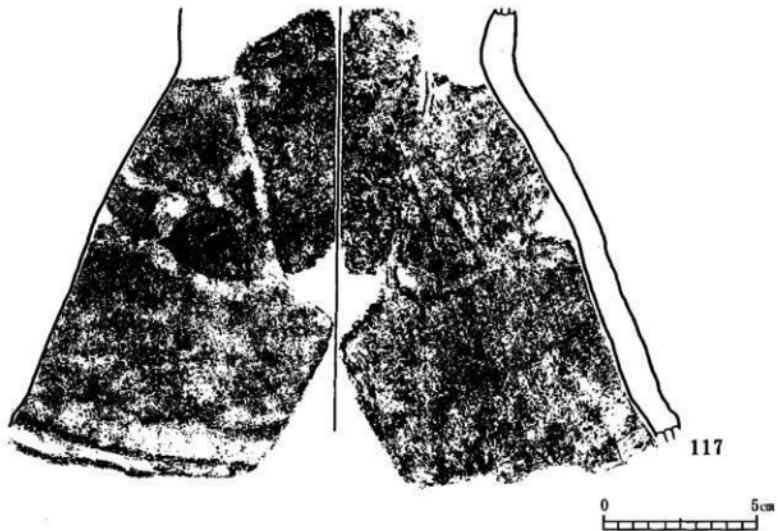
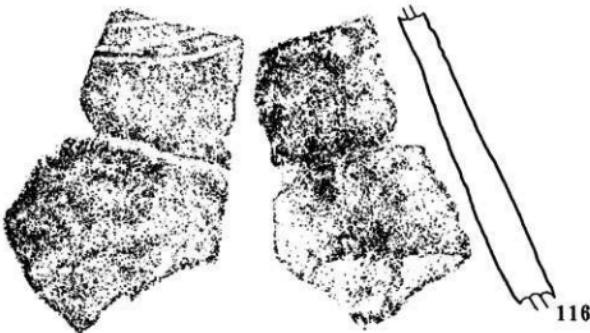


第25図 II・III類土器実測図 (5)



第26図 II 類土器実測図 (6)





第27図 II 類土器実測図 (7)

②胴部・底部 (第24図-102 ~ 106)

102, 103は撚糸文を間隔をおいて縦位に施すが、比較的間隔の近いものであり、撚糸文を施した後に凹線文を横位に巡らすものである。103は上下の凹線文を弧状に結ぶ部分も観察される。

104, 105は間隔が比較的広いもので、105は底部近くの胴部片である。106は平底の底部で外面は無文である。

107, 108は凹線文間に撚糸を充填するものである。107は縦位に波状文がみられる。

壺形土器 (第26図-109~117)

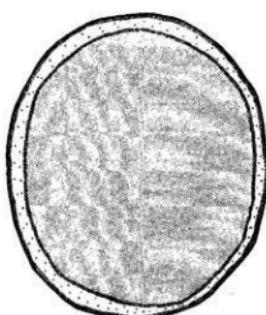
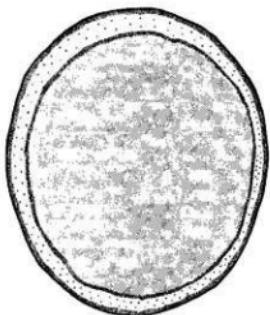
109~110は微隆突帯を巡らすものである。109は復元口径8.7cmを測り、口唇部に刻目を施すものである。111、112は円弧状の微隆突帯を施文するものである。

113~116は凹線を施文するものである。113は復元口径9.7cmを測る。三本単位の浅い凹線文で幾何学文を施すものである。114は口唇部に刻目を施すもので、復元口径7.2cmを測る。半円弧状の文様がみられる。116は口縁部近くの破片と考えられるもので、上位に凹線文が認められるものである。117は胴部から内傾しながら、口縁部端が外反気味に立ち上がるものである。破片端部には粘土紐らしきものが貼りつけてある。

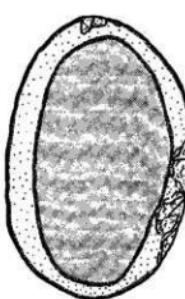
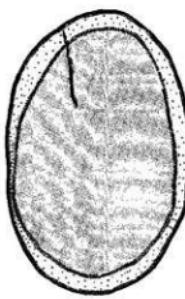
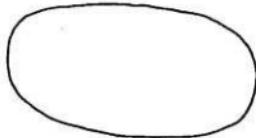
4. 出土石器 (第28図-S1~S7)

S1~S6は磨石・敲石である。S1は橢円状の礫を使用し、S2は継長のものを利用している。S2には周縁に敲打痕が認められ、磨る、叩きの両方の機能がうかがえる。S3はほぼ円形の礫を使用し、敲打痕と片面の磨面が観察できる。S4は部分的に磨面が観察されるものである。S5は比較的厚みの薄い礫を利用し、片面だけに磨面が認められる。

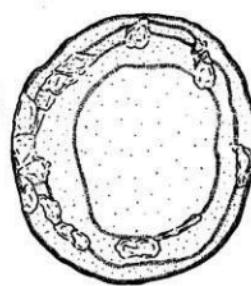
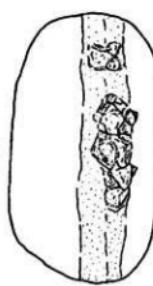
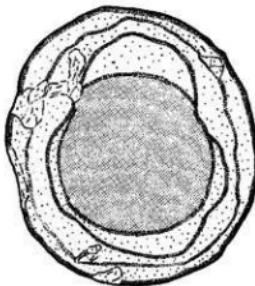
S7はノミ形磨製石斧と考えられるものである。刃部は破損しているが、入念な研磨がなされている。



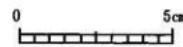
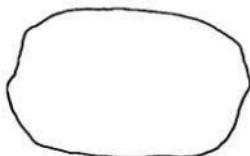
S 1



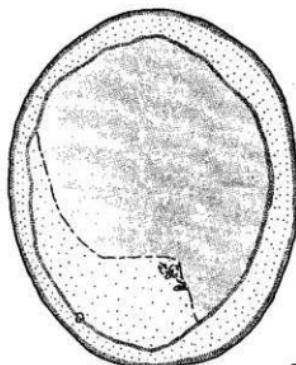
S 2



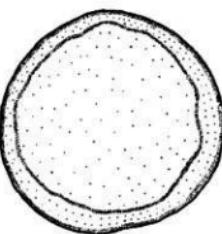
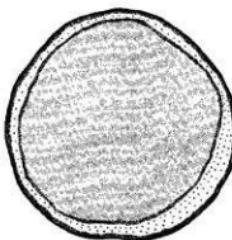
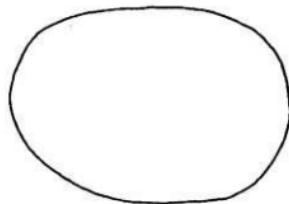
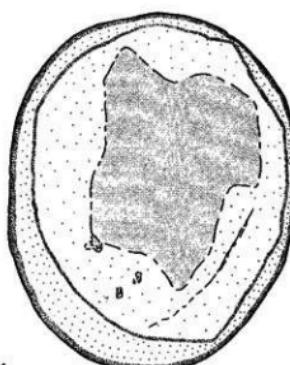
S 3



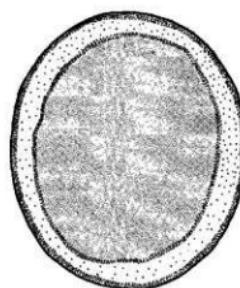
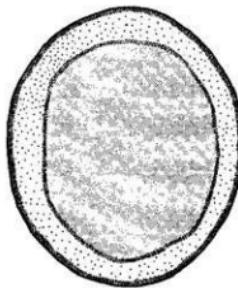
第28図 石器実測図(1)



S 4



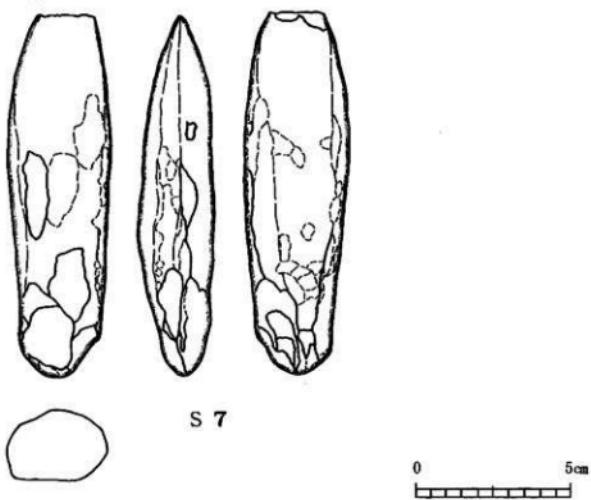
S 5



S 6



第29図 石器実測図 (2)



第29図 石器実測図（2）

第5節 緊急確認調査の調査概要

大長野B遺跡確認調査によって、縄文時代早期の遺物包含層が台地の中央部分に点在していることが判明した。そこで、事業主体者である大隅耕地事務所、町耕地課と協議した結果、次のように対処することとなった。

トレンチから遺物が出土した畑地については、盛土工法により現地保存の措置をとり、現地保存の不可能な既設道路部分については、平成2年度内の事業執行が困難なために、平成3年度に緊急の発掘調査をすることとなった。

緊急発掘調査の本格調査に至るまでは多大な時間を要した。既設道路部分には大きな水道管が埋設されており、移動不可能であった。そこで、水道管を丸太で持ち上げながら支えをつくり、掘り下げていかなければならなかった。加えて、昔からの道路であったため遺物包含層が異常に硬かった。調査は、重機によりアスファルト・砂利およびI～IV層を剥ぎとった後、V、VI層の遺物包含層を人力で掘り下げた。包含層は西側から東側に急傾斜していた。

今回の調査では、縄文時代早期の平底式、塞ノ神式土器が多量に出土した。また南九州独特のものとして注目されている壺形土器も出土した。

第6節 出土遺物

1. 出土土器の形態分類

V、VI層の遺物包含層から出土した土器を形態上の特徴からI～V類土器に類別した。緊急発掘調査においてはII、III類土器としたものが圧倒的に多く、本遺跡の中心となるものである。

I類土器（第34図-118～132）

押型文系の土器片で山形押型文と隋円押型文の両方が存在する。

II類土器（第36図-133～184）

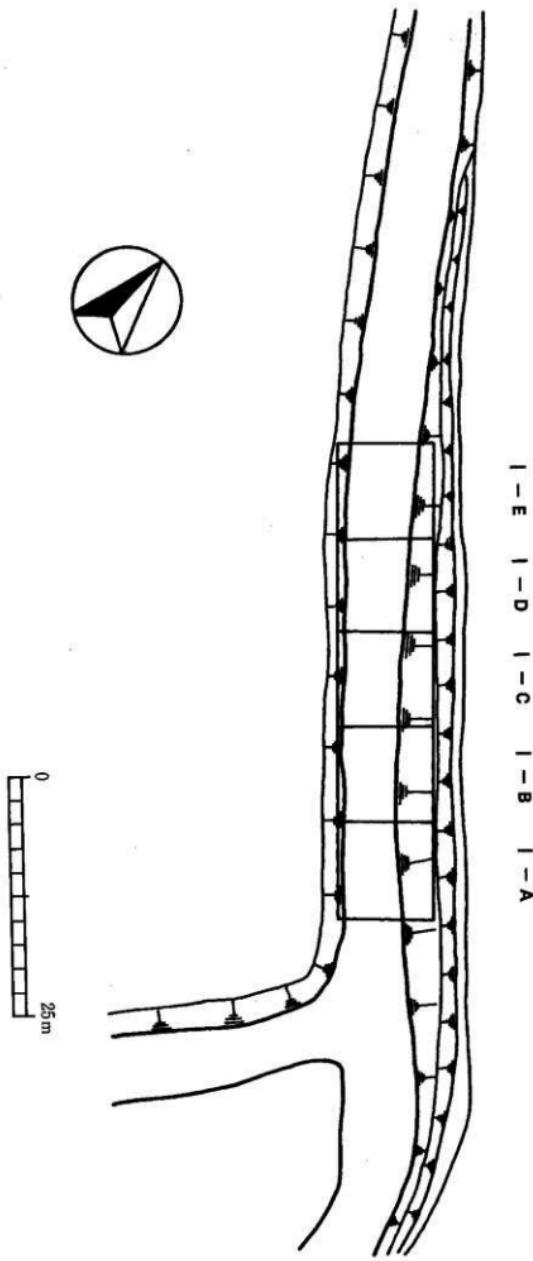
II類土器は形態上の特徴から①深鉢形と②壺形に分けられる。

①深鉢形は、(1)幅広肥厚口縁帯と(2)幅狭肥厚口縁帯に類別され、明確に類別できないものなどを(3)その他とした。

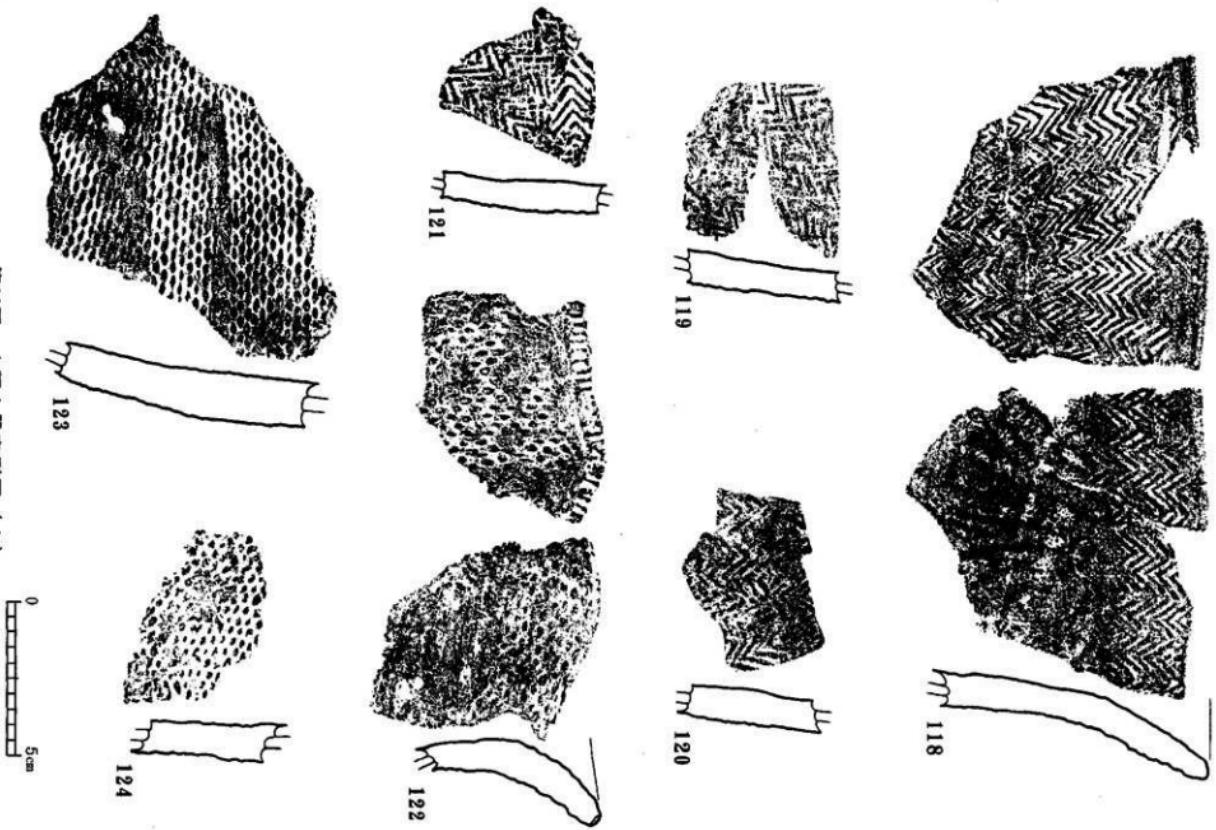
②壺形は、壺形土器と考えられるものを一括して説明することとした。

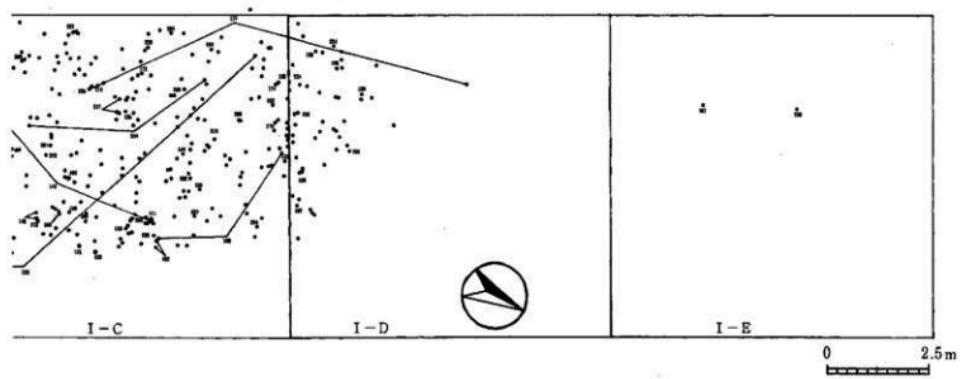
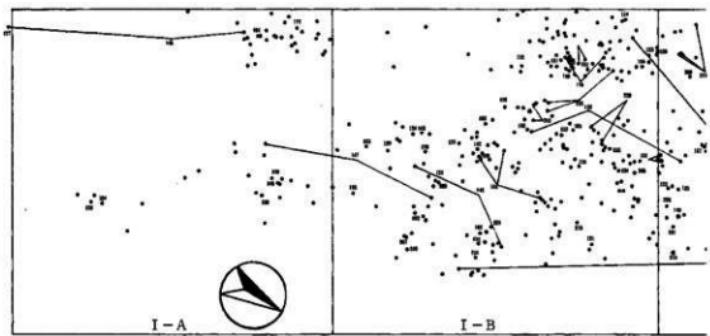
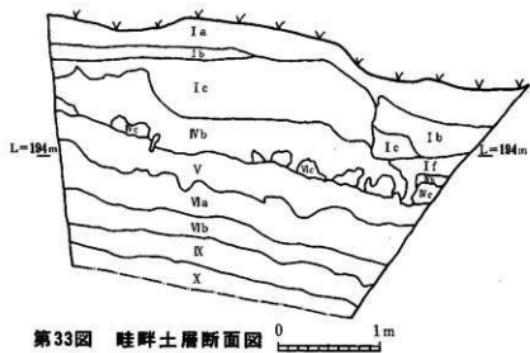
III類土器（第44図-185～231）

第31図 緊急発掘調査グリッド配置図



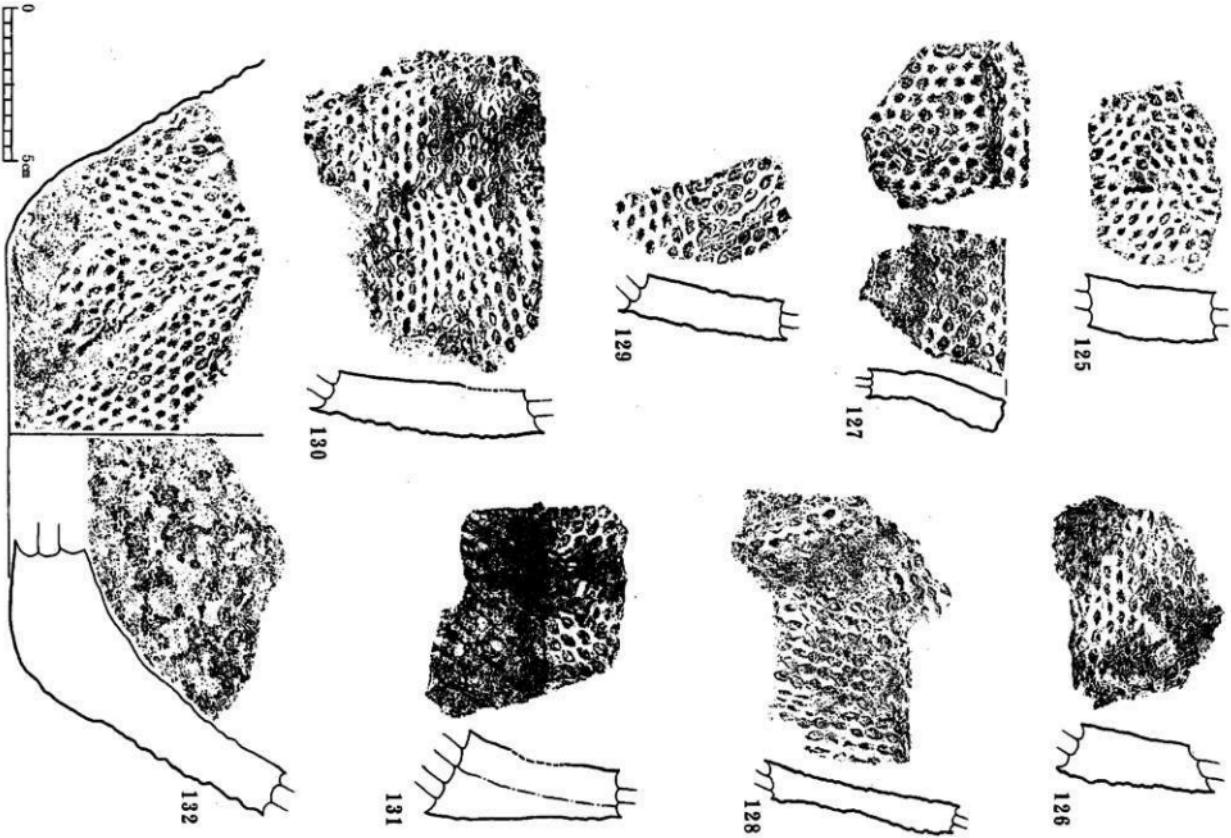
第32図 1 磁土器実測図 (1)



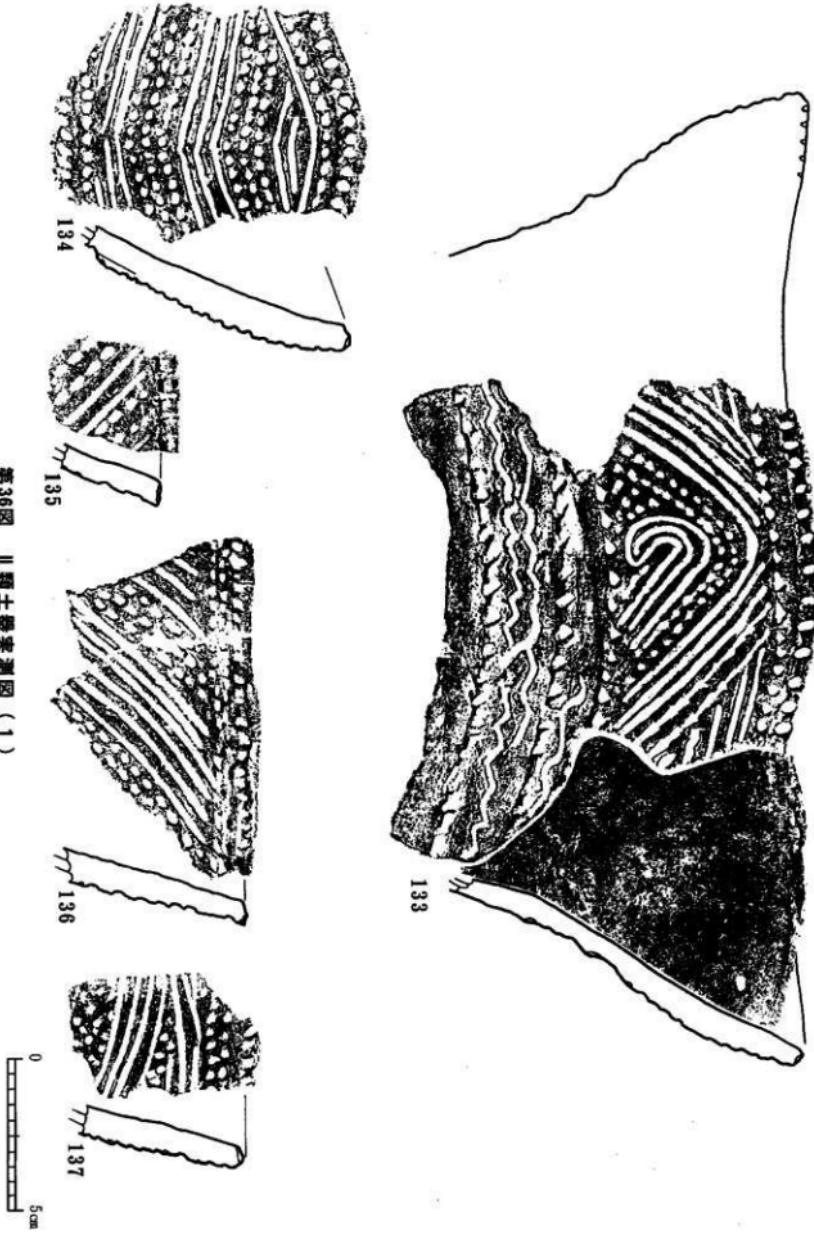


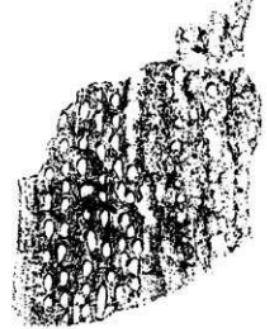
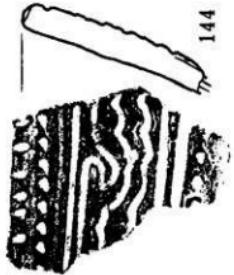
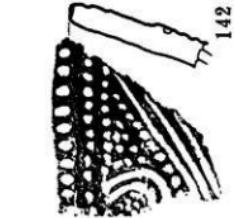
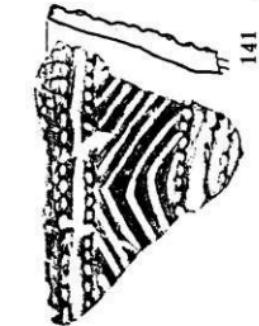
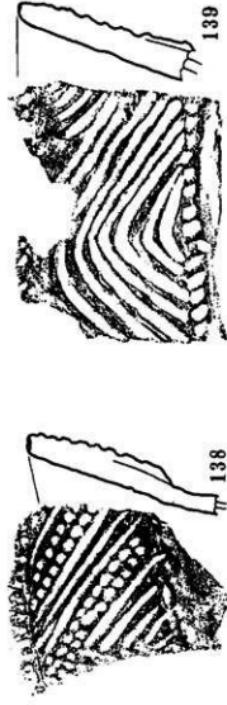
第34図 緊急発掘調査出土状況平面図

第35図 1 磁土器実測図 (2)



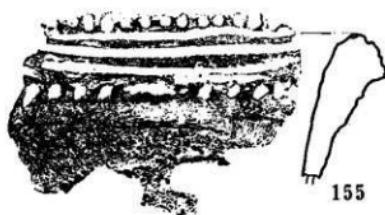
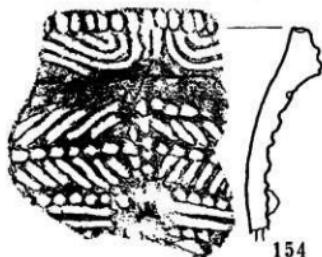
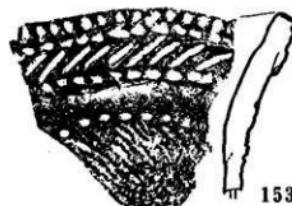
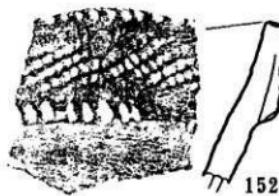
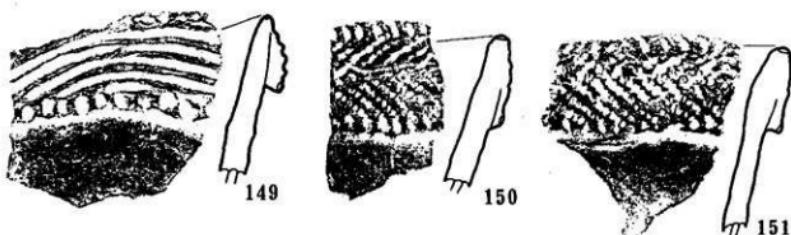
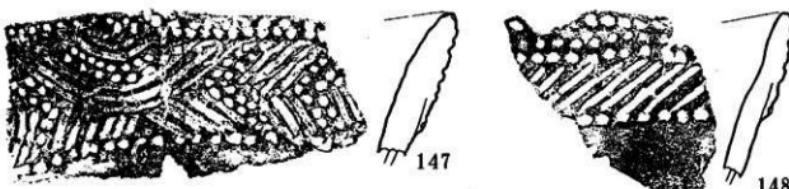
第36圖 Ⅱ類土壤剖面圖（1）



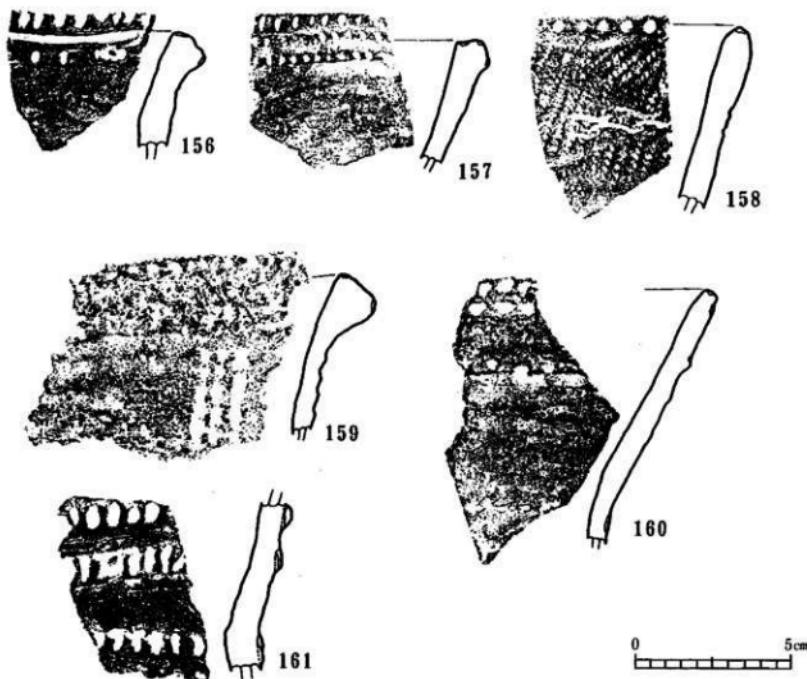


0 5cm

第37圖 II 土壠測量圖 (2)



第38図 II 類土器実測図 (3)



第39図 II 類土器実測図 (4)

III 類土器は形態上の特徴から①深鉢形と②壺形に分けられる。

①深鉢形は、口縁部が「く」の字に外反するもの。

②壺形は、壺形土器と考えられるものを一括して説明することとした。

IV 類土器 (第52図—232 ~ 235)

凹線の区画内に撚糸文を施すものである。

V 類土器 (第53図—236)

貝殻刺突連続文と条線文を施すものである。

2. I類土器 (第34図—118~132)

118~121は山形押型文を施すものである。128はやや外反する口縁部で、内外面に押型文を施すものである。

122~132は楕円押型文を施すものである。122は大きく外反する波状の口縁部で、比較的細かな押型文が内外面に施される。127はやや外反する口縁部で、大きな押型文が施される。

3. II類土器 (第36図—133~184)

深鉢形 (第36図—133~177)

①口縁部 (第36図—133~161)

(1)幅広の肥厚口縁帯を形成するもの。(第36図—133~146)

133は波状口縁となるもので復元口径31cmを測り、若干内湾気味に外反する口縁部である。口唇部に刺突による刻目を施し、凹線で三角形や渦文状の文様と刺突文を組み合わせて1つの文様を形成している。139は三角形状の文様を施すものである。142は半円弧状の文様が認められる。

143は波状文と横位の凹線文で文様構成するものである。144は平行凹線文を施すものである。145は頸部から外反する口縁部が外湾気味に立ち上がるものである。外面には刺突文を巡らせるものである。146は大きく外反する口縁部である。比較的大きな縄文を斜位に施すものである。

(2)幅狭の肥厚口縁帯を形成するもの。(第38図—147~152)

147は浅い凹線文と刺突文で文様構成するもので、凹線による羽状文や半円弧文がみられる。148は斜線文を施すものである。149は半円弧状の波状文を施すものである。

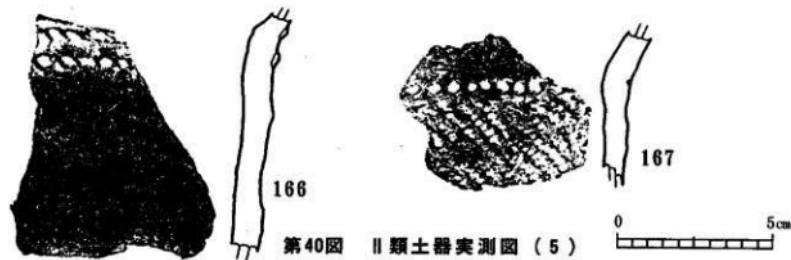
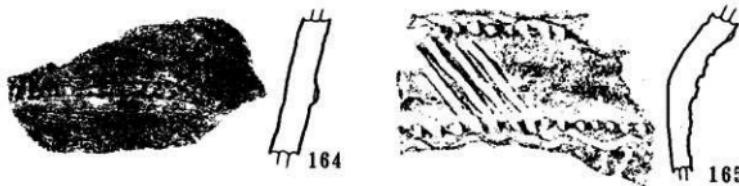
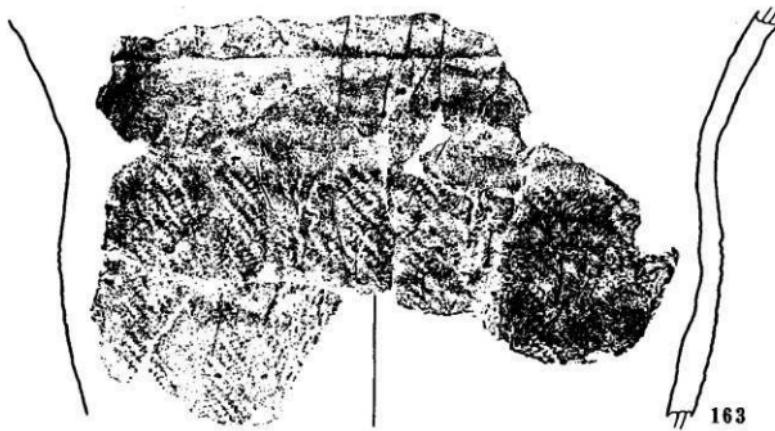
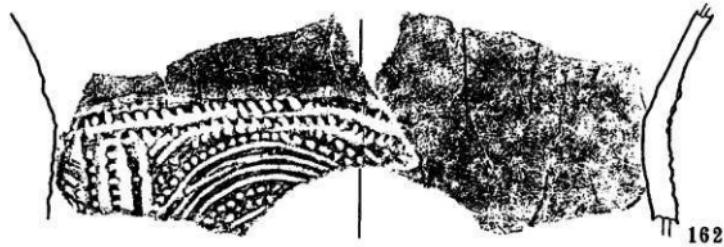
150, 151は縄文で羽状文を施すものである。152は若干内湾気味になる口縁で、縄文を斜位に施すものである。

(3)その他 (第38図—153~161)

153は斜線文を施すものである。154は凹線で幾何学文を施すものである。155, 156は凹線文を横位に巡らすものである。157は微隆突帯を施す。159は著しく摩滅しているが、肥厚部下位に継位の刺突文がみられる。160は若干肥厚する口縁で、刺突文が認められる。161は若干太めの刻目突帯を巡らせるものである。

②頸部・胴部・底部 (第40図—162~177)

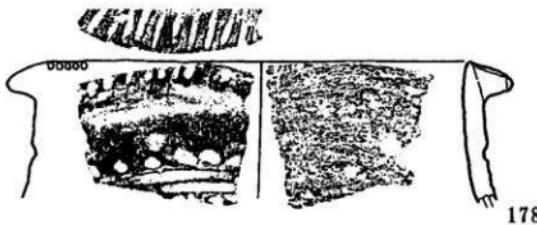
162は半円弧状の文様を施すもので、縦位に微隆突帯がみられる。163は若干膨らみをもつ



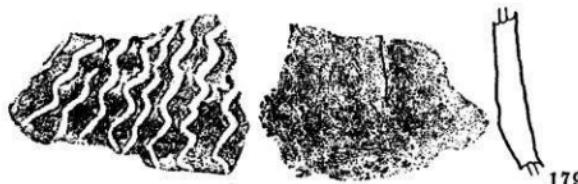
第40図 II 類土器実測図 (5)



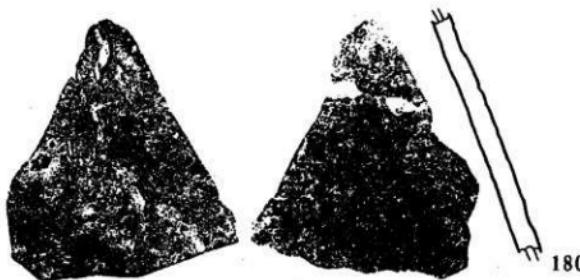
第41図 II 類土器実測図 (6)



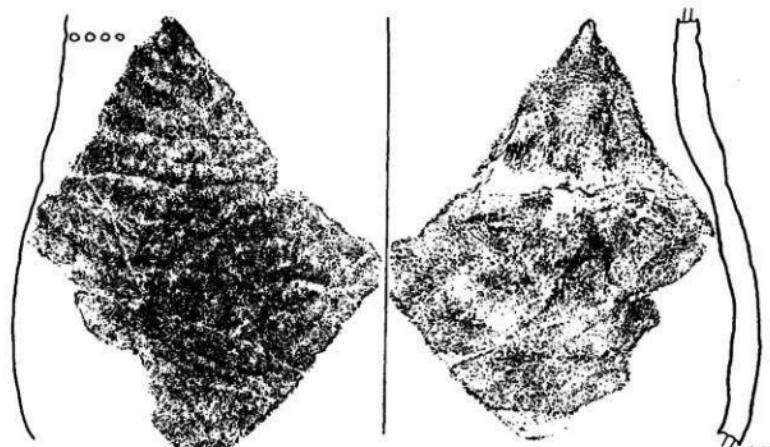
178



179

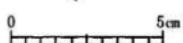


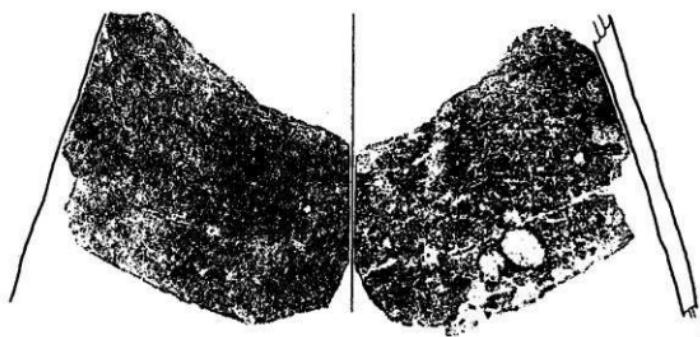
180



181

第42図 II 類土器実測図 (7)

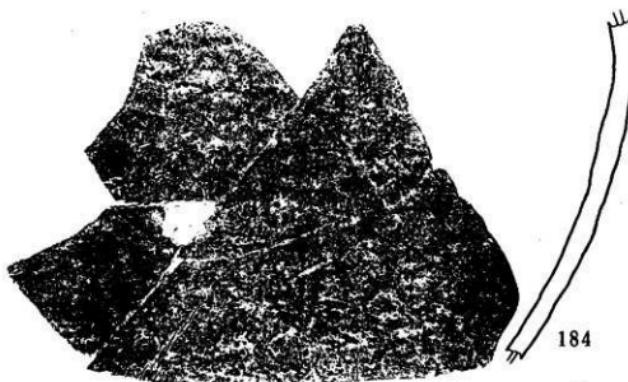




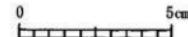
182



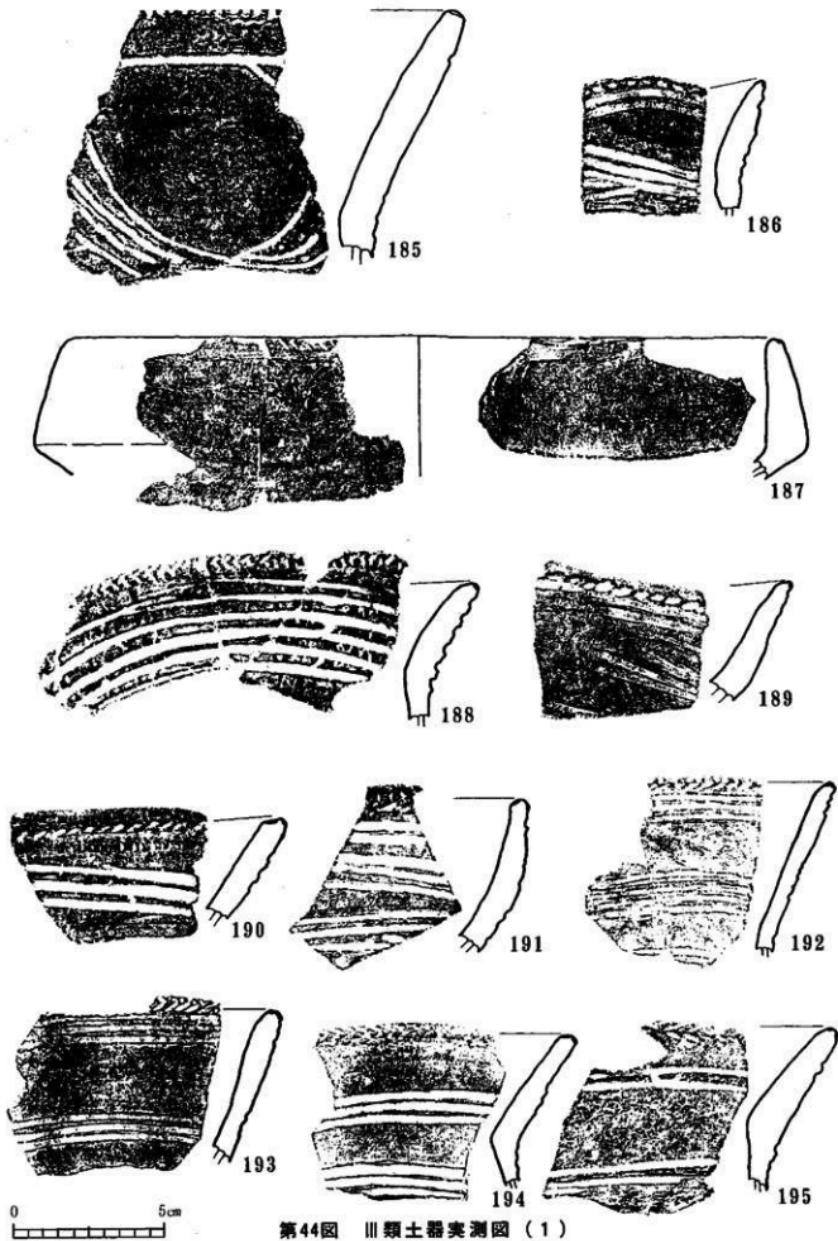
183



184



第43図 II 類土器実測図 (8)



第44図 III類土器実測図(1)

第45図 II 硬土器実測図 (2)

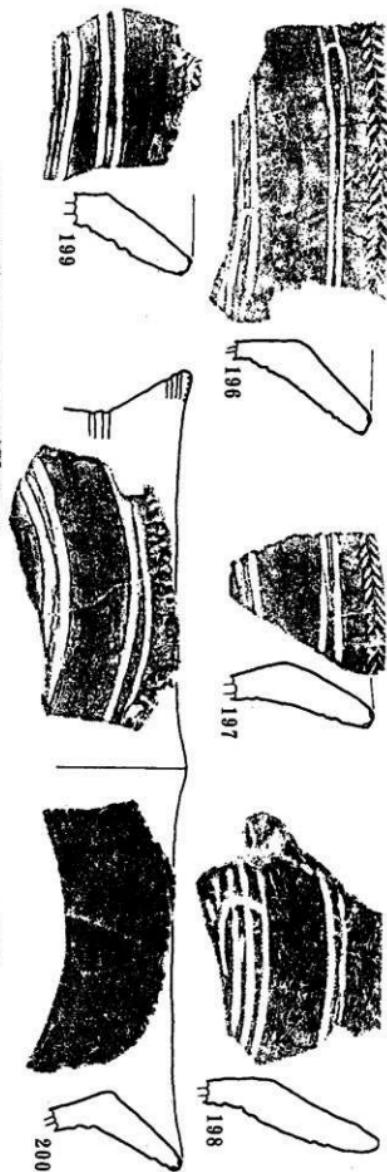
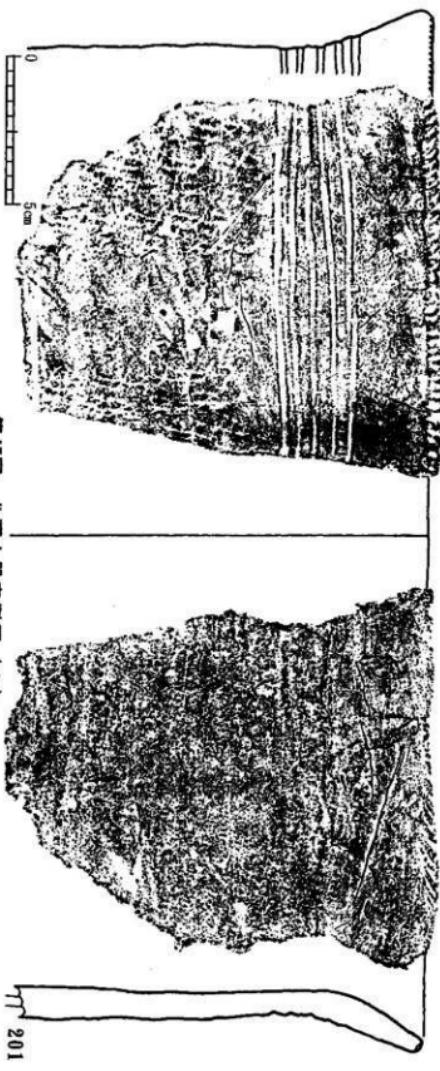
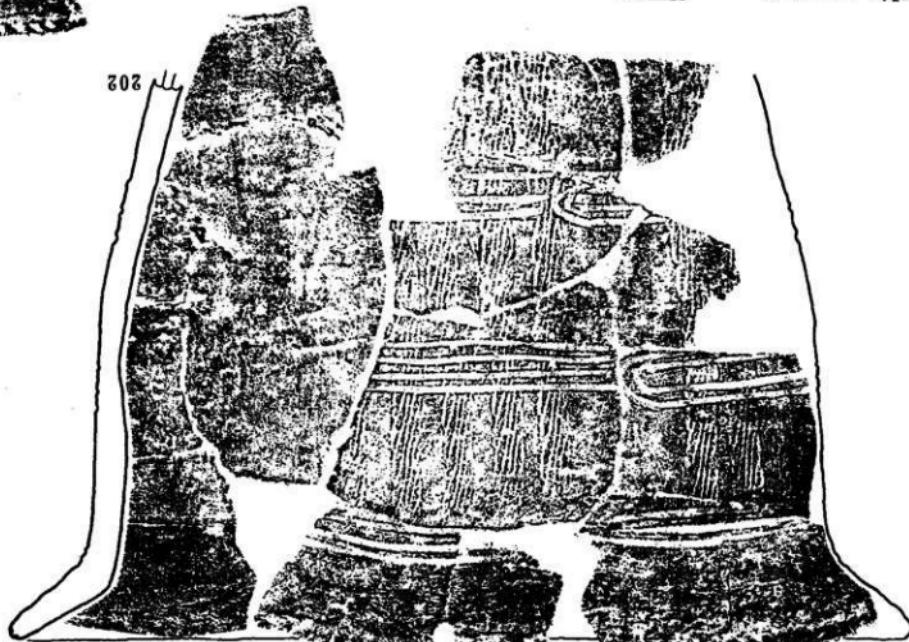
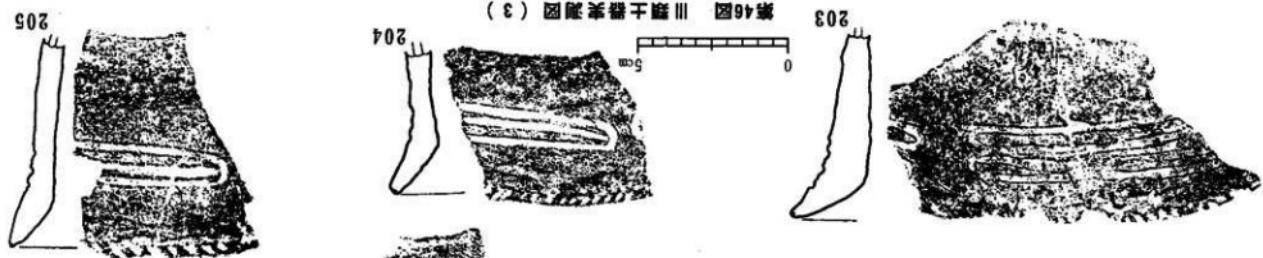
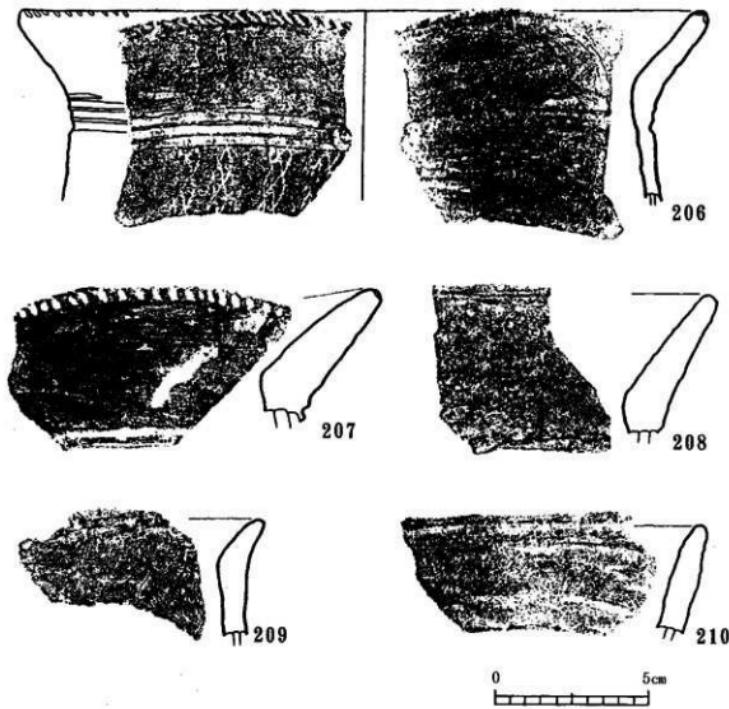


圖46圖 III 磁土器實測圖 (3)





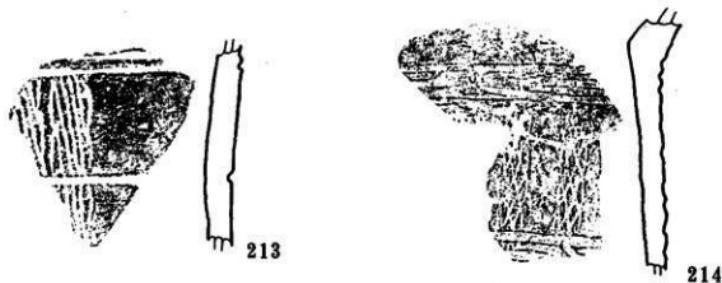
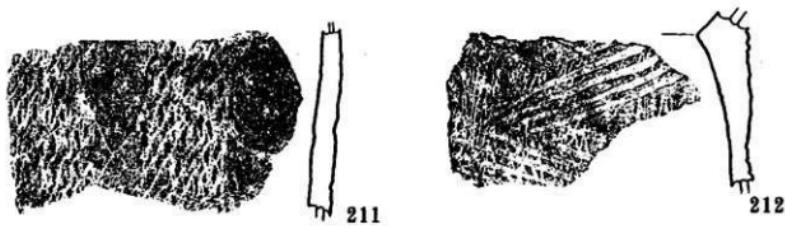
第47図 III類土器実測図 (4)

た胸部から外反する口縁部に至ると考えられるものである。下位に縄文が観察される。165は斜線文を施すものである。166は頸部下位に文様を施さない。168は結節縄文が認められる。169は緩やかに膨む胴部片で、5本単位の凹線文を縦位に施すものである。173は刺突文が認められる。175は著しく摩滅している。176、177はミニチュア土器の底部と考えられるもので176は縄文がみられる平底の底部である。

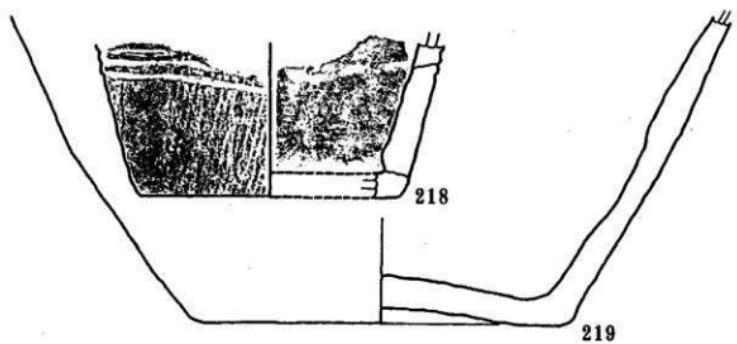
壺形土器 (第42図-178~184)

178は刺突文と凹線文を施すもので復元口径13.7cmを測る。179は波状文を縦位に施すものである。181は胸部から内傾しながら緩やかに外反すると考えられるものである。上位に刺突文が観察される。182、183は内傾するもので、無文の破片である。184は底部近くの破片と考えられるもので、若干器壁が薄いものである。

4. III類土器 (第44図-185~231)

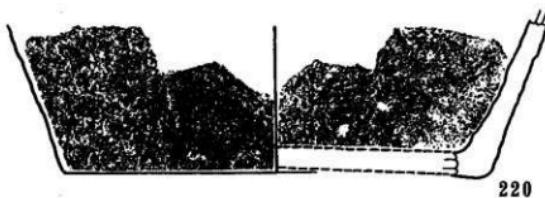


第48図 Ⅲ類土器実測図 (5)

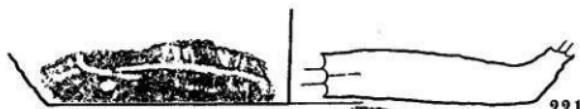


218

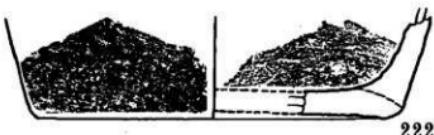
219



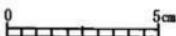
220



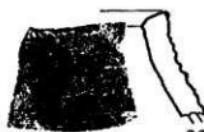
221



222



第49図 III類土器実測図 (6)



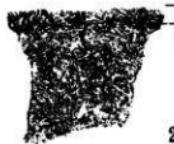
223



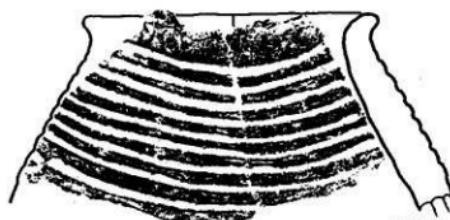
224



225

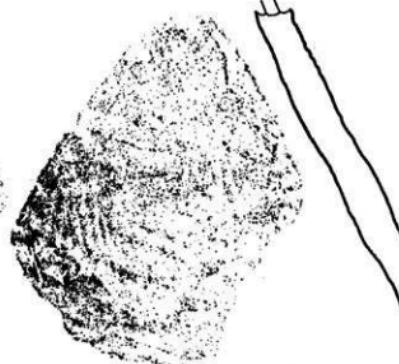


226



227

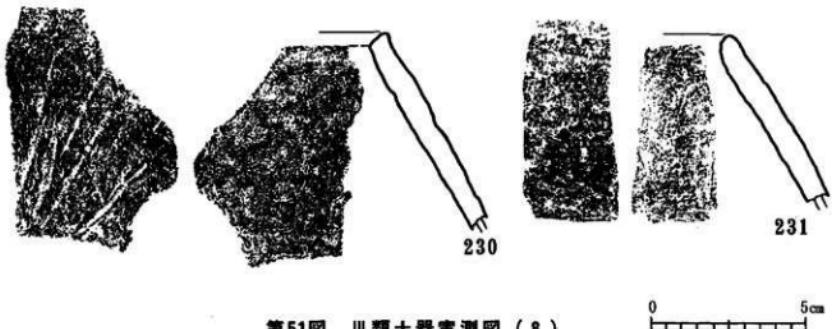
228



229



第50図 III 類土器実測図 (7)



第51図 III 類土器実測図 (8)

深鉢形 (第44図-185~222)

①口縁部 (第44図-185~210)

185は凹線により幾何学文を施すものである。187はキャリバー状に屈曲する口縁である。復元口径23.6cmを測る。188は撚糸文を縦位に施した後、凹線文を横位に巡らしその上下を弧状に結ぶものである。189, 191は若干内湾味に外反する口縁部である。190は口縁部上端に微隆突帯が認められる。

192~194は口唇部に羽状の刻目を施し、3本単位の凹線文を巡らすものである。195~200は口縁部に2本単位の凹線文を巡らせるもので、196のように上下を弧状に結ぶ部分が観察されるものもある。200は波状の口縁となるもので、復元口径26.4cmを測る。

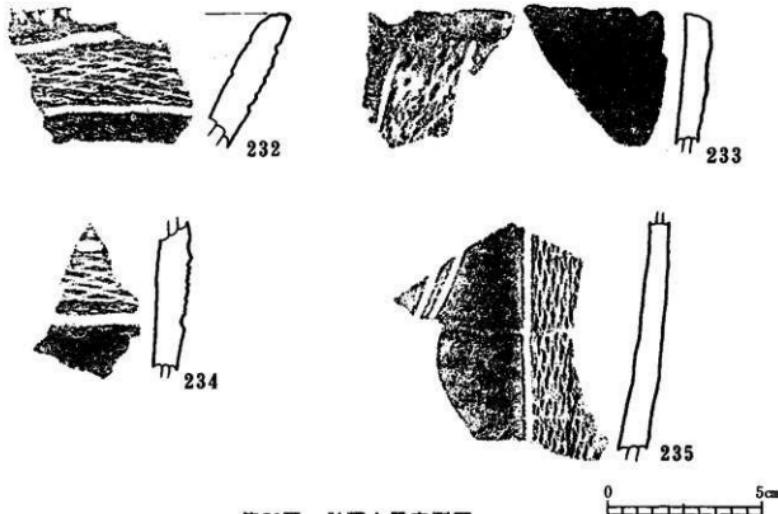
201~207は頸部に凹線文を巡らすもので、口縁部は無文のものである。201は復元口径34.3cmを測る。口唇部に刻目を有し、頸部に5本の凹線文を巡らす。撚糸文の間隔は比較的近いようである。202は口唇部に羽状の刻み目を有し、間隔をおいた撚糸文を縦位に施した後、横位の凹線文を施すものである。復元口径29.2cmを測る。204, 205は3本単位の凹線文の上下を弧状に結ぶものである。206は復元口径22.3cmを測り、撚糸文を間隔をおいて施文するものである。208~210は外反する無文の口縁部である。

②胴部・底部 (第48図-211~222)

211は間隔をおかずには撚糸文を施すものである。212は頸部の近くの破片である。縦位の撚糸文を施した後、凹線文や幾何学文を施文するものである。

213~216は間隔をおいて撚糸文を施文するものである。217は底部付近の胴部片で、若干間隔をおいた縦位の撚糸文を施した後、2, 3本単位の凹線文を巡らすものである。上下の凹線文を弧状に結ぶ部分も観察される。

218~222は底部片で若干上げ底になるものである。218, 219は底部下端に撚糸文が観察される。



第52図 IV類土器実測図

壺形土器 (第50図—223~231)

223~225は微隆突帯を巡らせるものである。226は摩滅していくて明瞭ではないが、口唇部に刻目を有し、凹線によって生じた隆起部に刻目を施すものである。

227~229は凹線を施文するものである。227は口縁部上端が若干外反気味に立ち上がるもので、凹線文を数条巡らせるものである。復元口径9.5cmを測る。229は胴部と考えられるもので、上位に不規則な凹線文を施すものである。

230は不規則な刻線文を施すものである。231は無文のものである。

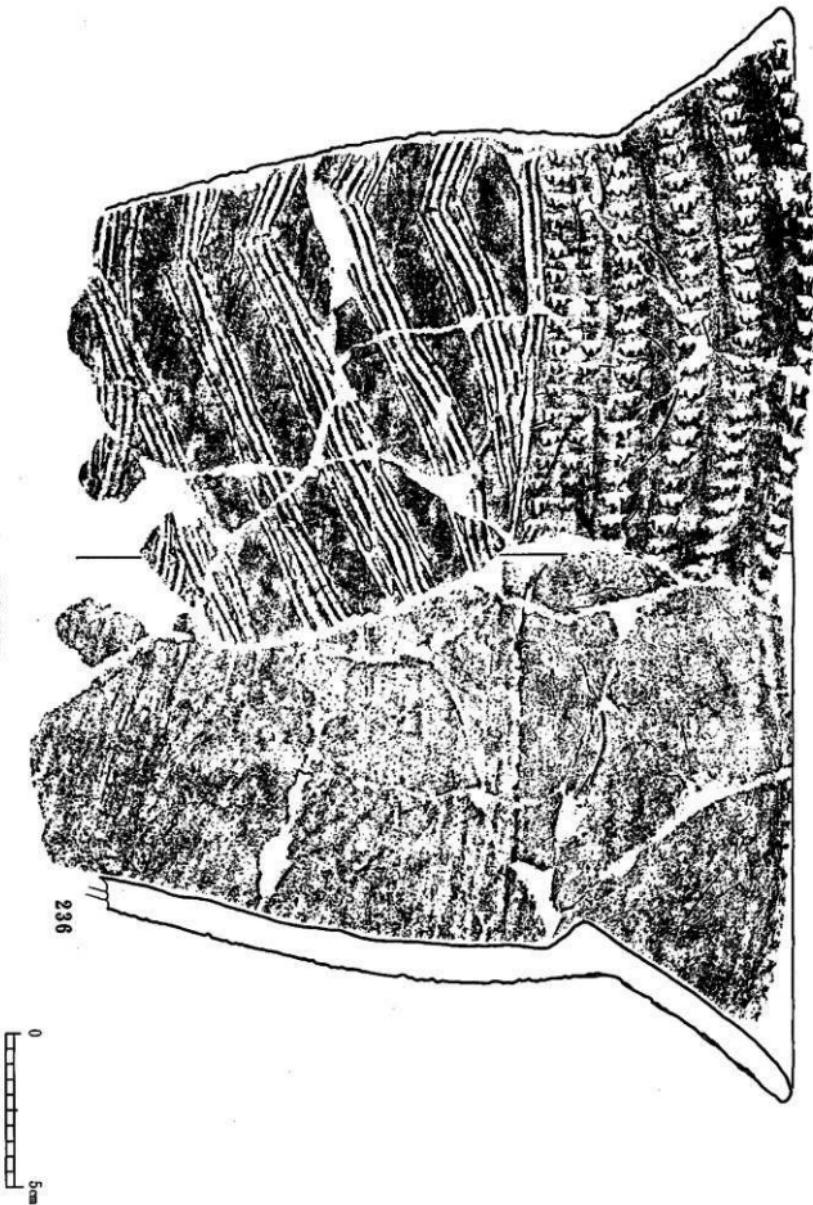
5. IV類土器 (第52図—232~235)

凹線文の区画内の撚糸文を充填するもので、232は外反する口縁部で口唇部に刻目を有する。232は胴部片で補修孔がみられるものである。孔は外面からあけたものと考えられる。234, 235は胴部片である。

6. V類土器 (第53図—236)

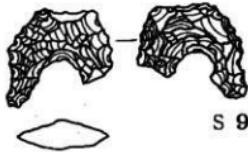
236は口縁部に貝殻復縁による刺突連続文を巡らせ、胴部に条線文を施文するものである。器形は、頸部から大きく「く」の字状に外反する口縁部となるものである。屈曲部内面に明瞭な稜をもつ。復元口径34.9cmを測る。

第53圖 V型土器素描圖

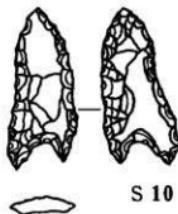




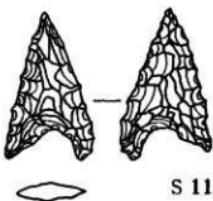
S 8



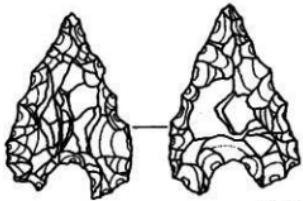
S 9



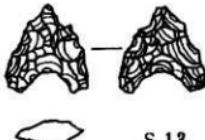
S 10



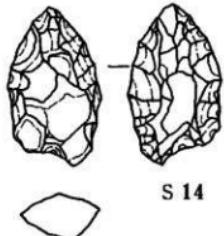
S 11



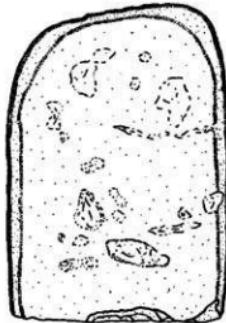
S 12



S 13



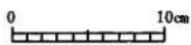
S 14

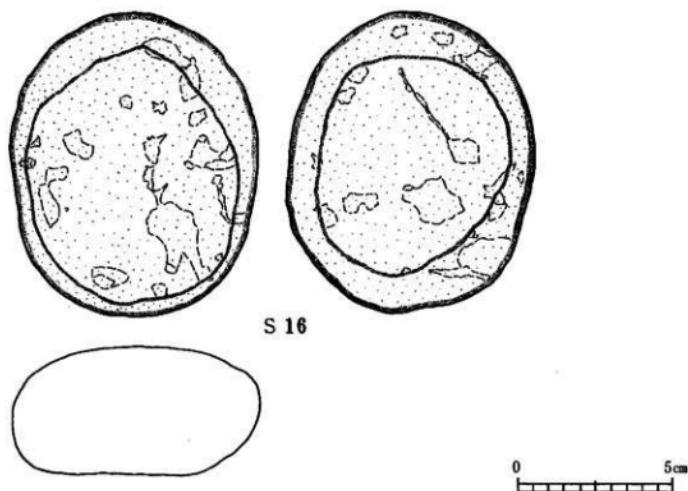


S 15



第54図 石器実測図(1)





第55図 石器実測図（2）

7. 出土石器（第54図-S 8～S 16）

S 8～S 13は石鎌と考えられるものである。S 8の片方は剥片素材の主要剥離面を残し、二次加工が側辺部にとどまるものである。先端部は欠損おり、側辺は直線状で抉りは深い。S 9は先端部と右基部は欠損しており、側辺は内湾気味で抉りは深い。S 10は先端部は普通で、側辺はふぞろいな形状となるものである。S 11の先端部は普通で、側辺は直線状となるものである。S 12の先端部は欠損おり、基部の抉りは浅い。S 13の先端部は欠損しているが、小形の鎌と考えられるもので、側辺は直線状となる。

S 14は未製品と考えられるもので、側辺の二次加工が認められない部分もある。S 15は全面に敲打痕を残すもので、敲石と考えられるものである。

第2表 土器觀察表

掲出番号	番号	類別	区・層	胎 土	色 調	調整	焼 成	備 考
7 図	1		1 T · V	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	良好	
	2		1 T · V	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	3		2 T · V	角閃石・長石・金雲母	茶褐色	ナデ	やや不良	
	4		3 T · II	角閃石・長石	茶灰色	ナデ	良好	内面摩滅
	5		3 T · VI	角閃石・長石	茶灰色	ナデ	不良	継ぎ目
	6		3 T · VI	角閃石・長石	茶灰色	ナデ	良好	スス付着
	7		3 T · V	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
8 図	8		3 T · VI	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	やや不良	外側摩滅
	9		9 T · IV a	角閃石・長石	淡黃褐色	ナデ	やや不良	摩滅
	10		11 T · IV b	角閃石・長石	褐色	ナデ	不良	器面凹凸
	11		11 T · IV a	角閃石・長石	茶褐色	荒いナデ	良好	
	12		11 T · 一括	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	良好	
	13		11 T · IV b	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	
	14		11 T · VI	長石・石英・金雲母	褐色	ナデ	良好	多量のスス付着
9 図	15		11 T · IV b	角閃石・長石・石英	茶灰色	ナデ	良好	摩滅
	16		11 T · IV b	角閃石・長石・金雲母	褐色	ナデ	良好	スス付着
	17		11 T · IV b	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	摩滅
	18		11 T · IV b	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	
	19		11 T · IV b	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	20		11 T · IV b	長石・金雲母・石英	茶褐色	ナデ	良好	やや摩滅
	21		11 T · IV b	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	良好	
10 図	22		金雲母・石英		茶褐色	丁寧ナデ	良好	
	23		11 T · 一括	角閃石・長石	茶褐色	荒いナデ	良好	
	24		12 T · VI b	角閃石・長石	茶褐色	丁寧ナデ	良好	
	25		12 T · VI b	角閃石・金雲母	茶褐色	丁寧ナデ	良好	
	26		12 T · VI b	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	ナデ	良好	
	27		12 T · VI	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	28		12 T · VI b	角閃石・長石・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	
11 図	29		12 T · VI b	角閃石・長石・金雲母	茶褐色	荒いナデ	良好	スス付着
	30		12 T · V	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	良好	
	31		12 T · V	石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	器面凹凸
	32	I	1 区 · VI b	角閃石・長石・黒雲母	暗茶褐色	丁寧ナデ	良好	
	33	々	1 区 · VI b	角閃石・長石	暗茶褐色	丁寧ナデ	良好	スス付着
	34	々	1 区 · VI b	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	35	々	1 区 · VI b	角閃石・長石・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
12 図	36	々	1 区 · VI b	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	
	37	々	1 区 · VI b	長石・石英	暗茶褐色	丁寧ナデ	良好	
	38	々	1 区 · VI b	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	39	々	1 区 · VI b	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	砂粒多し・摩滅
	40	々	1 区 · VI b	角閃石・長石	明黄褐色	丁寧ナデ	良好	スス付着
	41	々	1 区 · VI b	角閃石・長石・黒雲母	暗茶褐色	丁寧ナデ	良好	多量のスス付着・摩滅
	42	々	1 区 · VI b	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	良好	
13 図	43	々	1 区 · VI b	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	44	々	1 区 · VI b	角閃石・長石・金雲母	褐色	ナデ	良好	継ぎ目
	45	々	1 区 · V	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	良好	
	46	々	1 区 · V	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	47	々	2 区 · VI b	角閃石・長石・金雲母	暗茶褐色	ナデ	良好	
	48	々	1 区 · V	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	49	々	1 区 · VI b	角閃石・長石	黃褐色	ナデ	良好	摩滅
14 図	50	々	2 区 · VI b	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	継ぎ目
	51	々	1 区 · VI b	角閃石・長石・石英・金雲母	淡茶褐色	ナデ	良好	継ぎ目
	52	々	1 区 · VB	角閃石・長石・石英・金雲母	茶灰色	ナデ	良好	
	53	々	1 区 · VI b	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着

第3表 土器観察表

排図番号	番号	類別	区・層	胎 土	色 調	調整	焼 成	備 考
15	54	タ	1区・VI a	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	55	タ	1区・VI b	角閃石・長石	茶灰褐色	ナデ	不良	スス付着
16	56	タ	1区・VI b	角閃石・長石・黒雲母	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	57	タ	1区・VI b	角閃石・長石・石英・金雲母	暗茶褐色	ナデ	良好	繼ぎ目
17	58	タ	2区・VI b	角閃石・長石・石英・金雲母	暗茶褐色	ナデ	良好	摩滅・繼ぎ目
	59	タ	2区・VI b	角閃石・長石・金雲母	茶灰褐色	ナデ	良好	器面凹凸
18	60	タ	1区・VI b	角閃石・長石・石英・雲母	茶褐色	ナデ	良好	繼ぎ目
	61	タ	1区・VI b	角閃石・長石	茶灰褐色	ナデ	良好	スス付着・繼ぎ目
19	62	タ	1区・VI b	角閃石・長石	茶灰褐色	ナデ	不良	スス付着・摩滅
	63	タ	2区・VI b	角閃石・長石	褐色	ナデ	不良	器面凹凸
20	64	タ	1区・VI b	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着・器面凹凸
	65	タ	1区・VI b	角閃石・長石・石英・黒雲母	暗茶褐色	ナデ	良好	摩滅
21	66	タ	1区・VI b	角閃石・長石	茶灰褐色	ナデ	不良	器面凹凸
	67	タ	2区・VI b	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	不良	器面凹凸・指跡
22	68	タ	1区・VI	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	69	タ	1区・VI b	角閃石・長石・金雲母	暗茶褐色	ナデ	良好	摩滅・砂粒多し
23	70	タ	1, 2区・VI b	角閃石・石英	茶褐色	ナデ	不良	器面凹凸
	71	タ	1区・VI b	長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	
24	72	タ	1区・VI a	角閃石・長石・金雲母	褐色	ナデ	良好	スス付着
	73	タ	2区・VI a	角閃石・長石・石英・黒雲母	茶褐色	ナデ	良好	器面凹凸
25	74	タ	1区・VI b	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	繼ぎ目
	75	タ	1区・VI b	角閃石・長石	黃褐色	ナデ	不良	
26	76	タ	1区・VI b	角閃石・長石・石英	茶褐色	荒いナデ	良好	器面凹凸
	77	タ	1区・VI b	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	器面凹凸・摩滅
27	78	タ	1区・V	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	荒いナデ	良好	スス付着・器面凹凸
	79	タ	1区・V a	角閃石・長石・黒雲母	淡茶褐色	丁寧ナデ	良好	スス付着
28	80	II	1区・VI a	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	81	タ	1区・VI b	角閃石・長石・黒雲母	淡茶褐色	丁寧ナデ	良好	スス付着
29	82	タ	1区・VI b	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	
	83	タ	1区・VI b	角閃石・長石	茶灰褐色	ナデ	良好	スス付着
30	84	タ	1区・VI b	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	85	タ	1区・V	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
31	86	タ	1区・VI a	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	砂粒多し
	87	タ	1区・V	角閃石・長石・黒雲母	暗茶褐色	丁寧ナデ	良好	スス付着
32	88	タ	1区・V	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	89	タ	1区・V	角閃石・長石	茶灰褐色	ナデ	良好	
33	90	タ	1区・VI b	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	91	タ	1区・VI	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着
34	92	タ	2区・IV	角閃石・長石	褐色	ナデ	良好	
	93	タ	2区・IV	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
35	94	タ	1区・V	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	95	タ	1区・VI	角閃石・長石・黒雲母	淡茶褐色	ナデ	良好	スス付着
36	96	タ	1区・VI b	角閃石・長石	茶灰褐色	ナデ	良好	スス付着
	97	タ	1区・VI b	角閃石・長石	茶灰褐色	ナデ	良好	スス付着
37	98	タ	1区・VI b	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着・器面凹凸
	99	タ	1区・VI a	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
38	100	タ	1区・VI a	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	
	101	タ	1区・V	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
39	102	タ	1区・V	角閃石・長石・黒雲母	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	103	タ	1区・V	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着・器面凹凸
40	104	タ	1区・V	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	105	タ	1区・VI a	角閃石・長石・黒雲母	黃褐色	丁寧ナデ	良好	
41	106	タ	1区・VI b	角閃石・長石・黒雲母	淡茶褐色	丁寧ナデ	不良	器面凹凸
	107	タ	1区・VI a	角閃石・長石	茶灰褐色	荒いナデ	良好	スス付着
42	108	III	1区・V	角閃石・長石・黒雲母	淡茶褐色	ナデ	良好	

第4表 土器觀察表

博物番号	番号	類別	区・層	胎 土	色 調	調整	焼 成	備 考
第	109	△	I 区・V	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	不良	
	110	II	I 区・VI a	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	不良	
	111	△	I 区・VI b	角閃石・長石	淡茶褐色	丁寧ナデ	不良	
26	112	△	I 区・VI a	角閃石・長石	淡茶褐色	丁寧ナデ	良好	
	113	△	I 区・VI a	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	良好	器面凹凸
	114	△	I 区・VI a	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	良好	器面凹凸
図	115	△	I 区・VI a	角閃石・長石	茶灰色	ナデ	不良	器面凹凸
	116	△	I 区・VI b	角閃石・長石	褐色	ナデ	不良	摩滅
	117	△	I 区・VI b	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	不良	器面凹凸
第	118	I	I-A・VI a	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	良好	器面凹凸
	119	△	I-C・VI a	角閃石・長石・石英	黃褐色	ナデ	不良	スス付着
	120	△	I-C・VI b	角閃石・長石・石英	黃褐色	ナデ	良好	スス付着
34	121	△	I-B・VI a	角閃石・長石・石英	黃褐色	ナデ	不良	スス付着
	122	△	I-B・VI a	角閃石・長石・石英	淡茶灰色	ナデ	不良	砂粒多し
	123	△	I-C・VI B	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	砂粒多し
図	124	△	I-A・VI a	角閃石・長石・石英・金雲母	褐色	ナデ	良好	砂粒多し・摩滅
	125	△	I-C・VI a	角閃石・長石	黃褐色	ナデ	良好	
	126	△	I-C・VI a	角閃石・長石	褐色	ナデ	良好	摩滅
35	127	△	I-A・V	角閃石・長石・石英・金雲母	褐色	ナデ	良好	スス付着
	128	△	I-B・VI a	角閃石・長石・石英・金雲母	褐色	荒いナデ	不良	
	129	△	I-B・V	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	摩滅
図	130	△	I-B・V	角閃石・長石・石英	褐色	ナデ	良好	摩滅
	131	△	I-B・VI a	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	良好	難ぎ目・摩滅
	132	△	I-C・VI b	角閃石・長石	褐色	ナデ	不良	摩滅
第	133	II	I-C・VI b	角閃石・長石・石英・雲母	茶褐色	丁寧ナデ	良好	スス付着
	134	△	I-B・VI a	角閃石・長石・石英・雲母	茶褐色	ナデ	良好	
	135	△	I-B・VI V	角閃石・長石	茶灰色	ナデ	良好	
図	136	△	I-B・VI a	角閃石・長石	茶褐色	丁寧ナデ	良好	スス付着
	137	△	I-B・VI a	角閃石・長石・石英・雲母	茶褐色	ナデ	良好	
	138	△	I-C・VI a	角閃石・長石	淡茶灰色	ナデ	良好	難ぎ目・スス付着
37	139	△	I-D・V	角閃石・長石・石英・金雲母	茶灰色	丁寧ナデ	良好	スス付着
	140	△	I-B・VI a	角閃石・長石・石英・金雲母	褐色	丁寧ナデ	良好	スス付着
	141	△	I-B・VI a	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	
図	142	△	I-B・VI a	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	丁寧ナデ	良好	多量のスス付着
	143	△	I-B・VI a	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	144	△	I-C・VI a	長石・石英・金雲母	茶褐色	丁寧ナデ	良好	
38	145	△	I-B・V	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	荒いナデ	良好	難ぎ目・スス付着
	146	△	I-A・VI a	角閃石・長石	茶褐色	丁寧ナデ	良好	スス付着
	147	△	I-B・VI a	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	
第	148	△	I-C・VI a	角閃石・長石・石英・金雲母	褐色	ナデ	良好	
	149	△	I-B・VI a	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	良好	難ぎ目
	150	△	I-D・V	角閃石・長石・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	摩滅・スス付着
図	151	△	I-B・VI a	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	
	152	△	I-B・VI a	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	
	153	△	I-B・V	角閃石・長石	淡茶灰色	ナデ	不良	
40	154	△	I-B・VI	角閃石・長石・石英	茶褐色	丁寧ナデ	良好	スス付着
	155	△	I-B・VI	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	荒いナデ	良好	器面凹凸・スス付着
	156	△	I-B・VI a	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
39	157	△	I-C・V	角閃石・長石・石英・黒雲母	淡茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	158	△	I-D・V	石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	
	159	△	I-A・VI a	角閃石・長石・石英・金雲母	黃褐色	ナデ	不良	砂粒多し
図	160	△	I-C・VI a	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	不良	スス付着
	161	△	I-B・V	角閃石・長石	茶灰色	ナデ	不良	難ぎ目
40	162	△	I-C・VI a	角閃石・長石・黑雲母	茶褐色	ナデ	不良	
	163	△	I-B・VI a	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	ナデ	良好	器面凹凸・スス付着

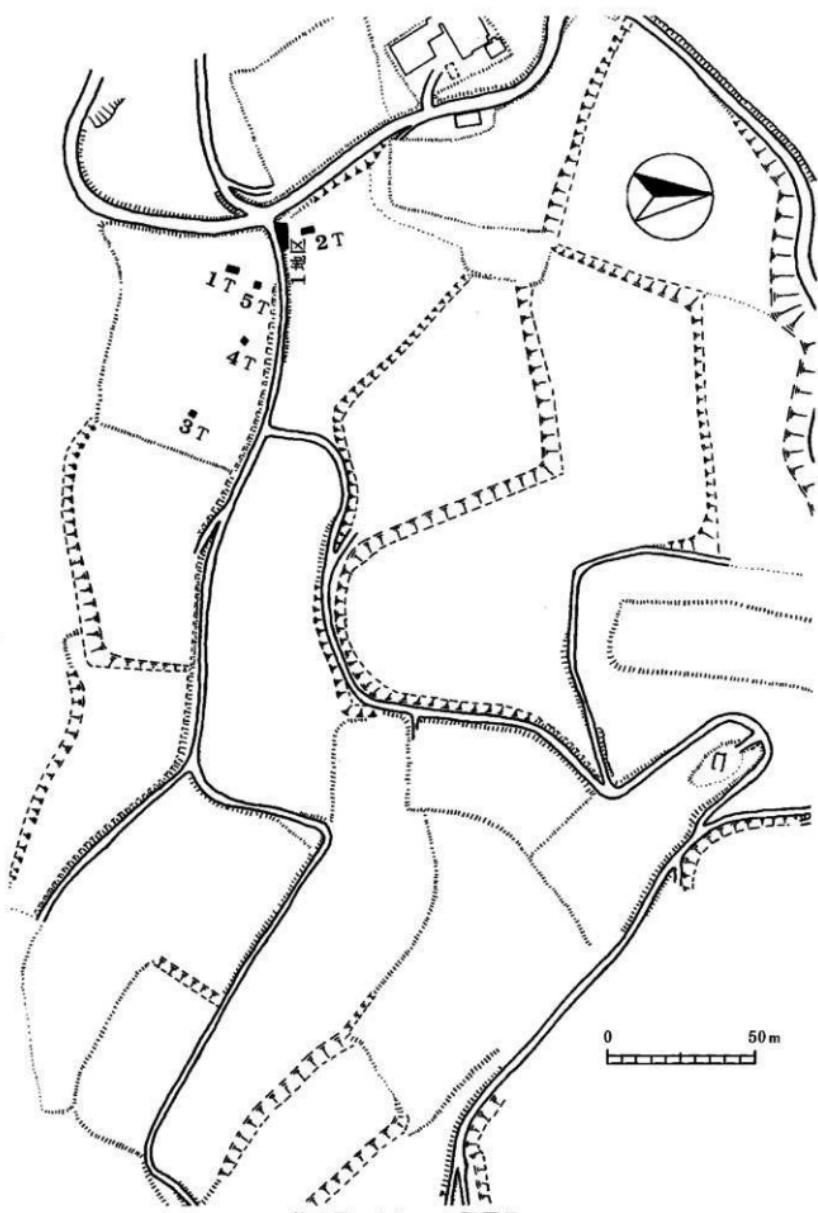
第5表土器觀察表

博物番号	番号	類別	区・層	胎 土	色 調	調 整	焼 成	備 考
第40 國	164	II	I - B - IV	角閃石・長石	淡黃褐色	ナデ	不良	器面凹凸・摩滅
	165	タ	I - C - IV	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	摩滅
	166	タ	I - B - Ma	角閃石・長石・石英・金雲母	暗茶褐色	ナデ	良好	器面凹凸・スス付着
	167	タ	I - E - IV	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	不良	スス付着
第41 國	168	タ	I - B - V	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	169	タ	I - C - Ma	角閃石・長石・黑雲母	淡黃褐色	ナデ	良好	
	170	タ	I - A - Ma	角閃石・長石・石英・金雲母	暗褐色	ナデ	良好	
	171	タ	I - C - Ma	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	スス付着・砂粒多し
	172	タ	I - C - IV	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	
	173	タ	I - C - Ma	角閃石・長石・金雲母	褐色	ナデ	良好	スス付着・摩滅
	174	タ	I - C - IV	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	175	タ	I - B - IV	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	器面凹凸・スス付着
第42 國	176	タ	I - B - Ma	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	177	タ	I - B - IV	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	難目・器面凹凸
	178	タ	I - B - Ma	石英・金雲母	茶灰色	ナデ	良好	難目
	179	タ	I - B - Ma	角閃石・長石・金雲母・黑雲母	暗茶褐色	ナデ	良好	指跡・砂粒
第43 國	180	タ	I - B - Ma	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	器面凹凸・スス付着
	181	タ	I - C - V	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	不良	器面凹凸
	182	タ	I - B - Ma	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
第44 國	183	タ	I - C - V	角閃石・長石	黃褐色	ナデ	不良	
	184	タ	I - B - Ma	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	丁寧ナデ	不良	スス付着
第45 國	185	III	I - B - V	角閃石・長石・黑雲母	茶褐色	丁寧ナデ	良好	スス付着
	186	タ	I - D - IV	角閃石・長石・黑雲母	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	187	タ	I - C - Ma	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	188	タ	I - C - Ma	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	不良	
第46 國	189	タ	I - B - V	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	良好	摩滅
	190	タ	I - C - V	角閃石・長石	黃褐色	ナデ	不良	
	191	タ	I - C - V	角閃石・長石	茶褐色	丁寧ナデ	良好	
	192	タ	I - C - Ma	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	
	193	タ	I - B - IV	角閃石・長石	茶灰色	ナデ	良好	スス付着
	194	タ	I - C - IV	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	
	195	タ	I - B - V	角閃石・長石・黑雲母	黃褐色	ナデ	良好	摩滅
	196	タ	I - B - IV	角閃石・長石・黑雲母	茶褐色	ナデ	良好	スス付着・摩滅
	197	タ	I - D - V	角閃石・長石	茶灰色	ナデ	やや	スス付着
	198	タ	I - B - IV	角閃石・長石	淡黃褐色	丁寧ナデ	不良	摩滅
第47 國	199	タ	I - D - IV	角閃石・長石・黑雲母	茶褐色	丁寧ナデ	良好	
	200	タ	I - C - V	角閃石・長石・黑雲母	茶褐色	ナデ	良好	
	201	タ	I - C - Ma	角閃石・長石	茶灰色	ナデ	良好	スス付着・摩滅
	202	タ	I - B - V	角閃石・長石	茶灰色	ナデ	良好	スス付着
	203	タ	I - B - V	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	ナデ	不良	スス付着・摩滅
第48 國	204	タ	I - C - V	角閃石・黑雲母	茶褐色	ナデ	良好	
	205	タ	I - B - V	角閃石・長石・黑雲母	茶褐色	ナデ	不良	
	206	タ	I - C - V	角閃石・長石	明茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	207	タ	I - B - V	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	不良	
	208	タ	I - C - IV	角閃石・長石・金雲母	淡茶褐色	ナデ	良好	砂粒多し
	209	タ	I - C - V	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	
	210	タ	I - B - Ma	角閃石・長石	黃褐色	ナデ	不良	
第49 國	211	タ	I - C - IV	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	212	タ	I - C - V	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	良好	
	213	タ	I - B - V	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	良好	
	214	タ	I - C - Ma	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	不良	スス付着
	215	タ	I - C - V	角閃石・長石	黃褐色	ナデ	良好	
	216	タ	I - C - Ma	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	217	タ	I - C - V	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	不良	スス付着

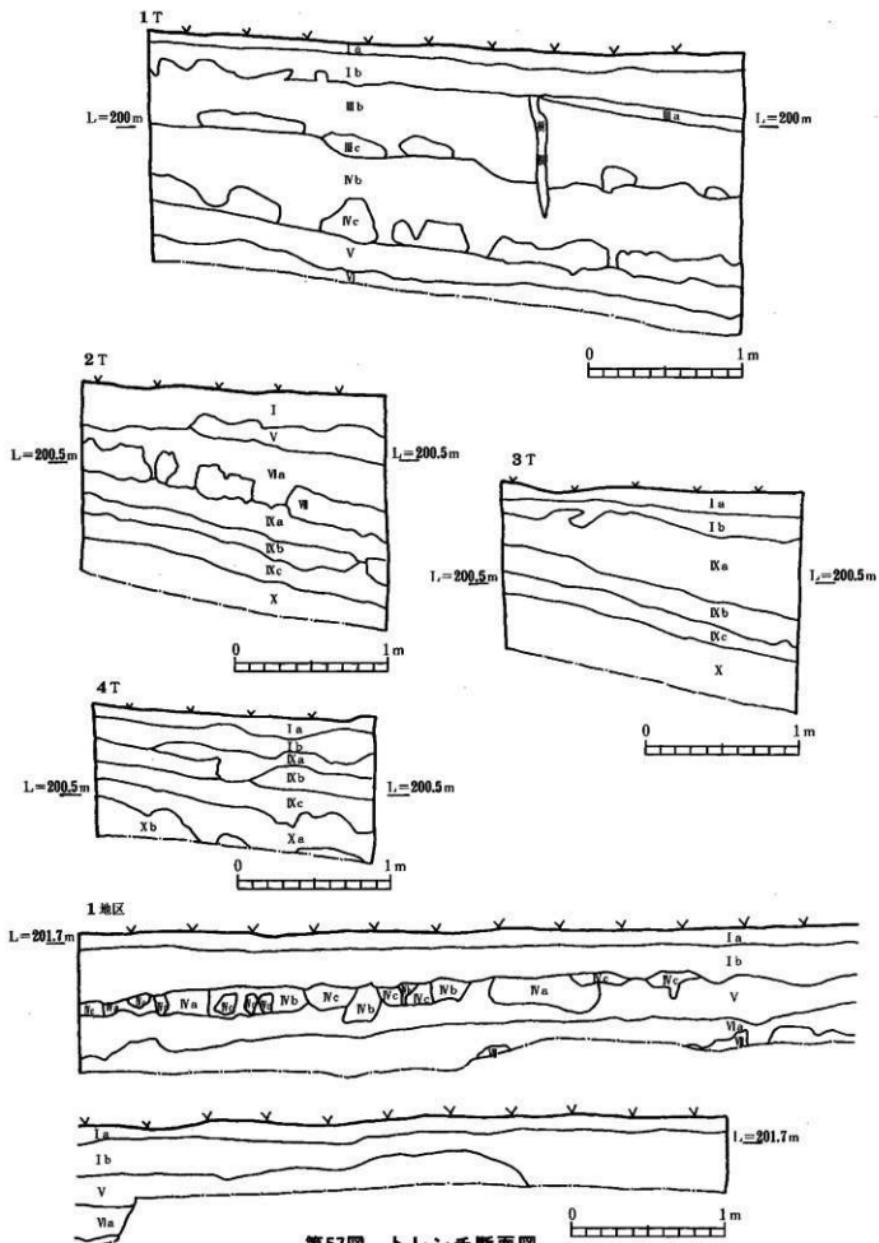
第6表 土器観察表

鉢器番号	番号	類別	区・層	胎 土	色 調	調整	焼 成	備 考
第 49 國	218	◇	I - C · N	角閃石・長石	淡黄褐色	荒いナデ	良好	継ぎ目・スス付着
	219	III	I - B · V	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	ナ デ	良好	器面凹凸・スス付着
	220	◇	I - B · VI b	角閃石・長石	黄褐色	ナ デ	良好	指跡・スス付着
	221	◇	I - C · N	角閃石・長石・石英	淡黄褐色	ナ デ	不良	
第 50 國	222	◇	I - C · N	角閃石・長石	茶褐色	ナ デ	良好	
	223	◇	I - C · VI a	角閃石・長石	黄褐色	ナ デ	不良	器面凹凸
	224	◇	I - D · N	角閃石・長石	茶褐色	ナ デ	良好	
	225	◇	I - B · VI b	角閃石・長石・黒雲母	淡茶褐色	丁寧ナデ	不良	
第 51 國	226	◇	I - C · VI a	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナ デ	不良	
	227	◇	I - B · VI a	角閃石・長石・金雲母	淡茶褐色	ナ デ	良好	器面凹凸
	228	◇	I - C · N	角閃石・長石	茶褐色	ナ デ	良好	器面凹凸
	229	◇	I - C · N	角閃石・長石	黄褐色	ナ デ	良好	器面凹凸
第 52 國	230	◇	I - C · N	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	マメツ	良好	砂粒多し
	231	◇	I - C · VI a	角閃石・長石	茶褐色	ナ デ	良好	スス付着
	232	IV	I - C · V	角閃石・長石	茶灰色	ナ デ	良好	スス付着
	233	◇	I - C · V	角閃石・長石・石英・金雲母	茶灰色	ナ デ	良好	
第 53	234	◇	I - D · N	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナ デ	良好	補修孔
	235	◇	I - B · V	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナ デ	良好	
	236	V	I - E · N	角閃石・長石・石英	茶灰色	ナ デ	良好	スス付着

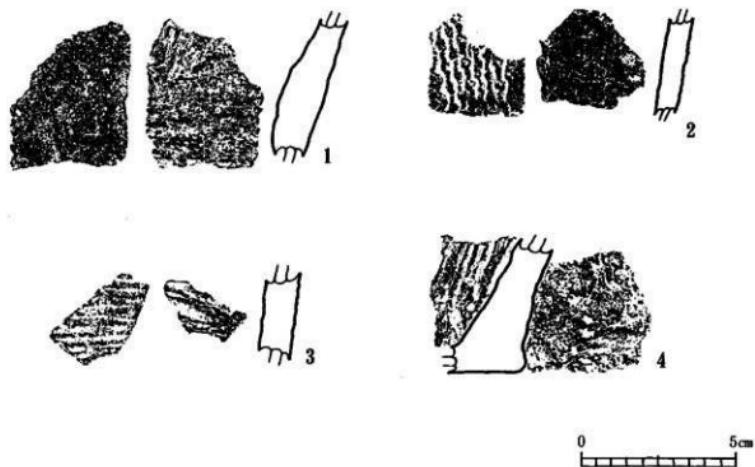
白木八重遺跡



第56図 トレンチ配置図



第57図 トレンチ断面図



第58図 表探遺物

第1節 調査の概要

白木八重遺跡は、山麓台地の基部に位置する遺跡である。

確認調査は、分布調査の結果、遺物が見られた部分を中心に遺跡の性格等を把握するために実施した。

トレンチは $2 \times 3\text{ m}$ を基本として、計5ヶ所設定した。また表探遺物が認められた部分については拡張区（第1区）を設けた。

第2節 層位

I層は、現在の耕作土である。II層は、弥生時代の時期が考えられる層である。III層は、御池火山灰を包含するものである。IV層は、いわゆる『アカホヤ』とよばれるものである。V、VI層は、縄文時代早期の時期が考えられる層である。VII層はいわゆる『サツマ』とよばれる層である。VIII層は粘質土の層である。IX層は、縄文時代創早期の時期が考えられる層である。X層はシラスである。

第3節 各トレンチの調査

第1トレンチ（第57図）

調査区南端、標高約200.5mの畠地に2×4mの大きさで設定した。遺物包含層と考えられるV、VI層は認められたが、遺物・遺構とも確認されなかった。

第2トレンチ（第57図）

2トレンチは1トレンチ北約30m、標高約201mの畠地に2×2mの大きさで設定した。II～IV層は削平されたのか、認められなかった。V、VI層からの遺物・遺構はみられなかった。

第3トレンチ（第57図）

3トレンチは2トレンチの南東約70m、標高約201mの畠地に2×2mの大きさで設定した。II～IV層は削平されたのか、認められなかった。遺物・遺構はみられなかった。

第4トレンチ（第57図）

4トレンチは3トレンチの北西約30m、標高約201mの畠地に2×2mの大きさで設定した。II～IV層は削平されたのか、認められなかった。遺物・遺構はみられなかった。

第5トレンチ

5トレンチは4トレンチの西約20mの畠地に2×2mの大きさで設定した。遺物・遺構は認められなかった。

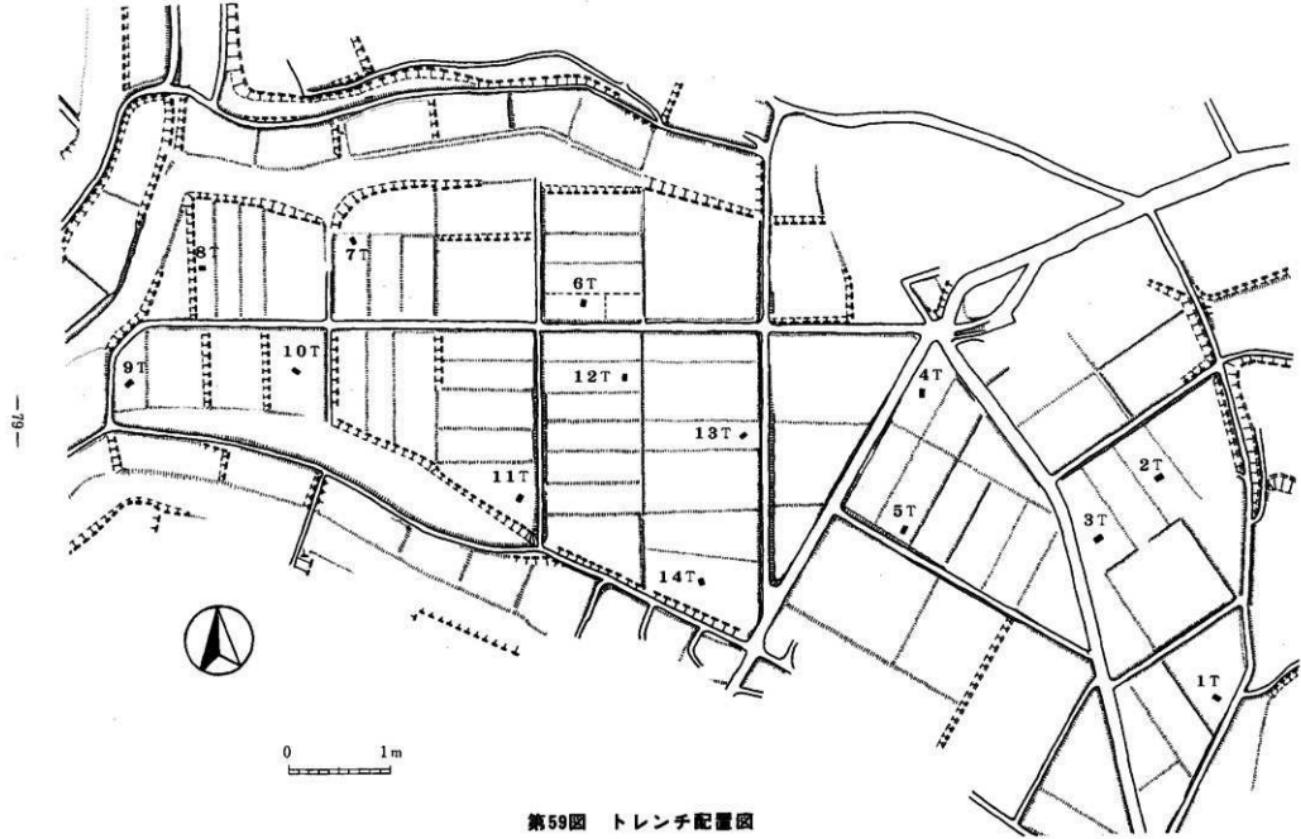
1地区（第57図）

1地区は5トレンチの西約20m、標高約202mの畠地に2×10mの大きさで設定した。遺物包含層と考えられるV、VI層は認められたが、遺物・遺構とも確認されなかった。

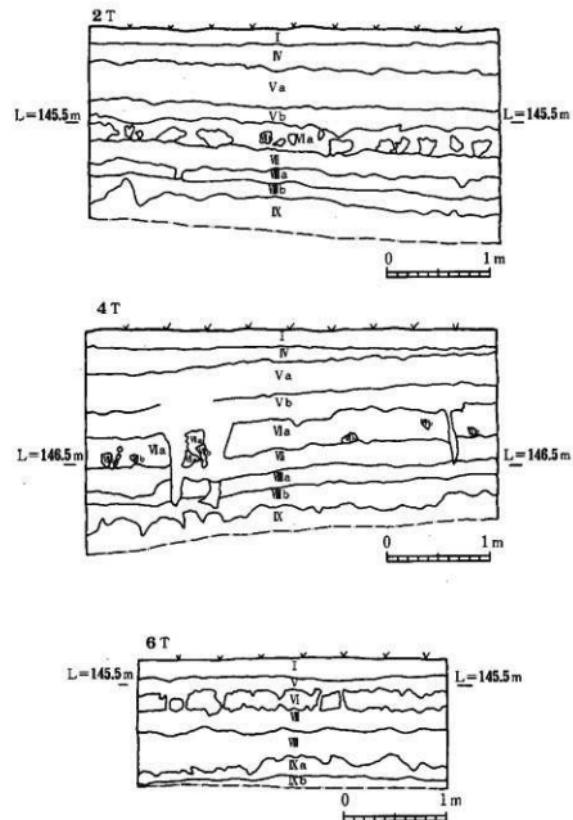
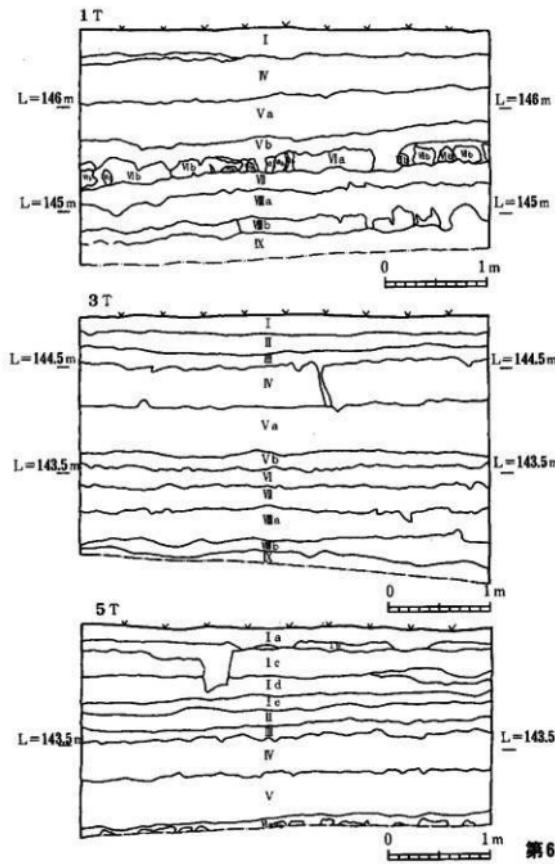
第3節 表採遺物

1は底部近くの破片と考えられるものである。2は細片であるが撚糸文が縦位に観察できるものである。3は横位に条痕が認められる。4は内面に貝殻復縁による条痕が残るものである。

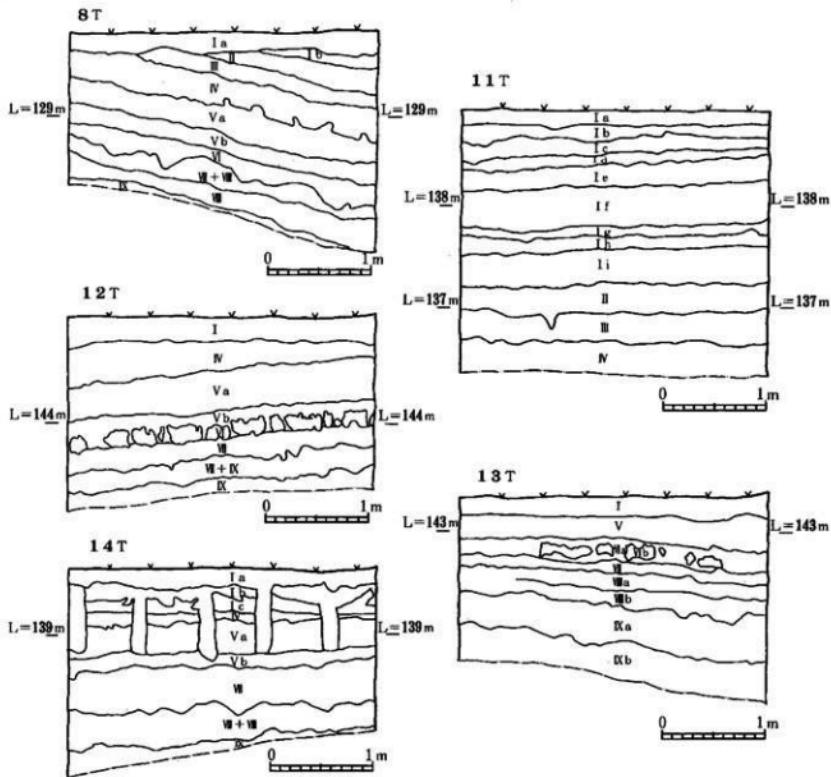
丸岡遺跡



第59図 トレンチ配置図



第60図 トレンチ断面図



第61図 トレンチ断面図

第1節 調査の概要

九岡遺跡は、広い山麓台地基部に位置する遺跡である。

確認調査は、事業計画地区となるこの台地全体に渡り、遺跡の範囲・性格等を把握するため実施し、トレンチは、 $2 \times 3\text{ m}$ を基本として、計14ヶ所設定した。

第2節 層位

I層は、耕作土で、軟質土である。II層は、御池火山灰を包含するものである。III層は、池田バミスを含む腐食土である。IV層は、いわゆる『アカホヤ』とよばれる土層で、下部にバミスが認められる。V層は、縄文時代早期の時期が考えられる層である。VI層は、硬質の土層で、

『サツマ』とよばれるものである。Ⅶ層は、縄文時代創早期の時期が考えられる層である。Ⅸ層は、粘質土の『チョコ』とよばれるものである。Ⅹ層はシラスである。

第2節 各トレンチの調査

事業対象地区に合計14ヶ所のトレンチを設定したが、遺物・遺構とも確認できなかった。ここでは選択して各トレンチについて説明を行いたい。

第1トレンチ（第60図）

調査区東端、標高約146.5mの畠地に2×3mの大きさで設定した。Ⅱ、Ⅲ層は確認されなかった。遺物・遺構ともみられなかった。

第3トレンチ（第60図）

3トレンチは2トレンチの南西約40m、標高約145mの畠地に2×3mの大きさで設定した。ほぼ基本層序であったが、遺物・遺構ともみられなかった。

第5トレンチ（第60図）

5トレンチは4トレンチの南約70m、標高約144.5mの畠地に2×3mの大きさで設定した。盛土が厚く危険だったため、途中で掘り下げを中断した。遺物・遺構ともみられなかった。

第8トレンチ（第61図）

8トレンチは7トレンチの西約70m、標高約129.5mの畠地に2×3mの大きさで設定した。ほぼ基本層序であったが、傾斜地であり、遺物・遺構ともみられなかった。

第14トレンチ（第61図）

14トレンチは13トレンチの南約80m、標高約139.5mの畠地に2×3mの大きさで設定した。I～V層にかけて人工的な堀込みが認められたが、現代の耕作によるものであろう。遺物・遺構とも認められなかった。

まとめにかえて

大長野B遺跡の立地は台地中央部であり、町内の遺跡立地が台地基部、辺縁部に集中している状況の中で注目される遺跡立地であった。しかしながら調査対象地区は個人の造成により、シラスが観察できる部分が多く、遺物包含層も露出あるいは消滅しており、部分的に遺跡が点在している状況であった。

出土遺物は、V、VI層より縄文時代早期の土器片と石鏃、磨石などであった。出土土器は深鉢形の平柄式土器と塞ノ神式土器が主体を占め、それぞれに伴うと考えられる壺形土器も出土した。これらの壺形土器は文様構成に着眼し、それぞれに類別している。

押型文土器は、少量であるが発掘調査において出土している。山形と梢円の両方が存在し、梢円押型文は梢円が小さいものと若干大きなものがあるようである。

平柄式土器は、幅広の肥厚口縁を形成するものと幅狭の肥厚口縁を形成するものの両方が存在するようである。胸部文様は結節縄文を施すタイプのようである。前畠遺跡をはじめとして南九州において資料が増加しているようである。⁽¹⁾

塞ノ神式土器は、河口貞徳氏の塞ノ神A a式土器にあたるもので、新東晃一氏の桙ノ原式土器の範疇に入るものがその主体を占める。⁽²⁾

また236は、前者の塞ノ神B c式土器に比定され、後者の三寺式土器と考えられる全体像を窺えるものである。

南九州の縄文時代早期後半の深鉢形土器に壺形土器が共伴することは、壺形土器出土遺跡の増加によって明らかになってきている。⁽⁴⁾

本町においても塞ノ神式土器に伴う壺形土器については、石踊遺跡をはじめとして下田遺跡⁽⁵⁾や夏井土光B遺跡⁽⁷⁾で出土が確認されている。このことに平柄式土器に伴う壺形土器の資料を加えるかたちとなった。

今回の調査によって、本遺跡が縄文時代早期の時代のキャブサイトであったことを窺い知ることができた。

(参考文献)

- (1)新東晃一「前畠遺跡」鹿児島県教育委員会 1990年
- (2)河口貞徳「塞ノ神式土器と轟式土器」鹿児島考古19号 1985年
- (3)新東晃一「塞ノ神式土器再考」日本民族・文化の生成 1980年
- (4)新東晃一「縄文早期の壺形土器」「縄文通信」No.4 1991年
- (5)立神次郎他「石踊遺跡」志布志町教育委員会 1979年
- (6)「下田遺跡」志布志町教育委員会 1992年
- (7)夏井土光B遺跡は、現在整理中の遺跡である。

あとがき

大長野B遺跡・白木八重遺跡・丸岡遺跡の調査報告書もようやく刊行にこぎつけた。

今回の調査は、三地区的台地で行われた確認・発掘調査であり、地主の方々をはじめとして各方面の方々に多大な御迷惑をかけた。

特に大長野B遺跡緊急発掘調査においては、道路部分の発掘調査は志布志から大久保集落に達する近道であり、一時的ではあるが遠い迂回路を利用しなければならなかつた。しかしながら地元の方々が快く協力して頂き無事調査を終了することができた。

最後になりましたが、我々と一緒に働いて下さった発掘作業員・整理作業員の皆様に心より感謝申し上げる次第であります。

発掘作業員

春口峯次 山村又男 山村照男 春口繁 森村和裕 春口フミエ 春口康子 中山俊江
田之上鈴子 片村光子 山村ハルミ 田中郁子 倉橋由美子 上杉みゆき 水流トシ子
水流ミホ子 森村イチ子 樽野次子 小山克子 竹山サツ子 小野ミエ子

(平成2年度 大長野B・白木八重遺跡確認調査)

春口峯次 春口繁 下山学 春口フミエ 春口康子 下山エル 樽野次子 柳満子
田之上鈴子 片村光子 倉橋由美子 上杉みゆき 水流トシ子 竹山サツ子 小野ミエ子
後藤のり子 田中郁子

(平成3年度 大長野B遺跡緊急発掘調査)

春口峯次 春口繁 春口稔 山村又男 西川末広 加塩則良 藤崎安雄 山下重盛
又木謙 竹之内清政 春口フミエ 春口ノリ子 坪田和子 柴洋子 加塩キミエ
新堀ミヨ子 樽野次子 上杉みゆき 安楽えつ子 見野三千子 園田奈美江

(平成6年度 丸岡遺跡確認調査)

整理作業員

生重美恵子 樽野次子 上杉みゆき 安楽えつ子 見野三千子 北村広子 園田奈美江
恒吉栄子 又木謙 深川満

写 真 図 版



大長野B遺跡遠景



大長野B遺跡近景



1地区遺物出土状況



1地区遺物出土状況



平柄式土器出土状況



平柄式土器出土状況



2地区作業風景



2地区遺物出土状況



塞ノ神式土器出土状況



塞ノ神式土器出土状況



重機による表土剥ぎ（発掘調査）



遺物出土状況



遺物出土状況



畦畔土層断面



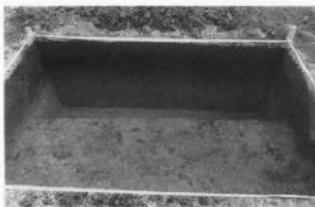
完掘状況



白木八重遠景



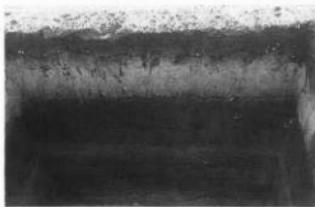
白木八重近景



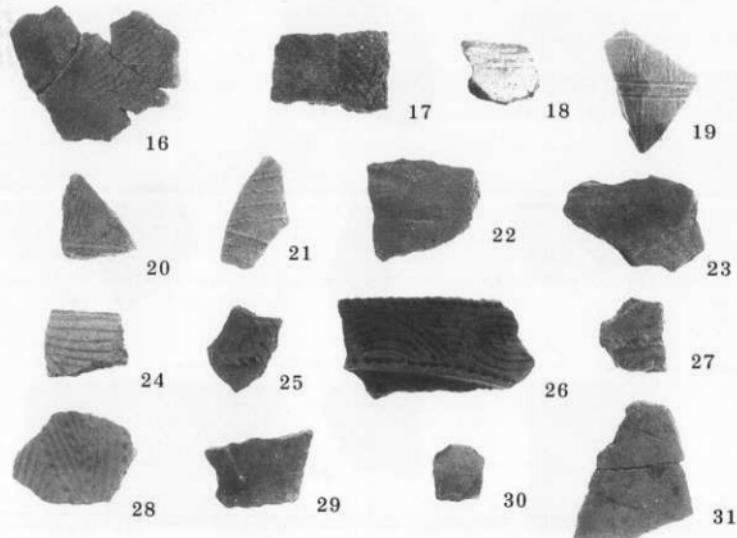
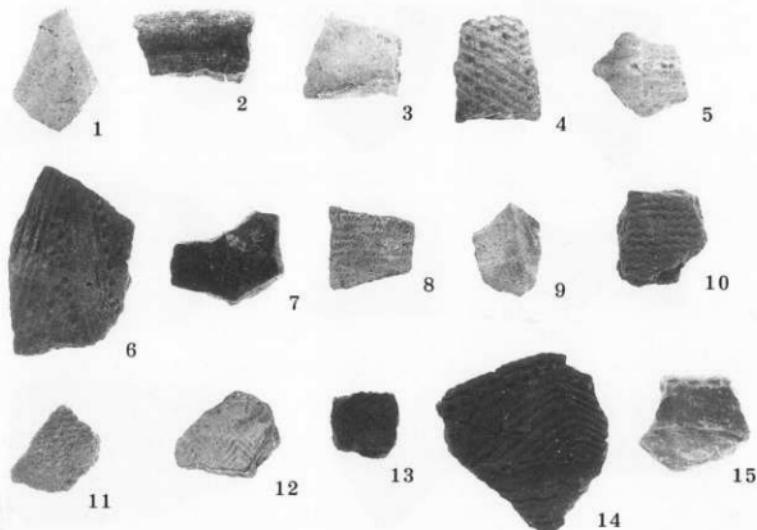
完掘状況（白木八重）



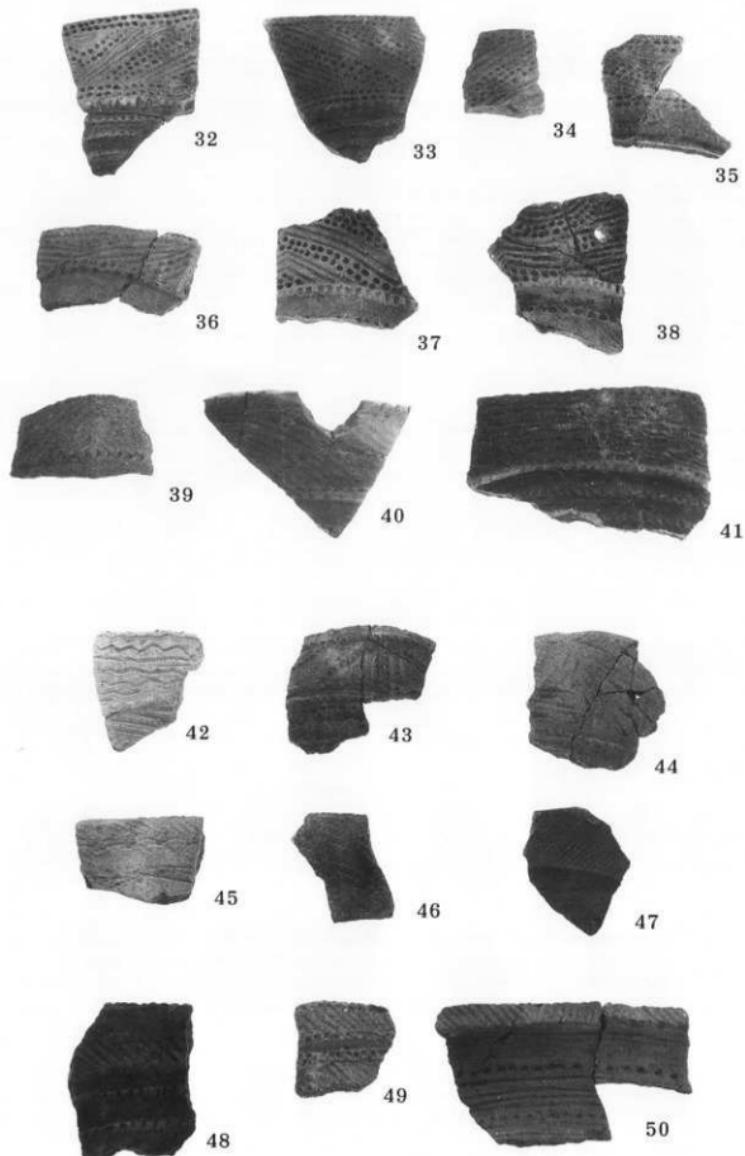
丸岡遺跡作業風景



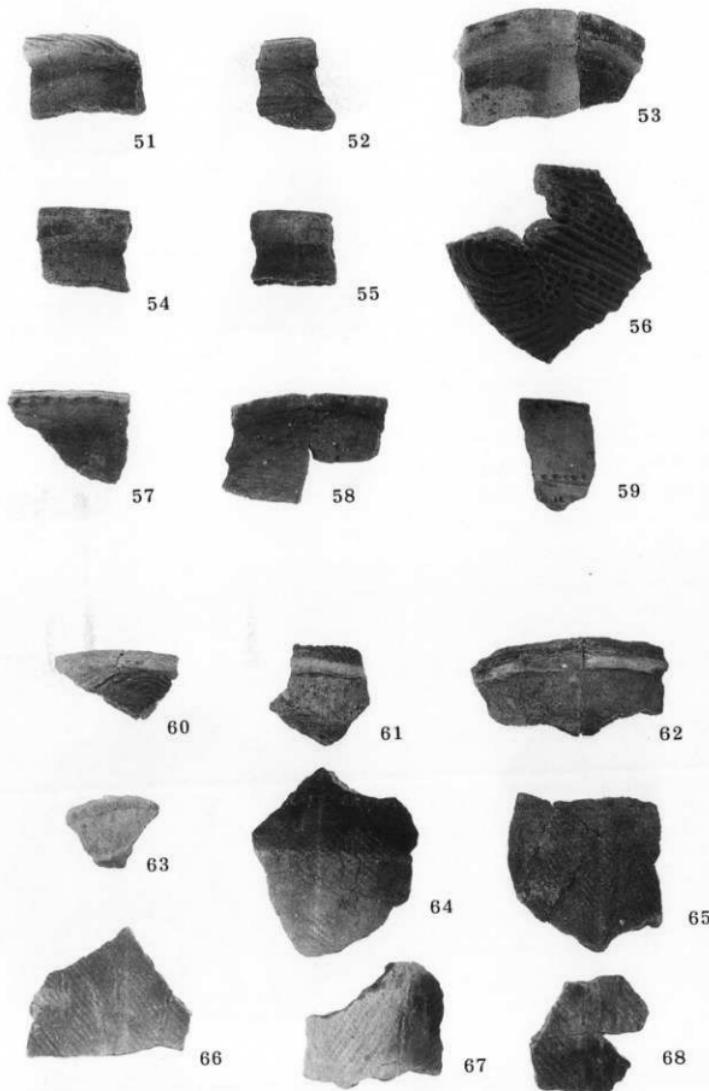
完掘状況（丸岡）



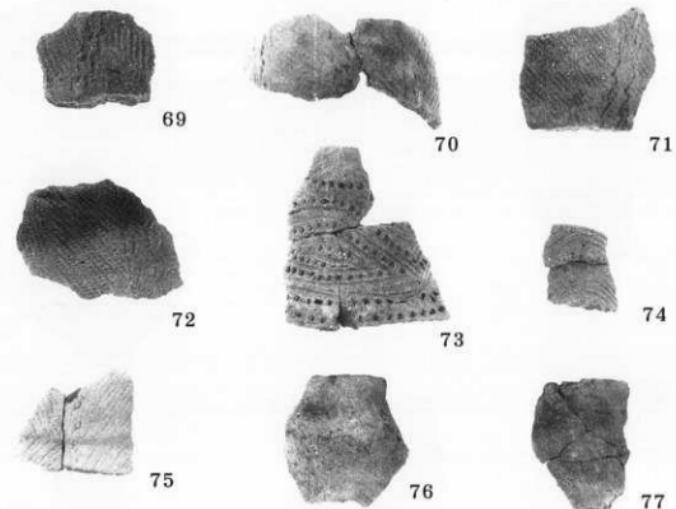
トレンチ出土遺物



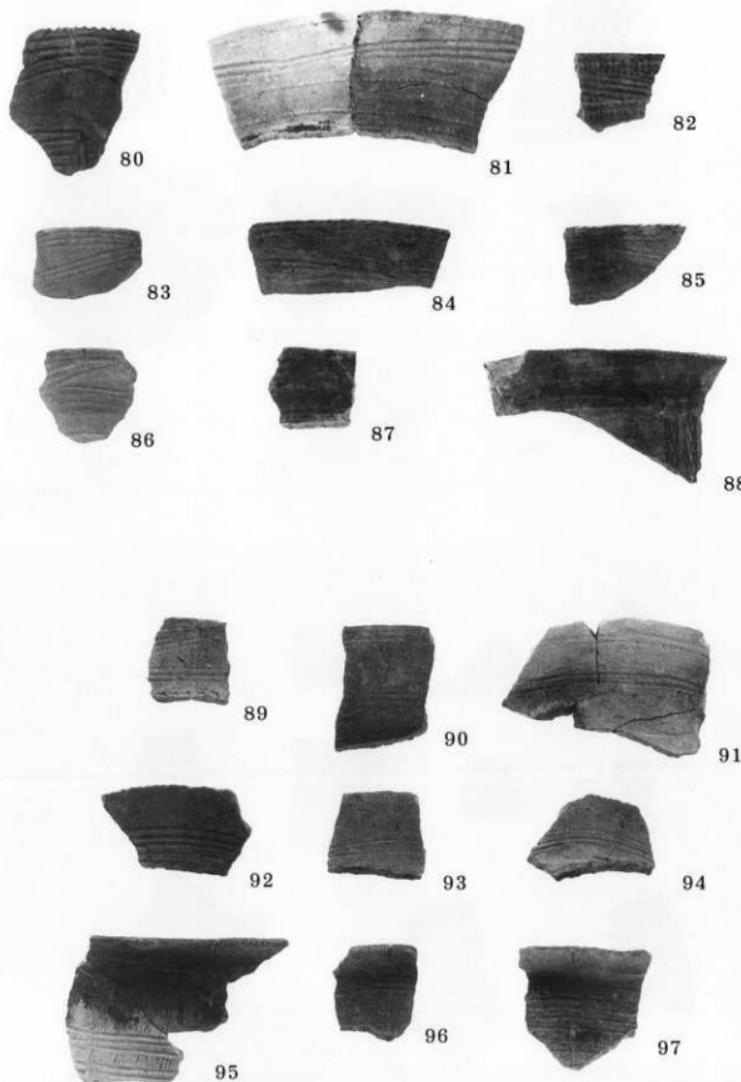
出土遺物（1）



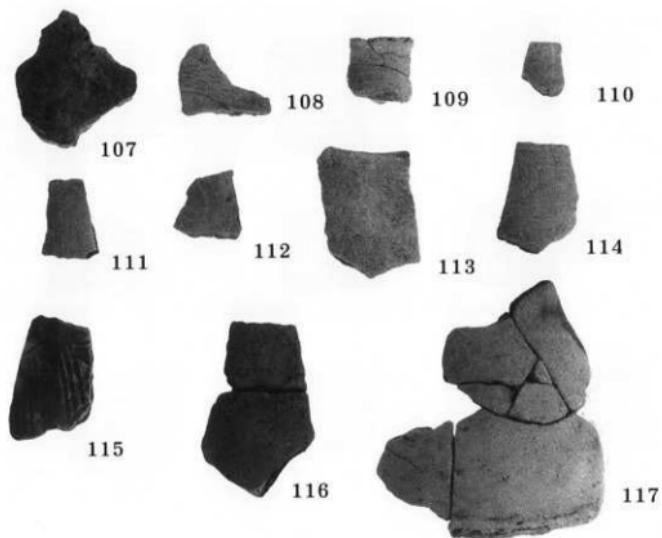
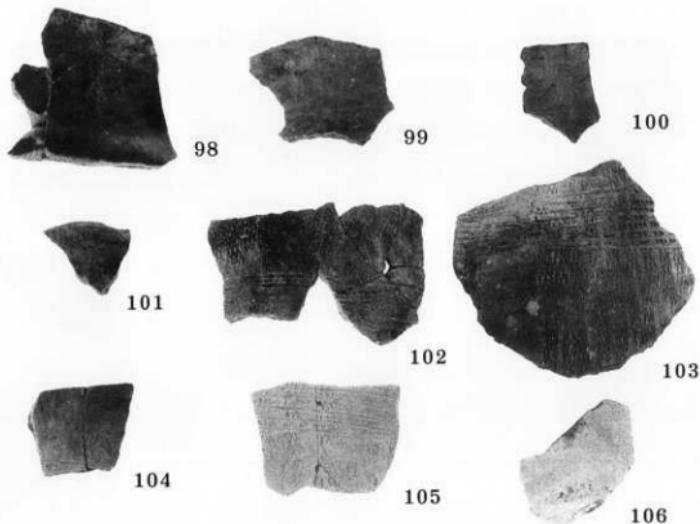
出土遺物（2）



出土遺物（3）



出土遺物（4）



出土遺物（5）



118



119



120



121



122



123



124



125



126



127



128



129



130

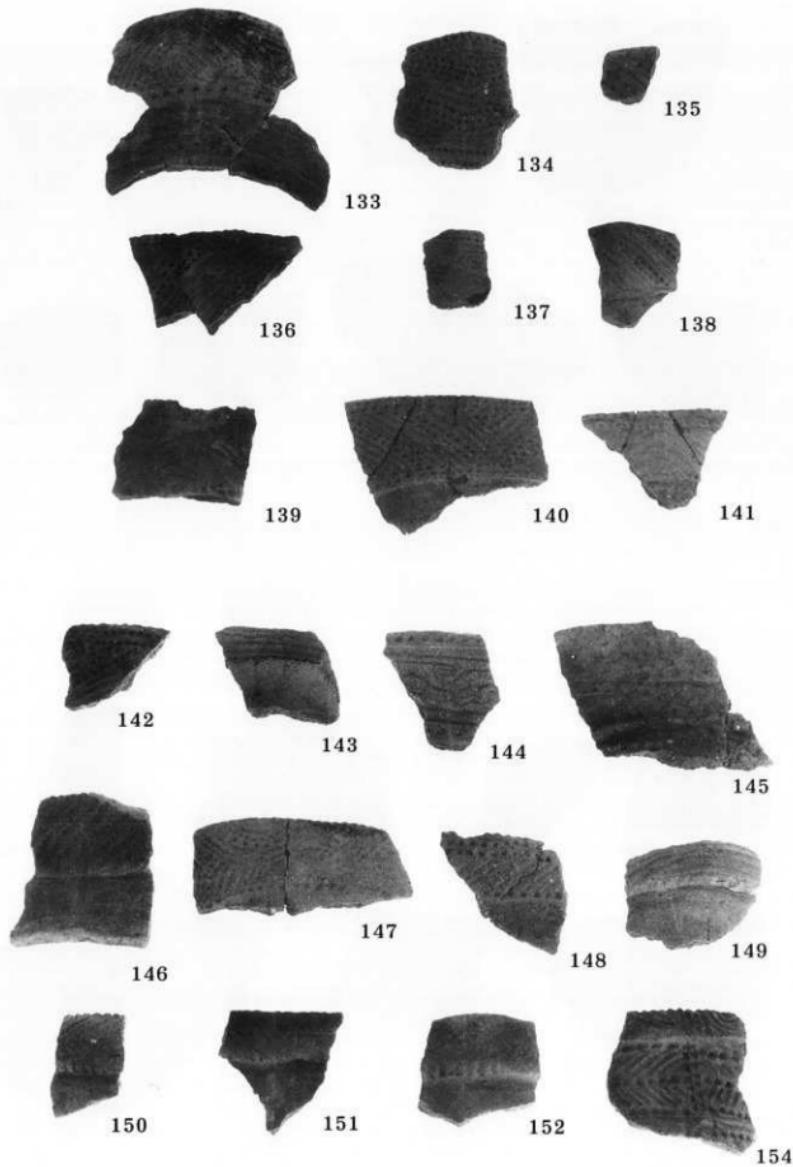


131

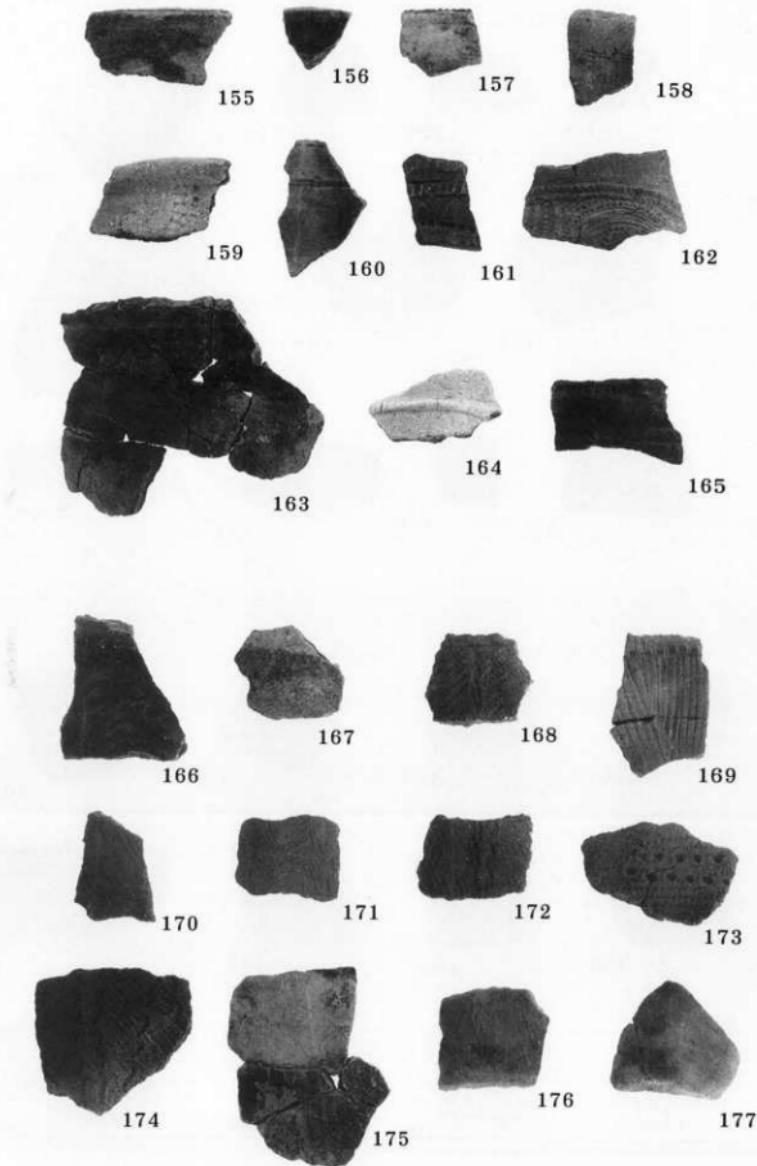


132

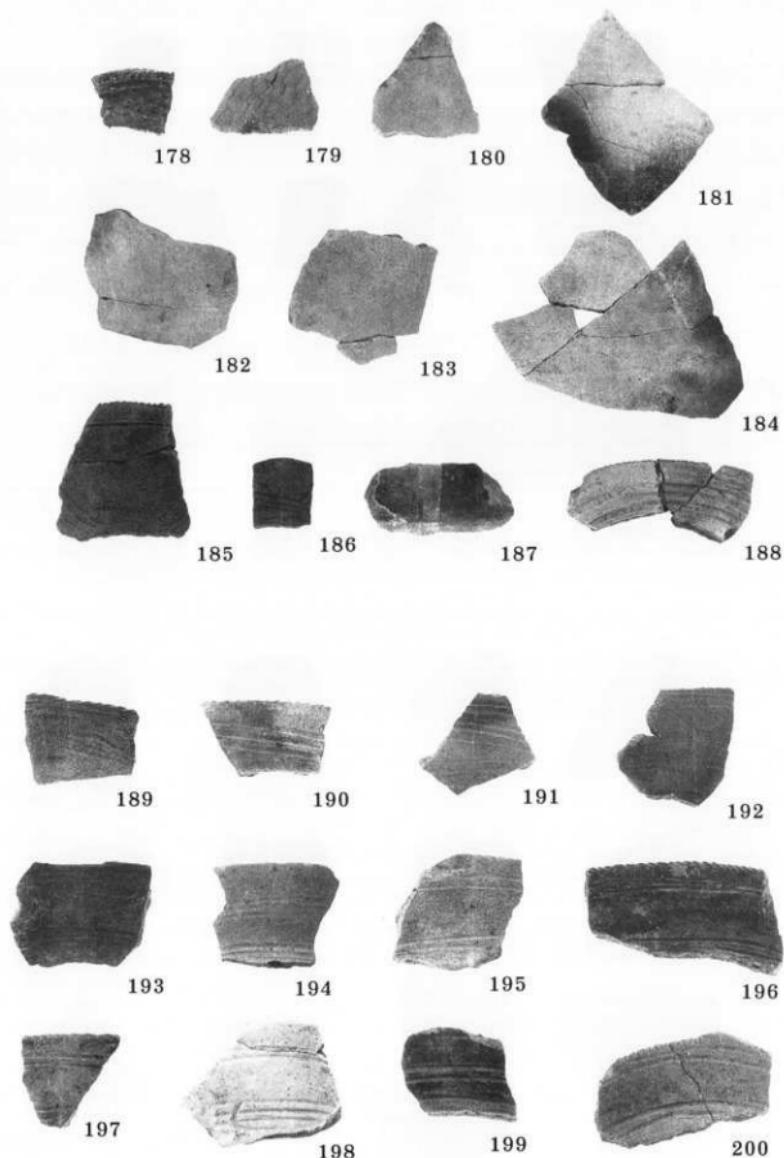
出土遺物（6）



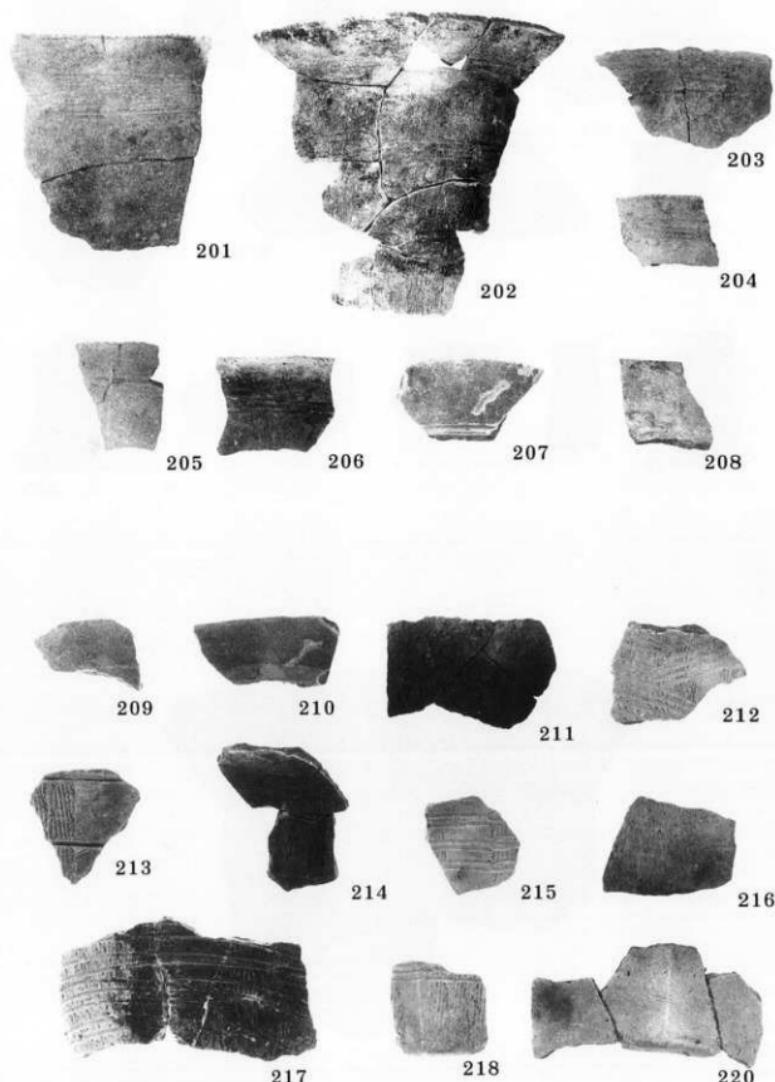
出土遺物（7）



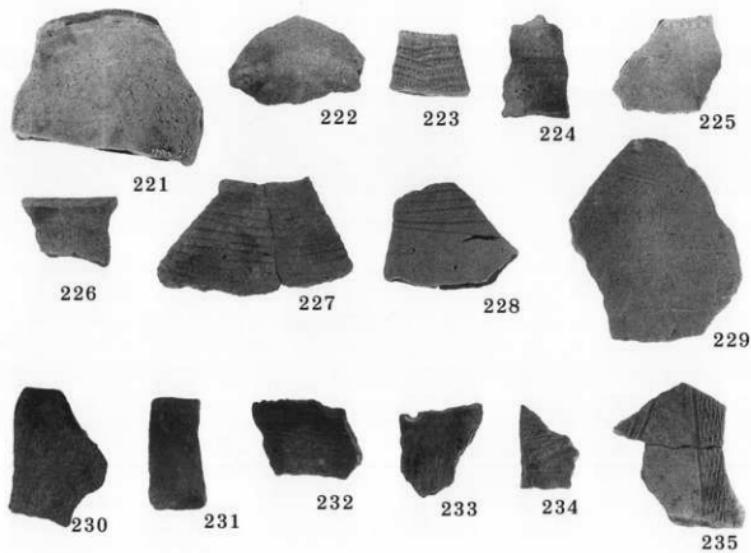
出土遺物（8）



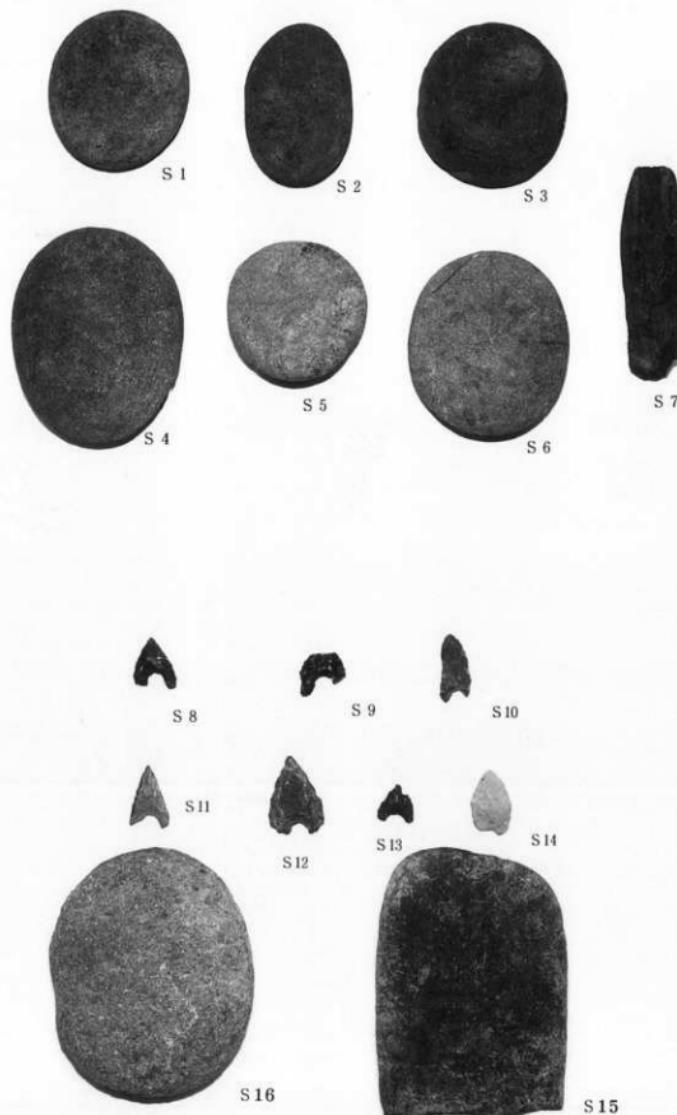
出土遺物（9）



出土遺物 (10)



出土遺物 (11)



出土遺物 (12)

